

京都大学大学院文学研究科・文学部

教員の研究活動状況（2007～2010年）

平成 23（2011）年 3 月

## あいさつ

京都大学大学院文学研究科・文学部は平成18年に創立100周年を迎え、新たなスタートを切りました。我々はつぎの100年を走り通すことができるだろうか、堂々と力に溢れ、見事なフォームを保ってゴールを駆け抜けることができるだろうか、これは私たちにとって大切な問いであります。そして、この問いに答えるための重要な条件のひとつが教員の教育と研究に対する意欲と能力です。この点検・評価報告書は、そのなかでとくに研究面についての報告を行うものです。それぞれの教員の研究業績一覧と文章形式の報告が載せられています。文章形式の報告では、これまでの研究の自己評価、位置付けと今後に向けた展望も記されています。これらを通読していただくことにより、文学研究科・文学部で行われている研究の現状と今後の展開を、一望のもとに見ていただけるものと考えています。

私たちがこの前このような自己点検・評価報告書を公刊したのは平成20年秋のことです。京都大学が国立大学法人となり、第1期中期計画が半ばを過ぎたときでした。そこでは平成18年度までのデータが収録されています。今回の報告書はそれ以降、平成22年秋までのデータを収録したものであるということになります。第1期中期計画が終わり、第2期に入ったいま、文学研究科・文学部で教育と研究に当たる私たち教員一人一人が研究面でどのような成果を挙げているか、私たちがどのような態度で研究に当たっているか、自らを省みるためにそれぞれがまとめると同時に、公表して大学内外の方々に見ていただくのが本報告書の趣旨です。

私たちは、この大学内外の方々の中に、将来京都大学で勉強することになるかもしれない皆さん、あるいはすでにそのことを希望しているという皆さんが含まれていて欲しいと願っています。上で教員の教育と研究に対する意欲と能力について書きました。しかし、大学が強い生命力を持って活動を続けるためには、もっと大切なことがあります。それは優れた能力を持ち、学習・研究の意欲に満ち溢れた学生・大学院生の皆さんに集まっていただくことです。若い学生、研究者のエネルギーを普段に受け入れることなしには、大学は自らの生命を保つことはできません。この報告書に触れた皆さんが、私たち教員の研究を通して、文学研究科・文学部で何を学べるか知り、文学研究科・文学部で学びたいという希望を持ち、そして入学したいという意思を持ってくださることを願っています。

平成23年3月

京都大学大学院文学研究科長・文学部長 佐藤昭裕

## 教員の研究活動状況（2007～2010年）

ただし2008年以降に着任した教員については、  
業績は2005年までさかのぼる

[文献文化学専攻]

### 木田 章義（国語学国文学専修教授）

#### I. 研究業績

##### 【論文】

1. 「200年ぶりの里帰り—宣賢自筆本『古語拾遺』—」、『静脩』45-4、2009年3月、pp. 14-15.
2. 「柳文抄はじめに」、『柳文抄』（臨川書店）、2010年5月、pp. 1-2.

#### II. 自己評価

近年は学生指導や雑務が多く、授業の手を抜くか、研究時間を少なくするか、どちらかの道を選ばなければならない状況であるが、ここ数年は授業と学生指導に時間を費やしている。また、時間ができたときには、日本語の発生の問題を明らかにするための基本的な勉強を行ってきたので、業績は不振である。しかし、この基礎的な勉強は一段落したので、これからの数年間は、できるかぎり研究時間を長くとり、本来の専門分野である上代語の音韻と文法の研究を再開するつもりである。

### 大谷 雅夫（国語学国文学専修教授）

#### I. 研究業績

##### 【著書】

1. 『歌と詩のあいだ—和漢比較文学論攷—』、2008年、岩波書店
2. 『室町前期 和漢聯句作品集』（共著）、2008年、臨川書店
3. 『良基・絶海・義満等一座 和漢聯句譯注』（共著）、2009年、臨川書店
4. 『室町後期 和漢聯句作品集』（共著）、2010年、臨川書店

##### 【論文】

1. 「唐紅に水くくるとは一業平の和魂漢才」、『京都大学国文学論叢』17号、2007年、pp. 1-15.
2. 「恋と命—うつせみの命を長くありこそと」、『文学』8巻5号、2007年、pp. 57-65.
3. 「『蜻蛉日記』と漢文学」、『文学』8巻6号、2007年、pp. 205-222.
4. 「伊藤仁斎の詩歌の思想」、『解釈と鑑賞』73巻10号、2008年、pp. 46-54.
5. 『佐竹昭広集第一巻 萬葉集訓詁』解説（岩波書店）、2009年、pp. 347-366.
6. 「紫式部「めぐりあひて見しやそれとも」小考」、『文学』10巻3号、2009年、pp. 182-194.
7. 「「もののあはれ」を知ることと『源氏物語』」、『世界の中の『源氏物語』—その普遍性

と現代性一』（臨川書店）、2010年、pp. 39-60.

8. 「『源氏物語』と漢文学」、『源氏物語と東アジア』（仁平道明編）（新典社）、2010年、pp. 31-59.

## II. 自己評価

『萬葉集』から中古、中世、そして近世の伊藤仁斎の詩歌についての論まで、中国文学の受容と変容を主題とする仕事を続けてきた。一点に限ることなく、文学史をまんべんなく見通すことを心がけてきたが、さらに網目を細かくする必要があることは言うまでもない。今後は、『萬葉集』の訓詁註釈の仕事をまとめることと、一般読者を対象とする和漢比較文学関係の著書を著すこと、さらに若い頃から続けてきた伊藤仁斎研究に一区切りつけることを目標としたい。

## 大槻 信（国語学国文学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『文明十四年三月二十六日漢和百韻譯注』（京都大学国文学研究室・中国文学研究室編）（共著）、2007年、勉誠出版
2. 『高山寺経蔵典籍文書目録完結編』（共著）、2007年、汲古書院
3. 『高山寺』（古寺巡礼 京都 32）（共著）、2009年、淡交社

#### 【論文】

1. 「訓点資料入門」、奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 Vol.26 『若手研究者支援プログラム(四)』、2009年、pp. 16-31、pp. 51-78.
2. 「勸修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点（巻第一）积文稿」（共著）、『勸修寺論輯』5号、2009年、pp. 1-24.

## II. 自己評価

この期間には、訓点資料を中心とした原本実地調査・研究と古辞書の研究を行った。それらの研究に基づく論文を発表したほか、啓蒙のための入門テキスト「訓点資料入門」や一般向けの書籍『高山寺』を著した。研究とその公表の両面をみたしたものとして評価できる。また、原本調査には大学院生を伴うなど若手育成にも力を注いでいる。ただし、基礎的研究が中心であったため、論文数がそれほど多くないことが反省点である。今後は、「資料の研究」にとどまらない、「資料による研究」を展開したいと考えている。同時に、若手育成と一般への発信をいっそう心掛けたい。

## 金光 桂子（国語学国文学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「真銅本系統『住吉物語』についての一考察」、『人文研究』第 56 巻、2005 年 3 月、pp. 155-170.
2. 「『松浦宮物語』の省筆・偽跋について」、国文学研究資料館平成 17 年度研究成果報告『物語の生成と受容』、2006 年 3 月、pp. 204-220.
3. 「『有明の別』と文治・建久期和歌一定家ならびに九条家歌壇との関係について一」、『文学史研究』第 46 号、2006 年 3 月、pp. 69-79.
4. 「『有明の別』の〈有明の別〉—題号の意味するところ—」、『文学史研究』第 47 号、2007 年 3 月、pp. 99-113.
5. 「『風葉和歌集』雑部の構成について」、国文学研究資料館平成 19 年度研究成果報告『物語の生成と受容』、2008 年 1 月、pp. 126-142.
6. 「『有明の別』と九条家」、『国語国文』第 77 巻第 3 号、2008 年 3 月、pp. 1-20.
7. 「若紫巻「ゆくへ」考」、『国文研ニュース』No.14、2009 年 2 月、pp. 3-5.
8. 「中世王朝物語における物の怪—六条御息所を起点として—」、『世界の中の『源氏物語』—その普遍性と現代性—』、臨川書店、2010 年 2 月、pp. 25-38.

### II. 自己評価

鎌倉初期の物語『有明の別』を主たる研究対象とし、成立年代を考証して 10 年程度の範囲に絞り込んだ上で、当時の政治・文化の中心であった九条家の周辺で作成された可能性を論じるなど、作品の基礎研究としての成果を収めた。また、成果は単発的ながら『源氏物語』にも取り組み、語彙の解釈や後世への影響について考察した。これまで研究対象が鎌倉・室町期の一定の作品に片寄っていたことを反省点とし、『源氏物語』から平安後期の物語についてもさらに理解を深めてゆきたいと考えている。

## 川合 康三（中国語学中国文学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『終南山の変容——中唐文学論集』劉維治・張劍・蔣寅訳、2007 年 8 月、中国・上海古籍出版社
2. 『王朝文学と東アジアの宮廷文学』（共著）、2008 年 5 月、竹林舎
3. 『唐代の文論』（共著）、2008 年 10 月、研文出版
4. 『中国古典文学彷徨』、2008 年 10 月、研文出版
5. 『李商隠詩選』、2008 年 12 月、岩波書店
6. 『白楽天—官と隠のはざままで—』、2010 年 1 月、岩波書店

#### 【論文】

1. 「李杜交遊攷」、『集刊東洋学』第 100 号、2008 年 11 月、pp. 63-78.
2. 「中国古典文学の存亡」、『言語文化』13-1、同志社大学言語文化学会、2010 年 8 月、pp. 1-18.

3. 「身を焼く曹植」、『三国志研究』第五号、2010年9月、pp. 3-16.

## II. 自己評価

この三、四年は二つの傾向が見られる。一つは訳注の増加、二つは時代や個人に限定されない、広い範囲を対象とする論考である。おそらくこれには年齢が要因となっているもので、今後もさらにその方向に進むことになるだろう。訳注は研究より軽視されがちだが、人文学、ことに古典学においてはまず何より可能な限り精確に読むことが肝要であり、その上に立ってどこまで深く鋭く読むかで勝負しなければならない。現在継続中の訳注作業には個人のものも共同のものもあるが、若い人たちと続けているそれは次の世代の育成の場にもなっている。研究が成熟したせいか、狭い範囲の特殊な対象に向かうきらいが一般に見られるが、それに反発する意図もあって根幹となる大きな対象、大きな問題に向き合いたいと考えている。

## 平田 昌司（中国語学中国文学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『孫子—解答のない兵法』、岩波書店、2009年

#### 【論文】

1. 「“中原雅音”与宋元明江南儒学—“土中”觀念、文化正統意識对中国正音理論的影響」、耿振生編『近代官話語音研究』（北京：語文出版社）、2007年、pp. 51-74.
2. 「從海外漢學看軸心漢學」、『中國文哲研究通訊』17.4、2007年、99-104.
3. 「胡適とヴィクトリアン・アメリカ」、『東方学』115、2008年、pp. 1-18.
4. 「木下犀潭学系和“中国文学史”的形成」、『現代中国（北京大学出版社）』第10輯、2008年、pp. 1-22.
5. 「漢語」、樺山紘一編『歴史学事典15 コミュニケーション』（弘文堂）、2008年、pp. 137-142.
6. 「審視文本：読『醒世姻縁伝』」、清代文学研究集刊（人民文学出版社）第1輯、2008年、pp. 57-65.

### II. 自己評価

2007年4月から2010年秋までに公刊したものは、(一)広義の学術史(論文1・3・4、著書1)、(二)中国近世小説研究(論文6)、(三)中国語論(論文5)に分かれる。従来からかなり研究主題が分散しており、ややまとまりを欠いている。できる限り系統的にまとめる努力が必要であると感ずる。

予定していて停滞中であるしごとには、中国語史と言語の制度化にかかわる論文がある。このしごとは未完成であるので、今後とも継続しておこないたい。また、上記論文6に関連して、近世小説『醒世姻縁伝』に関する分析も口頭発表を2010年におこなった。

## 木津 祐子（中国語学中国文学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『朱子語類』 訳注「読書法」（共著）、2009年6月、汲古書院
2. 『漢語方言解釈地図』（共著）、2009年12月、白帝社

#### 【論文】

1. 「清代琉球の官話課本にみる言語と文献」、『19世紀中国語の諸相—周縁資料（欧米・日本・琉球・朝鮮）からのアプローチ』（雄松堂出版）、2007年3月1日、pp. 151-174.
2. 「『伝秀吉所持扇面』の日中対訳語彙—非訳館系日中対訳資料の系譜」、『華夷訳語論文集』（大東文化大学言語教育センターフォーラム13号）、2007年10月、pp. 59-72.
3. 「『百姓』の成立と傳承—官話課本に刻まれた若き久米村通事たち」、『東方学』115号、2008年1月、pp. 123-140.
4. 「「官話」文體と「教訓」の言語—琉球官話課本と『聖諭』をめぐって」、『吉田富夫先生退休記念中国学論集』（汲古書院）、2008年3月、pp. 449-462.
5. 「乾隆二年八重山難民浙江省漂着事件における官話訊問について—『呈稟文集』及び「八重山家譜」を中心に」、関西大学アジア文化交流研究センター紀要『アジア文化交流研究』第3号、2008年3月、pp. 33-50.
6. 「琉球の官話課本 “官話”文体与“教訓”言語」、『域外漢籍研究集刊』4集（中華書局）、2008年5月、pp. 17-33.
7. 「『山西鎮辺垣布陣図』（仮称）に関する地理学、文献学、絵画論的調査—予備的考察」（共著）、『京都大学文学部研究紀要』49号、2010年3月、pp. 1-53.
8. 「唐通事の「官話」受容—もう一つの「訓読」—」、『続「訓読」論—東アジア漢文世界の形成』（勉誠出版）、2010年11月、pp. 260-291.

### II. 自己評価

前回の報告以降も、清代の琉球・長崎の中国語通訳（通事）の著した語学教材（通事書）を題材として、当時学ばれた中国語共通語（官話）に関する研究を継続している。これら通事職は、主として移民華人の子孫が担った専門職掌であったが、本研究を通じて、彼らが多様な中国語文献を学習・翻訳して通事書に応用する過程には、習得した官話の地域的特性、使用環境の要求する言語モード、さらに学習者の中華に対する自己同定の在り方等が大きな影響を及ぼしていることを明らかにした（論文1、3、4、5、6）。これは先人の研究では均しく看過されてきた事象である。またこれら通事書がそれぞれ有する言語的特質を明らかにするため、同時代の中国語白話文献について、また中国語諸方言の共時的研究も同時に行っており、共著1、2はその成果の一つである。今後は、これら通事書の全体的な体系を明らかにし、その歴史的位位置づけを明確にするため研究を継続する予定である。

## 緑川 英樹（中国語学中国文学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『京都大学蔵実隆自筆 和漢聯句訳注』（共著）、2006年2月、臨川書店
2. 『良基・絶海・義満等一座 和漢聯句訳注』（共著）、2009年3月、臨川書店

#### 【論文】

1. 「欧陽脩の美醜意識とその表現—韓愈詩『醜悪の美』の受容をめぐって—」、『神戸外大論叢』第56巻第7号、2005年12月、pp. 61-84.
2. 「方回の梅堯臣評価について」、『神戸外大論叢』第57巻第1～5号合併号、2006年6月、pp. 209-238.

#### 【翻訳】

1. 林中明「白楽天のユーモア」、『白居易研究年報』第5号、2004年8月、pp. 138-153.
2. 査屏球「海外中国古典文学訪談録」（共訳）、『中国学研究』第9輯（復旦大学中国古代文学研究中心編）、2007年4月、pp. 469-480.
3. 莫砺鋒『莫砺鋒詩話』「序」「時間」（共訳）、『颯風』第43号、2007年12月、pp. 67-82.
4. 莫砺鋒『莫砺鋒詩話』「四季」「春」（共訳）、『颯風』第44号、2008年7月、pp. 77-99.
5. 莫砺鋒『莫砺鋒詩話』「秋」「佳節」（共訳）、『颯風』第46号、2009年7月、pp. 55-80.

### II. 自己評価

近年は、博士論文以来の研究課題である中唐期から北宋中期における詩と詩論の展開という問題に関心を抱きつつ、個別的には梅堯臣・欧陽脩などの詩人を中心に研究をつづけている。ただし、2007年以降は注釈・翻訳の作業に多くを費やしており、それ自体は意義深い成果ではあるものの、当初の課題をさほど深化させられていないことを憾みとする。2009年度より、「北宋中期における文人ネットワークと酬唱詩の研究」という題目で科学研究費補助金（若手（B））を交付されており、来年度がその最終年にあたる。今後は科研成果の公刊をはじめとして、論文の生産性、発表頻度の向上に努めたい。また、目下、複数の研究者と共同で進めている中国古典詩の訳注作業についても、徐々にその成果を公表してゆきたい。

## 池田 秀三（中国哲学史専修教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「鄭学における「毛詩箋」の意義」、渡邊義浩編『両漢における春秋と詩』、汲古書院、2008年2月、pp. 287-326.
2. 「鄭玄の六天説と両漢の礼学」、渡邊義浩編『両漢儒教の新研究』、汲古書院、2008年12月、pp. 137-166.
3. 「黄侃〈禮學略説〉詳註稿（二）」、『中国思想史研究』第29号、2009年3月、pp. 125-175.
4. 「訓詁的虚與實（石立善譯）」、『中國經學』第五輯、2009年10月、pp. 1-23.



5. “Cheng Hsüan’s Theory of Six Heavens and Ritual Scholarship during the Han.” *ACTA ASIATICA* (*The Culture of “Heaven” in the Former and Later Han*) No.98, 2010年2月, pp. 77-98.

## II. 自己評価

5は2の英訳であり、4は旧稿の中国語訳なので、新作は実質的には三篇で、量的には自慢できる数字ではない。また内容も新味に欠けており、卓越した業績と呼べるような代物ではないが、いま鄭玄や礼学について論じようとする人の参照に供し得るだけのレベルは保っているとの自負はある。定年間近の身として、新たな展望とてないが、これまでの研究のまとめと補訂だけはしておきたい。

## 宇佐美 文理 (中国哲学史専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『『歴代名画記』〈気〉の芸術論』(書物誕生—新しい古典入門)、2010年、岩波書店

#### 【論文】

1. 「「形」についての小考」、『中國文學報』第七十三冊、2007年、pp. 1-13.  
2. 「「版本の美学」序説」、『〈醜〉と〈排除〉の感性論—否定美の力学に関する基盤研究—』(科学研究費補助金基盤研究(A)研究報告書)、2008年、pp. 25-35.  
3. 「中国藝術における「精」、『中国思想における美・気・忌・死』(「〈醜〉と〈排除〉の感性論—否定美の力学に関する基盤研究—」科学研究費補助金基盤研究(A)研究報告書附篇)、2008年、pp. 201-212.  
4. 「『山西鎮辺垣布陣図』(仮称)に関する地理学、文献学、絵画論的調査—予備的考察」(共著)、『京都大学文学部研究紀要』第49号、2010年、pp. 1-53.

#### 【訳注】

1. 「『朱子語類』卷一四～一八訳注(一)」(共著)、『京都府立大学学術報告』人文第六十一号、2009年、pp. 53-142.

## II. 自己評価

専門に関わる業績としては、2009年、2010年は、共同研究によるもののみとなっているが、ひとつには、岩波書店より刊行した書物が、一般を対象としてはいるものの、これまでの論考で得られた見解を随所に配置したものとなっており、いわばこれまでの研究のまとめとなっていること、さらに、11年度刊行予定の論文が三編(内容はそれぞれ芸術、宗教、術数に関わるもの)あることから、専門論文のペースはある程度保っているものと思われる。今後は、中国芸術理論史の研究を継続すると同時に、その三編の研究内容を充実させることを予定している。具体的には、一つは中国宗教思想史における信仰の問題、もう一つは、術数学と芸術学との連関の問題である。

## 横地 優子 (インド古典学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「第9章 文学史のながれ」 山崎元一・小西正捷編『世界歴史大系・南アジア史1：先史・古代』、山川出版社、2007年、pp.294-317.
2. “A First Edition and Translation of Bhatta Ramakantha’s Tattvatraya- nirnayavivrti.” (Domic Goodall, Kei Kataoka, Diwakar Acharya と共著) , *South Asian Classical Studies* No.3, 2008, pp.311-384.
3. 「グプタ期におけるヒンドゥー教大伝統の形成—神話と図像から—」、『インド世界への憧れ—仏教文化の源郷を求めて—』(シルクロード・奈良交際シンポジウム記録集 No.9)、シルクロード学術センター、2008年、pp.24-38.
4. 「サンスクリット詩の理解にむけて」、平成17-19年度科学研究費基盤研究(A)研究成果報告書(研究代表者：水野善文)、2008年、pp.101-114.
5. 「処女戦士が最高神となる時」、『アジア女神大全』、青土社、2011年2月、pp.345-363.

### II. 自己評価

この期間の主要な研究は、前期間に暫定的な校訂を完了した、スカンダプラーナ中のヴィンデイヤ山女神神話サイクルの校訂について、新しく獲得した写本を含めた写本間の関係の再検討を行い、校訂テキスト・シノプシスを全面的に改訂し、長期にわたった校訂作業を完了させたことである。現在序文執筆とインデックス作りを行っており、2011年秋には *Skandapurana Volume III : Vindhyavasini Cycle* としてグロニンゲンから出版される予定である。第2は、2006年度までに行なった、このテキストを主材料とする7世紀までのインドの戦闘女神の成立史研究について、それに続く8世紀前後の文献、及び女神信仰と関係の深いシヴァ教の当時の教理(論文2)の研究を行なった。その成果はまだ十分にまとめきれておらず、2006年度までの成果とあわせて、単行本として2012年度の出版を計画している。成果の概要は論文5にまとめている。以上の研究は科学研究費基盤研究(C)(No.1920300)の補助を受けて行われた。その他として、サンスクリット詩の表現分析の研究を開始し(論文4)、2012年度以降はこちらの研究にもより多くの時間を割く予定である。

## 宮崎 泉 (仏教学専修専任准教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「『中観優波提舍開宝篋』テキスト・訳注」、『京都大学文学部研究紀要』46、2007年、pp.1-126.
2. “Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)- His Philosophy, Practice and its Sources.” *The Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 65, 2007, pp. 61-89.
3. 「アティシャ作『菩提道灯細注』に説かれる律について」、『印度学仏教学研究』56-2、2008年、pp.(120)-(125).

4. 「『禅定灯明論』に説かれる漸門派説について」、『仏教史学研究』51-1、2008年、pp. 1-23.
5. 「大乘仏教における空性と慈悲—その関係、機能と実践の一断面—」、『哲学研究』587、2009年、pp. 1-22.
6. 「アティシヤの二諦説再考」、『印度学仏教学研究』58-1、2009年、pp. (128)-(132).

## II. 自己評価

引き続き11世紀のインド後期の大乘仏教を基点にインド仏教とチベット仏教の研究を続けている。研究の根幹は11世紀のチベットにインド仏教を伝えたアティシヤの研究にある。論文1、2、3、6はそれに関連し、11世紀のインド仏教を扱ったものであるが、中でも特に6はこれまでの学説を再考し、インド中観派全般の理解の再検討にも繋がるもので重要な意味を持つ。また、5は誤解されることも多い空性と慈悲の関係を初期大乘経典を用いて明らかにした上で、同じ関係が後期の大乘仏教まで受け継がれていることを実践の中で確認したものであり、特に重要である。このようにインド仏教については初期大乘仏教にまで研究範囲を広げ、大乘仏教の展開に関する研究に取り組んでおり、今後はさらにこの方向に研究を深めていく予定である。チベット仏教についてはまだ論文となった数は少ないが、4で扱ったアティシヤ以前の仏教の状況や、アティシヤの伝えた仏教を明らかにする中で、アティシヤ以降チベットで発展していく仏教を研究するための基盤を整備しつつある。

## 高橋 宏幸（西洋古典学講座教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『はじめて学ぶラテン文学史』（編著）、2008年10月、ミネルヴァ書房
2. 『カエサル『ガリア戦記』歴史を刻む剣とペン』、2009年5月、岩波書店

#### 【論文】

1. 「「固い種族」の技術と労苦—ウエルギリウス『農耕詩』」、植月恵一郎他『農耕詩の諸変奏』、英宝社、2008年5月、pp. 31-61.
2. 「ローマ喜劇と狂言に見る「芝居」」、『古代ギリシア・ローマ喜劇と狂言の比較研究』（平成18～20年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）、2009年3月、pp. 12-29.
3. 「ウエルギリウス『アエネーイス』後半における苦難の終わり始まり」、『Anglo-Saxon語の継承と変容—中世英文学—』第1巻（専修大学出版局）、2009年3月、pp. 95-146.
4. 「ラテン文学に見る靈魂と伝統」、『アジア遊学』128号、2009年12月、pp. 50-59.
5. 「プラウトゥス『バッキス姉妹』における策略と成功」（共著）、『西洋古典論集』22号、2010年3月、pp. 216-248.
6. 「文字、手紙、文学」、『西洋古典学研究』58号、2010年3月、pp. 102-110.

### II. 自己評価

2007-2009年度はラテン文学の総体的特色について研究の進展があったと自身では評価している。主要な成果は、メタ演劇性という観点に立つてのローマ喜劇から喜劇性そのものへも論及し

た考察（論文3、5）、ウェルギリウスの詩作を labor（苦難、労苦）という視点から捉え直した解釈（論文1、3）、また、これまであまり顧みられなかったカエサル著作の文学性と叙述技法に光を当てるとともに、そこにラテン文学黄金期へ脈を通じる要素のあることを示した著書2、初学者向けながら、時代順の配列ではなく、文学ジャンルによる章立てによってラテン文学の多様性と伝統継承をより明解に示した著書1などである。加えて、オウィディウスの神話叙述の表現技法に関する研究を博士学位論文にまとめることができた（2010年1月）。これらの成果をふまえ、今後さらにラテン文学の表現の特質について考究を進める。

## マルティン・チエシュコ（西洋古典学講座准教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. “From Comic Flights to Generic Acceptance.” *Humaniora Kiotoensia. On the Centenary of Kyoto Humanities*, Graduate School of Letters, Kyoto University 2006,3, pp. 359-367.
2. 「アリストパネースの喜劇と狂言」、『ギリシア喜劇全集』（別巻）、久保田忠利、中務哲郎（編集）、岩波書店、2008年、pp 307-338.
3. “Techniques of foreshadowing and character presentation in Menander's *Aspis* in the light of Greek dramatic tradition.”、『西洋古典論集—中務哲郎教授退職記念号』XXII、2010年、pp. 163-215.

#### 【書評】

1. S. Halliwell, *Greek Laughter: A Study of Cultural Psychology from Homer to Early Christianity*、『西洋古典学研究』LVIII、2010年、pp. 127-130.

### II. 自己評価

I joined the Classics department in October 2009. Since then my research has focused on the Greek language and literature. My current (language-oriented) projects include: writing a grammar book of Attic Greek (in cooperation with Koji Hirayama) and holding a practical seminar on Greek stylistics. There is a serious need for a modern comprehensive textbook of ancient Greek for university students, but this is a long-term project, with no concrete deadline.

My research in Greek and Latin literature concentrates on drama, both tragedy and comedy, but these days especially Menander and the vexed problem of Roman adaptations of Greek New Comedy.

After a four-year hiatus I am also working hard on improving my Japanese language skills.

## 佐藤 昭裕 (スラブ語学スラブ文学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「『過ぎし年月の物語』の文体と『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の言語—対照研究の試み—」、『京都大学文学部研究紀要』47、2008年、pp. 1-82.
2. “Stil’ povestvovanija drevnerusskoj letopisi «Povest’ vremennyh let» i jazyk Žitij Kirilla i Mefodija: opyt sopostavitel'nogo issledovanija.” *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures 2008: Japanese Contributions to the 14th International Congress of Slavists*. 2008. pp. 1-40.
3. “Struktura teksta Povesti vremennyh let i šachmatovskaja teorija ego formirovanija.” *Drevnjaja Rus': voprosy medievistiki*. 30 (3). 2008. pp. 60-61.

### II. 自己評価

古ロシア語および古教会スラブ語という2つの文献言語の分析を軸に、中世スラブ世界における文章語形成の歴史を研究している。とくに古教会スラブ語が、中世ロシア文章語の成立に与えた影響を考察している。その際、伝統的な音韻的、語彙的観点からの議論に限定することなく、談話的、テクスト的観点を取り入れた分析を行っている点が特徴的であると考える。目下の関心はそれぞれ近称、中称、遠称とされるスラブ語の指示代名詞 *сь*、*тъ*、*онь* のテクスト内での使用の条件と、ギリシア語の対応する代名詞の用法の関係である。この研究は、必然的に福音書や七十人訳といったギリシア語原典と古教会スラブ語テクストの対照研究を意味し、膨大なデータを精密に扱う必要があるため、当初計画したペースで進んでいない点を反省している。一方で、研究の領域を拓げる努力として、15世紀以降の中世ロシア文学の研究、訳注の作成等の仕事も始めている。

## 西村 雅樹 (ドイツ語学ドイツ文学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『世紀末ウィーン文化探究—「異」への関わり』、2009年、晃洋書房

### II. 自己評価

20世紀以降の世界の文化動向にも大きな影響を与えたことで知られる、19世紀末から20世紀初頭にかけての「世紀末ウィーン文化」に関して、『世紀末ウィーン文化探究—「異」への関わり』においては、ユダヤ系知識人のキリスト教を基盤とする西欧文明への同化のあり方と、西洋近代文明への批判的意識に基づく文学者バールらの日本文化への関心という二つの問題を扱った。これまでほとんど注目されなかったものをはじめ多くの文献・資料を駆使した本論考は、当該分野の研究に寄与するところがあったと思われる。この二つのテーマのうち、ユダヤ人問題

に関しては、ドイツで出版されたユダヤ関係の事典を翻訳する長年にわたる作業も目下仕上げの段階にある。パールに関しては、一般の読書人向けに彼の評論を紹介する著作に近々取りかかると共に、ウィーン分離派との関係を通して彼の根本的な問題意識を探る研究もさらに進めていく予定である。

## 松村 朋彦（ドイツ語学ドイツ文学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『越境と内省—近代ドイツ文学の異文化像』、2009年10月、鳥影社

#### 【論文】

1. 「暴君から賢者へ—18世紀ドイツ文学・オペラのオリент像」、『希土』第32号、2007年8月、pp. 62-83.
2. 「根源としての東方—ゲーテ時代のドイツ文学のオリент像」、『京都大学文学部研究紀要』第47号、2008年3月、pp. 83-129.
3. 「越境と内省—ゲーテと「世界文学」」、日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』第50巻、2008年10月、pp. 123-137.
4. 「探検家たちと思索家たち」、『希土』第34号、2009年8月、pp. 2-32.
5. 「近代ドイツ文学と視覚の変容—ゲーテ、リヒテンベルク、ホフマン」、『希土』第35号、2010年8月、pp. 26-48.

### II. 自己評価

ここ数年来おこなってきた、近代ドイツ文学における異文化像にかんする研究を、博士論文としてまとめ、2009年3月に京都大学博士（文学）の学位を授与された。著書『越境と内省—近代ドイツ文学の異文化像』は、この博士論文に加筆したものであり、「図書新聞」の書評などにおいて高く評価された。現在は、新たな研究テーマ「五感で読むドイツ文学」に取り組んでおり、論文「近代ドイツ文学と視覚の変容—ゲーテ、リヒテンベルク、ホフマン」は、その最初の成果である。引き続き今年度中に、ドイツ文学における「聴覚」と「味覚」にかんする論文を執筆する予定である。

## 宮内 弘（英語学英米文学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「ラーキンを中心とする現代英詩の文体論的研究」、『平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書』、2007年3月、pp. 1-48.
2. 「イエイツ、ハーディ、ラーキンにおける形式と内容」、『京都大学文学部研究紀要』第48号、2009年3月、pp. 1-32.

3. 「英米詩における形式と内容—『重ね合わせ』と『埋め込み』の手法」、『京都大学文学部研究紀要』第49号、2010年3月、pp. 73-99.

## II. 自己評価

科学研究費(基盤研究C)の助成を受け、20世紀の代表的詩人の一人であるラーキンと彼に影響を与えたイェイツ、ハーディなどの詩人における形式と内容との関係を研究してきた。これまで日本においては本格的な研究がほとんど行われてこなかったラーキンに関して、多くの作品を取り上げて、形式・内容の両面から詳細な分析と解釈を試みたこと、他の詩人に関して従来あまり顧みられなかった韻、韻律の技法、文体などに焦点を合わせて、形式と内容との微妙な関係を具体的作品に即しながら、かなりの程度明らかにすることができたことなどにおいて、少なからぬ意義があったように思われる。今後は研究対象詩人を拡大して、より広い視野から詩の形式と内容の関係を追究していきたい。

## 若島 正 (英語学英米文学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『ロリータ、ロリータ、ロリータ』、2007年、作品社
2. シオドア・スタージョン『[ウィジェット]と[ワジェット]とボフ』（編訳）、2007年、河出書房新社
3. *Revising Nabokov Revising: The Proceedings of the International Nabokov Conference*. (共編著) 2010. The Nabokov Society of Japan.

#### 【論文】

1. 「ジョン・ホークスと飛田茂雄」、『英語青年』第153巻第9号、2007年、pp. 541-546.
2. 「格子窓再訪—『ロリータ』とチェス」、『英語青年』第154巻第1号、2008年、pp. 3-7.
3. 「「私」の消し方—ナボコフの未完長篇『ローラのオリジナル』を読む」、『群像』第64巻第11号、2009年、pp. 106-117.
4. “Un azur lointain.” (traduit de l’anglais par Frédéric Verger) 2010. *Revue des deux mondes*. Juillet-Août. pp. 141-147.
5. “Another Road to *Lolita*: A Transatlantic View.” *Revising Nabokov Revising: The Proceedings of the International Nabokov Conference* (Mitsuyoshi Numano and Tadashi Wakashima, eds.). 2010. pp. 157-162.

## II. 自己評価

ウラジーミル・ナボコフ研究の分野では、『ロリータ』に焦点をしばって論じた『ロリータ、ロリータ、ロリータ』を上梓することができた。また、2010年3月にはナボコフの国際学会を京都で開催することができた。その成果は、28篇の研究発表と講演を収めた(英語+ロシア語)論文集 *Revising Nabokov Revising* にまとめられた。また、ナボコフの未完長篇『ローラのオリジナル』が2009年に出版され、この作品についての論考を2篇発表した。そのうちのひとつは、

英語で書いたものが仏訳されて、フランスの由緒ある批評誌 *Revue des deux mondes* に掲載された。

## 佐々木 徹 (英語学英米文学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. マックス・ピアボーム『ズリイカ・ドブソン』（翻訳書）、2010年10月、新人物往来社

#### 【論文】

1. “Introduction” to G. K. Chesterton, *Charles Dickens* (Wordsworth Editions), 2007. pp. vii-xx.
2. 「ハーディと映画」、日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』（音羽書房鶴見書店）、2007年10月、pp. 623-637.
3. “Edmund Wilson’s ‘The Two Scrooges’ Reconsidered” *The Dickensian* Vol. 104 Part 1. 2008. pp. 32-43.
4. 「近代的ディケンズ批評の源流を温めて—ミラー、マーカス、リーヴィス」、塩谷清人・富山太佳夫（編）『イギリス小説の愉しみ』（音羽書房鶴見書店）、2009年6月、pp. 86-100.
5. “John Schlesinger’s *Far from the Madding Crowd*: A Reassessment” *Literature/Film Quarterly* Vol. 37 No. 3. 2009. pp. 194-200.

### II. 自己評価

ここしばらく継続して行っているディケンズ批評史に関する研究の成果を、単行本の序文やディケンズ研究の専門誌における論文という形で、国際的な場において発表出来たことは大きな成果と言ってよいであろう。また、平行して関心を持ってきた「小説と映画」についても、この問題に関する権威ある専門誌 *Literature/Film Quarterly* に論文を発表し、研究成果を国際的に披露することができた。望むらくは、これらを基礎にして、近々ディケンズ文学全体を射程に入れた本格的な研究、および、小説と映画に関する包括的な研究へと進んで行きたい。なお、ピアボームはディケンズを柱とする英国ユーモア小説の伝統に連なる作家であり、その翻訳を上梓できたことも少なからぬ意義があると考えたい。

## 家入 葉子 (英語学英米文学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『ベーシック英語史』、2007年、ひつじ書房
2. *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*. 2010. Amsterdam: John Benjamins; Tokyo: Yushodo Press.

#### 【論文】

1. 「使役動詞 make の史的発達に関する一考察—Caxton の *Reynard the Fox* を中心に—」、『英



- 語史研究会会報 研究ノート』、2007年、pp. 18-24. (*Studies in the History of the English Language, 2006-2009* [Osaka Books, 2010], pp. 33-39 に再録)
2. 「アメリカ知識人話者の公の会話における人称代名詞 I と you の使用のジェンダー差について」(共著)、『社会言語科学会第19回大会発表論文集』、2007年、pp. 116-119.
  3. “Use vs. Non-Use of the Complementizer *That* in Public Speech: An Analysis of the Corpus of Spoken Professional American English.” (共著) *Setsunan Journal of English Education* 1. 2007. pp. 1-16.
  4. 「『パストン家書簡集』における動詞 *pray* の用法について」中尾佳行・小野祥子・白井菜穂子・野地薫・菅野正彦(編)『テキストの言語と読み—池上恵子教授記念論文集』(英宝社)、2007年、pp. 371-380.
  5. 「存在文 (*there+be*) における数の一致と公での場の会話スタイル—Corpus of Spoken Professional American English の分析から—」(共著)、『摂南大学外国語学部 摂大人文学』15、2007年、pp. 93-105.
  6. “The Verb *prevent* and its Changing Patterns of Complementation in the History of English.” *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts: The Global COE Program, International Conference 2007* (ed. Masachiyo Amano, Michiko Ogura, & Masayuki Ohkado), Peter Lang. 2008. pp. 297-309.
  7. “Unsupported Negative *ne* in Later Middle English”. *Notes and Queries* n.s. 55. 2008. pp. 21-23.
  8. “The Use of the First and the Second Person Pronouns by American English Speakers in Formal Meetings: An Analysis of the Corpus of Spoken Professional American English.” (共著) *Setsunan Journal of English Education* 2. 2008. pp. 33-51.
  9. 「文献講読のための中英語入門」、高宮利行・松田隆美(編)『中世イギリス文学入門—研究と文献案内』(雄松堂出版)、2008年、pp. 379-383.
  10. 「*Doubt* にかかわる構文の歴史的変化について—*The Oxford English Dictionary* の引用文データの分析から—」、『九大英文学』50、2008年、pp. 317-338.
  11. 「高頻度語の分析によるアメリカ会議英語のスピーチスタイルの考察」(共著)、『現代アメリカ英語知識人話者のスピーチスタイルと語学的特徴についての研究』(統計数理研究所共同研究レポート 214)、2008年、pp. 69-88.
  12. 「形容詞を修飾する強意語 *very* と *real/really* の使用に関するジェンダー差について—*The Corpus of Spoken Professional American English* の分析から—」(共著)、『現代アメリカ英語知識人話者のスピーチスタイルと語学的特徴についての研究』(統計数理研究所共同研究レポート 214)、2008年、pp. 51-67.
  13. 「専門性の高い会話における発話導入語とスピーチスタイル—*The Corpus of Spoken Professional American English* の分析から—」(共著)、『現代アメリカ英語知識人話者のスピーチスタイルと語学的特徴についての研究』(統計数理研究所共同研究レポート 214)、2008年、pp. 25-50.
  14. 「接続詞の使用状況から英語のスピーチスタイルの違いを探る—*The Corpus of Spoken Professional American English* の分析を通して—」(共著)、『現代アメリカ英語知識人話者のスピーチスタイルと語学的特徴についての研究』(統計数理研究所共同研究レポート 214)、2008年、pp. 1-23.
  15. “*I fear*: The Historical Development of the Verb *fear* and its Changing Patterns of Complementation.” *Studies in Modern English* 25. 2009. pp. 19-39.

16. “The Historical Development of the Verb *doubt* and its Various Patterns of Complementation.” *Exploring the Lexis-Grammar Interface* (ed. Ute Römer & Rainer Schulze). John Benjamins. 2009. pp. 153-169.
17. “Relative and Interrogative *who/whom* in Contemporary Professional English.” (共著) *Germanic Languages and Linguistic Universals* (ed. John Ole Askedal, Ian Roberts, Tomonori Matsushita & Hiroshi Hasegawa) John Benjamins. 2009. pp. 177-191.
18. “The Verb *pray* in Different Letters of the Paston Family with Special Reference to its Pragmatic Use.” *English Philology and Corpus Studies: A Festschrift in Honour of Mitsunori Imai to Celebrate his Seventieth Birthday* (ed. Shinichiro Watanabe & Yukiteru Hosoya), Shohakusha. 2009. pp. 169-183.
19. “Speech Style and Gender Distinctions in the Use of *very* and *real/really*: An Analysis of the Corpus of Spoken Professional American English.” (共著) *Journal of Pragmatics* 42. 2010. 585-597.
20. “Coordinating and Subordinating Conjunctions in Spoken American English.” (共著) *Noam Chomsky and Language Descriptions* (ed. John Ole Askedal, Ian Roberts, & Tomonori Matsushita). John Benjamins. 2010. pp. 179-196.
21. “Negation in Fragments A, B and C of the Hunter Manuscript of *The Romaunt of the Rose*.” *Language Change and Variation from Old English to Late Modern English: A Festschrift for Minoji Akimoto* (ed. Merja Kytö, John Scahill & Harumi Tanabe). Peter Lang. 2010. pp. 79-101.
22. 「変容する英語と英語教育」、小迫勝、福永信哲、脇本恭子、瀬田幸人 (編)『英語教育への新たな挑戦—英語教師の視点から』、英宝社、2010年、pp. 63-76.
23. 「初期近代英語における否定構文—Lampeter Corpus の調査から—」、加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美 (編)『否定と言語理論』、開拓社、2010年、pp. 211-233.
24. “Negation in Different Versions of Chaucer’s *Boece*: Syntactic Variants and Editing the Text.” *English Studies* 91. 2010. pp. 826-837.

## II. 自己評価

2008年から2010年の研究は、以下のように大きく3種に分類することが可能である。(1) 英語の動詞の補文構造の史的発達についての研究、(2) 現代アメリカ英語のスピーチスタイルについての研究、(3) 中英語の写本および写字生についての研究、である。(1)と(2)は2000年ごろから着手した研究で、(1)は個人研究、(2)は統計数理研究所との共同研究である。この(1)および(2)については、ちょうど10年を経過したところで、多数の論文と著書1点として研究成果を公刊することができた。(1)については、補文構造の大きな変化が初期近代英語期(1500年頃～1700年頃)に起こったことが明らかになったので、さらにこの時代のデータを補強しながら、研究方法を発展させて、研究の新たな段階に入ったところである。(2)については、これまで先行研究が比較的少なかった話し言葉の実態を明らかにすることができたが、まだ扱うことのできなかつた現象も多いので、さらに共同研究を継続する予定である。(3)については、この2年ほど取り組んでいるもので、現在のところ、*The Romaunt of the Rose*および*Boece*の写本と写字生の問題についての論文を公刊したところである。また、(3)では複数の中英語文献を扱っており、一部の写本(中英語版*Meditationes de Passione Christi*)については、共同研究の形を取っている。まだ着手したばかりであるので、論文の刊行にはつながっていないが、方言と時代の特長などを、今後進めて行く予定である。

## 廣田 篤彦 (英語学英米文学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. *Shakespeare Studies* (Tom Bishop and Atsuhiko Hirota, eds. The Shakespeare Society of Japan), vol.48, 2008.

#### 【論文】

1. “The Tardy-Aspish Nation in a Homespun Kingdom: Sartorial Representations of Unstable English Identity.” *Cahiers Élisabéthains*, vol.78, 2010, pp.1-12.
2. “Circes in Ephesus: Civic Affiliations in *The Comedy of Errors* and Early Modern English Identity.” *The Shakespearean International Yearbook*, vol.10, Ashgate, 2010, pp.231-255.
3. “Pacific Shakespeare.” *Shakespeare Studies* (Tom Bishop and Atsuhiko Hirota, eds. The Shakespeare Society of Japan), vol.48, 2008, pp. 1-5.

### II. 自己評価

本期間における研究の主たるテーマは、1)初期近代におけるイングランド人アイデンティティの問題、2)シェイクスピア演劇の太平洋地域における受容のあり方、の二つであり、共に国際的に評価される形で論文を発表した。

1)については、論文1で服装を通じて表象されるイングランド人アイデンティティの不安定さを指摘した。論文2では『間違いの喜劇』において魔女キルケーが男性登場人物のアイデンティティへの脅威としてどのように表わされているかを考察し、初期近代イングランドにおける国民アイデンティティの問題との関連を分析した。どちらの側面からも更に多くのテキストを分析しながら研究を進行させている。

2)については近年盛んに行われているアジア地域におけるシェイクスピア受容についての研究を、太平洋地域でのシェイクスピア受容の多様性と共通点の検討へと発展させた。論文3は太平洋という枠組みに着目した国際共同研究としては世界でも初めての試みである。

## 森 慎一郎 (英語学英米文学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. アラスター・グレイ『ラナークー四巻からなる伝記』（翻訳）、2007年、国書刊行会
2. F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』（翻訳）、2008年、ホーム社

#### 【論文】

1. 「ギャツビー・ゴネグションーフィッツジェラルド『偉大なギャツビー』をめぐって」、『みすず』第46巻第3号（通巻515号）、2004年、pp. 18-38.
2. 「『偉大なギャツビー』の眼鏡」、*Albion* 50, 2004年、pp. 37-52.
3. 「フィッツジェラルド『偉大なギャツビー』と〈正直さ〉の問題」、『英語青年』第151巻第1号、2005年、pp. 33-37.

4. 「『夜はやさし』を訳して」、『英語青年』第154巻7号、2008年、pp. 374-375.
5. 「『夜はやさし』における人種と性」、『日本英文学会第81回全国大会 Proceedings』、2009年、pp. 203-205.
6. 「読むことと翻訳すること、について」、*Albion* 55、2009年、pp. 92-101.
7. 「『青白い炎』におけるキンボートの編集・執筆作業について」、*Krug* 2、2009年、pp. 12-24.

## II. 自己評価

ここ数年の研究業績について言えば、以前から研究を行っているF・スコット・フィッツジェラルドの代表作『夜はやさし』の新訳を上梓できたこと、その作業を通じて同作品への関心をさらに深め、その成果をいくつかの形で発表できたこと等、それなりに充実したものであったと思う。また、一作家、一国の文学の研究の枠を超えた関心がしかるべき成果の形をとりつつあることも、長期的に見て研究活動の充実に資するものと評価できる。現在は、科学研究費補助金を得て大戦間のアメリカ小説の研究を行いつつ、フィッツジェラルドの未完の遺作『ラスト・タイクーン』等々の翻訳出版に向けた作業も進めている。今後もさらに積極的な研究成果発表を心掛けたい。

## 吉川 一義 (フランス語学フランス文学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『プルーストと絵画—レンブラント受容からエルスチール創作へ』、2008年、岩波書店
2. 吉田城著・吉川一義編『プルーストと身体—『失われた時を求めて』における病・性愛・飛翔』、2008年、白水社
3. Marcel Proust, *Cahiers 1 à 75 de la Bibliothèque nationale de France*, comité éditorial : Nathalie Mauriac Dyer, Bernard Brun, Antoine Compagnon, Pierre-Louis Rey, Kazuyoshi Yoshikawa, Bibliothèque nationale de France/Brepols, depuis 2008.
4. *Proust et l'art pictural*, préface de Jean-Yves Tadié. 2009. Champion.
5. 吉川一義・岑村傑編『フランス現代作家と絵画』、2009年、水声社
6. 田口紀子・吉川一義編『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』、2010年、京都大学学術出版会
7. プルースト『失われた時を求めて1』（翻訳）、2010年11月、岩波文庫

#### 【論文】

1. 「プルースト小説の誕生」、『現代文学』75号、2007年、pp. 9-18.
2. 「プルーストとフロイト」、『フロイト全集』月報6、岩波書店、2007年10月、pp. 1-4.
3. 「プルーストとニジンスキー」、『時代を着る』、京都服飾文化研究財団、2008年2月、pp. 162-171.
4. 「スワンの美術趣味の執筆過程」、『現代文学』77号、2008年7月、pp. 25-39.
5. «Proust aux expositions», in *Proust et les moyens de la connaissance*, Presses universitaires de

Stransbourg, février 2009, pp. 207-218.

6. « Du *Contre Sainte-Beuve* à la *Recherche* », *Proust, la mémoire et la littérature*, Séminaire 2006-2007 au Collège de France, Odile Jacob, 2009, pp. 49-71.
7. « Originalité et idolâtrie artistiques chez Proust », *Originalités proustiennes*, sous la direction de Philippe Chardin, 2010, Éditions Kimé, p. 35-45.
8. « Les collectionneurs de tableaux », *Proust et ses amis*, sous la direction de Jean-Yves Tadié, Gallimard, 2010, pp. 178-194.

## II. 自己評価

プルーストと絵画に関する研究に、なんとか一応の区切りをつけることができた。フランス国立図書館が所蔵するプルーストの未発表原稿帳の転写校訂版も、日仏の共同チームを中心に進め、2008年以降2冊を刊行することができた。また、これまでの研究成果をとり入れた『失われた時を求めて』の新訳(岩波文庫)の刊行も開始することができた。校訂版出版と翻訳は、すぐに完成する仕事ではないが、すこしずつでも着実に進められるよう努力したい。

## 田口 紀子 (フランス語学フランス文学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』(吉川一義氏と共編)、2010年、京都大学学術出版会

#### 【論文】

1. 「小説テキストにおける『視点』」、『水声通信』19号、2007年、pp. 66-78.
2. 「生成論の射程」(序章)、『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』田口、吉川編(上掲)、2010年、pp. 1-18.

### II. 自己評価

この期間は自分の専門以外のシンポジウムの企画・開催(2008年文学研究科国際シンポジウム『世界の中の源氏物語』)や、文学研究科学生支援プロジェクト(「外国語支援」)のコーディネーター等で、研究のための時間が十分とれなかったが、代表をつとめた科研の共同研究「フランス文学における総合的生成研究—理論と実践」(基盤研究A)の中間報告として国際シンポジウム(2007年12月)を開催し、さらにその総括として2冊の編著書(上記の編書と、もう1冊のフランス語の論文集—本年にフランスで出版の予定)を出版することができたのは評価できると考える。

来年度からは現在代表者である科研の共同研究「フランス文学における歴史記述の総合的研究」(基盤研究B)を中心に、フランス小説の形態とその意味の変遷に関する研究を続けていく予定である。

## 増田 真 (フランス語学フランス文学准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『哲学の歴史 6 知識・経験・啓蒙 18世紀』 (共著)、松永澄夫責任編集、中央公論新社、2007、726 p. (ルソーの章を担当)
2. 『ルソーを学ぶ人のために』 (共著、桑瀬章二郎編)、世界思想社、2010、xvi+328+xii p. (第3章と第9章を担当)

#### 【論文】

1. « Lois et individu chez Rousseau — Conception de la loi et idées sur le langage » 『フランス啓蒙思想における「法」の諸問題 物語・倫理・表象の批判的研究』 (平成18-19年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者佐藤淳二)、2008年、pp. 15-30.
2. 「18世紀フランスの言語論における「異文化」」、石川文康編『多元的世界観の共存とその条件』、国際高等研究所、2010年、pp. 81-103.
3. 「ルソーにおけるリズム論と夢想の詩学」、田口紀子・吉川一義編『文学作品が生まれるとき 生成のフランス文学』、京都大学学術出版会、2010年、pp. 235-263.
4. « L'altérité culturelle dans les idées sur le langage en France au XVIIIe siècle » dans Luc Fraise (dir.), *Séries et variations. Etudes littéraires offertes à Sylvain Menant*. Presses Universitaires de Paris-Sorbonne, 2010, p. 215-226.
5. « L'écrivain et son destin — Rousseau face à ses lecteurs dans *les Confessions* — » *Revue d'Etudes Francophones* (Université Nationale de Séoul, Centre de Recherches sur la Francophonie), n°20, 2010, p. 280-309.

#### 【翻訳】

1. Nobuo HORIIKE « La thèse de l'origine occidentale de la civilisation chinoise et la thèse de l'origine chinoise de la civilisation occidentale : les figuristes et les savants dans la Chine des Qing » Hisayasu NAKAGAWA et Jochen SCHLOBACH (éd.), *L'Image de l'autre vue d'Asie et d'Europe*, Champion, 2007, p. 99-111.
2. Tatsuo HINO « Politique d'isolement et littérature » *Ibid.*, p. 113-121.
3. Naohiro ASAO « La classe moyenne dans la hiérarchie sociale du Japon au XVIIIe siècle » *Ibid.*, p. 123-133.
4. セルゲイ・カルプ編『十八世紀研究者の仕事 知的自伝』中川久定、増田真監訳、2008年、vi+389 p.、法政大学出版局

#### 【書評】

1. 「川合清隆『ルソーとジュネーヴ共和国 人民主権論の成立』名古屋大学出版会、2007年、iii+257+23 p.」、『仏文研究』第39号 (京都大学フランス語フランス文学研究会)、2008年、pp. 153-157.

#### 【その他】

1. 「十八世紀の草稿 —地下文書と手書きの完成品—」 (研究ノート)、田口紀子・吉川一義編『文学作品が生まれるとき 生成のフランス文学』、京都大学学術出版会、2010年、pp. 265-269.

## II. 自己評価

この4年間も、ルソーを中心として18世紀フランスの思想と文学の研究を続けてきた。中心的なテーマはルソーにおける言語論と政治思想の関係であるが、それ以外にも、「フランス文学における総合的生成研究—理論と実践—」（仏文研究室）、「啓蒙と運命」（京大人文研）、「多元的世界観の共存とその条件」（国際高等研究所）、「フランス啓蒙思想における「法」の諸問題 物語・倫理・表象の批判的研究」（科学研究費補助金研究成、研究代表者佐藤淳二）といった共同研究に参加し、論文を発表してきた。現在も引き続き、「フランス文学における歴史記述の総合的研究」（仏文研究室）、「啓蒙と革命」（京大人文研）、「18世紀における世界観の多元的交錯」（高等研）、「フランス啓蒙思想における戦争と平和の表象」といった共同研究に参加し、口頭発表や論文の寄稿をする予定である。

これらの共同研究への参加によって知識を広げる機会を得たが、自分にとっての中心的なテーマに割ける時間が限られてしまったのが残念である。今後数年のうちにこのテーマをまとめ、相変わらず18世紀フランスの思想と文学を対象としつつ、新たなテーマに取り組みたい。

## 永盛 克也（フランス語学フランス文学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. Georges Forestier, *Jean Racine*（書評）、『仏文研究』第39号、2008年、p. 147-152.
2. «Racine et Sénèque. L'échec d'un idéal stoïcien dans la tragédie racinienne », *XVII<sup>e</sup> siècle*, n° 248, 2010, p. 411-421.
3. 「ラシーヌ悲劇の生成過程」、田口紀子・吉川一義編『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』、京都大学学術出版会、2010年、pp. 57-81.
4. クリスチャン・ピエ「フランスにおけるピエール・コルネイユの劇作品の演出」（翻訳）、小倉博孝編『コルネイユの劇世界』所収、上智大学出版、2010年、pp. 348-374.

### II. 自己評価

論文2はラシーヌ悲劇におけるセネカの影響について、近代ヨーロッパに受け継がれたストア主義思想と悲劇ジャンルの関係という観点から論じたもので、文学史的展望と作品分析を総合しつつ、新たな解釈を提示することができたと考える。論文3ではラシーヌ悲劇の創作に関する研究史を総括した上で、作家自身の受けた人文主義的教育（修辞学、文献注釈）や作家に間接的な影響を及ぼしたと思われる同時代の著作などに注意を払いながら、悲劇作品とその序文、さらに草稿資料の分析を通して、ラシーヌにおいて古典作品の受容が創作へとつながるプロセスを整理して論じることができたと考える。1はこれまでのラシーヌの伝記的研究の問題点を整理し、新たにもたらされた知見について吟味検討したものである。これらの成果は、今後予定している「ラシーヌにおける人文主義」についての研究へとつながる仕事であると考え

## 天野 恵 (イタリア語学イタリア文学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『イタリアの詩歌』 (共著)、2010年、三修社
2. 『原典イタリア・ルネサンス人文主義』 (19 ピエトロ・ベンボ「アズラーニ」) (共訳)、2009年、名古屋大学出版会

### II. 自己評価

近年は重要な古典的作品の翻訳や啓蒙的著作においては満足のいく成果を挙げることができたものの、先端的研究を思うように進めることができなかつた。すなわち、16世紀の代表的なイタリアの文学作品と当時の言語論との関係を具体的・数量的に明らかにしていくという十年来の計画に関しては、2006年に学会誌に発表した論文以後、実際の成果に結びつけるに至らなかつたことが反省すべき点である。今後は、この計画の第一段階をなすベンボ『俗語論』形成史について、俗語文献学から規範の策定へという著者の重心の移動を早くも1501年に位置づけることが可能であることの論証を速やかに論文として発表し、同書の草稿 (Vaticano Latino 3210) から決定版 (1549年) に至る各エディションの厳密な比較検討を進めることにより、規範策定作業の進展の様相を明らかにしていきたい。

〔思想文化学専攻〕

## 伊藤 邦武 (哲学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『宇宙を哲学する』、2007年、岩波書店
2. 『社会の哲学』 (編著)、「哲学の歴史」第8巻、2007年、中央公論新社
3. 『哲学と哲学史』 (共編著)、「哲学の歴史」別巻、2008年、中央公論新社
4. 『いまく哲学することへ』 (共編著)、「岩波講座 哲学」第1巻、2008年、岩波書店
5. 『科学／技術の哲学』 (編著)、「岩波講座 哲学」第9巻、2008年、岩波書店
6. 『ジェームズの多元的宇宙論』、2009年、岩波書店

#### 【論文】

1. 「パースの宇宙論・補遺」、『アルケー』15号、2007年6月、pp. 60-71.
2. 「意識と人格—ジェームズの場合」、『大航海』69号、2009年1月、pp. 141-151.
3. 「科学の進歩ということ」、『科学』79巻1号、2009年1月、p. 117.
4. 「『確率論』のパースペクティヴ」、『現代思想』37巻6号、2009年5月、pp. 156 - 167.
5. 「ケプラーと天文学的仮説の真理」、『現代思想』37巻12号、2009年9月、pp. 168 - 176.
6. 「ラスキンの藝術経済論 (一)」、『哲学論叢』36号、2009年10月、pp. 19-31.
7. 「哲学史と経済学」、『三田学会雑誌』103巻1号、2010年4月、pp. 5-24.



8. 「ラスキンの藝術経済論（二）」、『哲学論叢』37号、2010年10月、pp.29-45.

## II. 自己評価

この間の研究はこれまでと同様宇宙論の哲学と経済学の哲学を焦点としてなされているが、新たにラスキンを題材にして、美と経済的合理性の価値論の模索ということも試みられている。もともと、私の宇宙論の哲学と経済学の哲学は「不確実性」ということを軸にした科学方法論の探求というモチーフのもとで追求されてきたが、近年では特に世界的な金融恐慌などの経験を基盤にして、グローバルな資本主義システムから各種のディープエコノミーへの転換の可能性ということが、単なる経済学の分野にとどまらず哲学や思想の問題としても重要な課題になり、エコロジーや風景の倫理などを包含する現代にふさわしい価値論の必要性が意識されるようになってきている。私は学問研究の厳密性を保持しつつ、社会の現実的な問いかけにも答えうるような哲学研究をめざしたいと考えているが、その成果はまだ十分とはいえず、さらなる努力が必要であることを痛感している。

## 出口 康夫（哲学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「理論と実験—揺らぐ二項対立」、『科学/技術の哲学』（岩波講座哲学第9巻、岩波書店）、2008年9月、pp.39-63.
2. 「活動实在論の擁護—光速の測定に即して—」、『知識と实在』（世界思想社）、2008年10月、pp.4-46.
3. “Ways of Dialetheist: Contradictions in Buddhism.”（共著）*Philosophy East and West* 58/3, 2008, pp. 395-402.
4. 「真矛盾主義的一元論—後期西谷哲学の再編成—（上）」、『哲学研究』585、2008年、pp.36-60.
5. 「真矛盾主義的一元論—後期西谷哲学の再編成—（下）」、『哲学研究』586、2008年、pp.24-56.
6. 「電子はいつ実在するようになったのか」、『アルケー』17、2009年、pp.45-59.
7. 「真理対応説の擁護：实在論とロバストネス」、『日本カント研究』10、2009年、pp.41-58.
8. 「ニヒリズムを抱きしめて：西谷啓治『空と即』補論」、『日本の哲学』10、2009年、pp.67-83.
9. “Robustness, Realism, and the Transcendental: Open Letters to Kerstin Knight.” *Prospectus* 12, 2009, pp. 50-65.
10. 「場所の論理の再構築に向けて：論文「場所」試論」、『比較思想研究』36（別冊）、2009年、pp.35-41.
11. 「ことばと实在：「活動語」の意味」、『哲学研究』589、2010年、pp.25-50.
12. 「メタアナリシスの全体論：コリンズに答えて」、『科学基礎論研究』38/1、2010年、pp.19-37.

### II. 自己評価

科学哲学（特に科学的实在論）（1, 2, 6, 9, 11, 12）と分析アジア哲学（3, 4, 5, 8, 10）の両分野を中心に、海外の査読雑誌に掲載された共著論文を含めた業績を挙げた。論文2は関連する国内

雑誌に掲載された書評において「極めて独創的」との評価を得た。また論文1と論文4,5は、それぞれ国内の論文と書籍において引用・紹介されている。現在、前者のテーマに関する単著、後者に関する共著と共編著（英語）の執筆と刊行を予定している。また共著論文3は国際的な反響を呼び、現在、国際誌で、それに関する議論を集めた特集号が予定されている。

## 中畑 正志（西洋古代哲学史専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

- 1.『プラトン哲学入門』（編書）、2008年、京都大学学術出版会

#### 【論文】

- 1.「プラトン哲学・アリストテレス哲学の復興」、『哲学の歴史』第2巻（中央公論新社）、2007年、pp.467-491.
- 2.「アリストテレス」、『哲学の歴史』第1巻（中央公論新社）、2008年、pp.517-639.
- 3.「テオプラストスと初期ペリパトス学派」、『哲学の歴史』（中央公論新社）、2008年、pp.645-666.
- 4.「プラトンとアリストテレス—逸話と真実」、『哲学の歴史』第1巻第1巻（中央公論新社）、2008年、pp.640-664.
- 5.「プラトンを読む—昔も、そして今も」、『プラトン哲学入門』（京都大学学術出版会）、2008年、pp.423-449.
- 6.「プラトンの声」、『プラトン 1冊でわかる』（岩波書店）、2008年、pp.139-154.
- 7.「展望 形而上学は現在する」、『岩波講座 哲学〈2〉形而上学の現在』、2008年、pp.1-19.
- 8.「名づける、喩える、書き換える」、『岩波講座 哲学〈1〉いま〈哲学すること〉へ』、2008年、pp.3-29.
- 9.「アリストテレスの言い分—倫理的な知のあり方をめぐって」、『古代哲学研究』第42号、2008年、pp.1-30.
- 10.「「哲学」をめぐる争い—ピロソピア—とは何であったのか」、『日本の哲学』第11号、2008年、pp.36-58.

### II. 自己評価

この3年間は、プラトンとアリストテレスを中心に、その中心的思想は何か、そしてそれは現代の哲学や倫理学にどのような知見を提供し得るかなる課題を提起しうるか、という基本的な問題の考察に多く携わった。『岩波講座 哲学』の編集委員の一人としては、現代の哲学の諸課題を見きわめて西洋古代哲学の視座から発言し、また『哲学の歴史』などへの執筆を通じて、アリストテレス哲学および古代後期の基本像を確認し、プラトン主義やアリストテレス主義の成立のプロセスを跡づけた。また現代倫理学の重要な立場の一つである徳倫理学に対して、その元祖と見なされるアリストテレスはどのような問題を提起するのを見定めた。これらの多くは古代哲学の専門的研究者以外の読者も想定したものであるが、それぞれに従来の研究の誤りや曖昧さを訂

正し新たな知見も多く織り込むよう工夫しており、専門研究としても有意義な貢献をおこなっていると信ずる。

## 川添 信介（西洋中世哲学史専修教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 『トマス・アキナスの心身問題—『対異教徒大全』第2巻から』（翻訳）、2009年、知泉書館

#### 【論文】

1. 「ウェルブムと形象 — トマス・アキナスの認識理論との関連で」、『哲学研究』584、2007年、pp. 1-26.
2. 「スコラ哲学とアリストテレス」、『哲学の歴史』第3巻（中川純男編、中央公論新社）、2007年、pp. 405-427.
3. 「哲学無用論に中世的な答えを与えてみると」、『アルケー』16、2008年、pp. 12-25.
4. 「理性と信仰—スコラ再考—」、『岩波講座 哲学』第13巻、2008年、pp. 129-147.
5. “*Verbum and Epistemic Justification in Thomas Aquinas.*” *The Word in Medieval Logic, Theology and Psychology : Acts of the XIIIth International Colloquium of the Société Internationale pour l’Étude de la philosophie Médiévale Kyoto, 27 September - October 2005*, ed. by Tetsuro Shimizu and Charles Burnett, Brepols, 2009, pp. 273-289.

### II. 自己評価

2007年以降の仕事としては、トマス・アキナスの『対異教徒大全』の第2巻の翻訳を刊行したことが第一に挙げられる。これは我が国で初めてと言ってよい『対異教徒大全』の本格的紹介であり、ラテン語との対訳版としたことによって西洋中世スコラ哲学全般に対する専門的導入のための文献としても価値あるものと考えている。その他、スコラ哲学とキリスト教信仰の関係についてのメタレベルの2つの論文、またアキナスの認識論に関する論考を（英文と和文とで）まとめて公表した。2009年度からトマス・アキナスの自然法論について本格的な研究に着手しているが、まだその成果を発表するには至っていない。合わせて、『対異教徒大全』全巻の翻訳を進めており、順次刊行を予定している。

## 福谷 茂（西洋近世哲学史専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『哲学の歴史 7 理性の劇場』（共著）、2007年、中央公論新社
2. 『カント哲学試論』、2009年、知泉書館

## 【論文】

1. 「〈哲学史〉という発明」、『岩波講座哲学 14 哲学史の哲学』（飯田隆他編）、2009年4月、pp. 27-55.
2. 「田辺元における大正と昭和」、『日本の哲学』第10号、2009年12月、pp. 38-51.
3. 「ライブニッツの創造論（一）」、『近世哲学研究』再14号、2010年12月、pp. 15-35.

## II. 自己評価

従来から継続しているカント研究ではカント概説の試みを行うとともに、主要論文を収めた論文集を上梓した。前者に関してはカント晩年の『遺稿』でのスピノザへの論及を取り上げた部分がカント研究者だけでなく一般の読者にも注目されたので、より本格的な取り組みの結果を公刊する必要を感じている。また論文集に関しては形而上学という一貫したテーマを強調したことが反響を呼んだ。この点を形而上学史の組み換えというかたちで深化することが今後の研究課題であるという自分の見通しに関して十分な手ごたえを得た、と感じている。哲学史という学問分野の方法論および日本哲学史に関しては論文として着手点を提出しただけに過ぎないが、その後も特殊講義で取りあげているので、逐次その成果を発表してゆきたいと考えている。日本哲学史の研究は京都学派を上記の形而上学史のうちに織り込むことが目的である。

## 藤田 正勝（日本哲学史専修教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「西田幾多郎の国家論」、『日本哲学史研究』第4号、2007年、pp. 27-55.
2. 「日本における哲学史の受容」、『哲学の歴史』別巻（中央公論新社）、2008年、pp. 85-107.
3. 「ディルタイと西田幾多郎」、『理想』第681号、2008年、pp. 138-148.
4. 「宗教についての思索と宗教批判—西田幾多郎の思想を手がかりに一」、『宗教研究』第357号、2008年、pp. 25-44.
5. 「フィヒテ哲学と西田哲学」、『フィヒテ研究』第16号、2008年、pp. 37-48.
6. 「京都学派と新儒学の現代世界における役割」、台湾中央研究院中国文哲研究所『国際学術研究会論文集 跨文化視野的東亜宗教伝統』、2008年、pp.1-10.
7. 「「凍れる音楽」と「天空の音楽」」、『場所』第8号、2009年、pp. 1-10.
8. 「日本における「哲学」の受容」、『岩波講座 哲学』第14巻、2009年、pp. 255-272.
9. 「清沢満之と西田幾多郎」、第15回浜風臘扇忌講演録（清沢満之記念会）、2009年、pp. 1-12.
10. 「シェリングと日本の哲学」、『シェリング年報』第17号、2009年、pp. 4-13.
11. 「「京都学派」とは何か—近年の研究に触れながら」、『日本思想史学』第41号、2009年、pp. 35-48.
12. 「シェリング哲学の受容と日本哲学の展開」、科学研究費補助金研究成果報告書『西洋哲学との比較という視座から見た日本哲学の特徴およびその可能性について』、2010年、pp. 215-224.
13. 「西田・田辺哲学とシェリング」、『西田哲学学会年報』第7号、2010年、pp. 1-12.

## II. 自己評価

2007 年以降、まず第一に、日本における哲学および哲学史の受容というテーマをめぐって、第二に、京都学派をめぐって、第三に西田幾多郎の哲学をめぐって、第四にデールタイやフイヒテ、シェリングなど西洋の哲学と日本の哲学との比較をめぐって、第五に京都学派の哲学と新儒学など東洋の哲学との比較をめぐって研究を行ってきたが、十分な成果を挙げることができたと考えている。2010 年から科学研究費補助金により「日本近代哲学の特質と意義、およびその発信の可能性をめぐって」というテーマで共同研究を行っているが、今後はこのテーマをめぐって研究を深化させたいと考えている。

## 水谷 雅彦（倫理学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『倫理への問いと大学の使命』（共編著）、2010 年、京都大学学術出版会

#### 【論文】

1. 「だれがどこで会話をするのか：会話の倫理学へむけて」、『実践哲学研究』第 31 号、2008 年、pp. 1-18.
2. 「バーチャルリアリティは『悪』か?」、『哲學』第 60 号、2009 年、pp. 67-82.
3. 「「多様性」ということ」、『世界思想』37 号、2010 年 4 月、pp. 5-8.
4. 「書評：河合香吏編『集団—人類社会の進化』」、『アジア・アフリカ地域研究』第 10-1 号、2010 年 9 月、pp. 71-74.

## II. 自己評価

2008 年度以降は、コミュニケーションの倫理学に関する研究を継続して進めているが、既刊の論文に加えて、新たにまとめとなる論攷を準備中である。『哲學』誌に掲載された論文は、幸い好評であったため、「身体性」に関する共同研究の報告としてブラッシュアップする予定である。また、2008 年度から、3 年にわたって科学研究費（基盤 B）による共同研究「健康概念の哲学的倫理的再検討」を遂行中である。

## 氣多 雅子（宗教学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『仏教とは何か—宗教哲学からの問いかけ—』（共編著）、2010 年 5 月、昭和堂
2. 『宗教学事典』（共編著）、2010 年 10 月、丸善株式会社

#### 【論文】

1. 「東西宗教交流学会の特質とその意義—宗教哲学の視点から—」、『東西宗教研究』第 6 号、2007 年 6 月、pp. 66-90.

2. 「モダニティの再帰性と宗教哲学的思索の地平—科学技術の問題をめぐって—」、『宗教哲学研究』第25号、2008年3月、pp. 1-19.
3. 「ルードルフ・オットーにおける「非合理的なもの」」、『北陸宗教文化』第21号、2008年7月、pp. 113-128.
4. 「西田の自覚とオットーのヌミノーズの感情」、『理想』第681号、2008年9月、pp. 114-125.
5. “Emptiness and Fundamental Imagination: Nishitani Keiji's ‘Emptiness and Immediacy’”, translated by Robert F. Rhodes, *Frontiers of Japanese Philosophy 3: Origins and Possibilities*, edited by Janes W. Heisig and Uehara Mayuko, Nanzan Institute for Religion and Culture, 2008, pp. 9-40.
6. 「宗教学の立場から「宗教的情操教育」を考える」、『学術の動向』、2008年12月、pp. 46-48
7. 「現代世界に於ける思索のかたち—ブラフト神父の京都学派への期待と失望に面して—」、『東西宗教研究』第8号、2009年8月、pp. 4-30.
8. 「時間と空間の圧縮の経験をめぐって—ハイデッガーの「近さ」とアーレントの「人類・地球」—」、『宗教学研究室紀要』6（京都大学文学研究科宗教学研究室、<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/religion/>）、2009年12月、pp. 3-23.
9. 「「表明すること」と「秘匿すること」」、『「おのずから」と「みずから」のあわい—公共する世界を日本思想にさぐる—』（竹内整一／金泰昌編、東京大学出版会）、2010年6月、pp. 159-177.

## II. 自己評価

この期間における基本的な主題は、(1) 宗教哲学の可能性の追究、(2) 西田哲学の解明と新たな意義の探究、(3) 現代世界の宗教的状况の解明とそれへの応答、であり、その線に沿った成果が並んだ結果となった。基本的には私の10年来の研究主題となっているものであり、その意味では、これまでの研究を順調に進めているといえる。

反省点としては、この期間に完成させる予定であった Martin Heidegger, *Phänomenologie des religiösen Lebens (Gesamtausgabe Bd.60)* の翻訳がまだ完成に至らなかったことである。これを完成させることを課題としたい。

## 杉村 靖彦 (宗教学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「「...まで生き続けること」—リクール『記憶・歴史・忘却』における「ハイデッガーとの論争」」、秋富克哉・関口浩・的場哲朗共編『ハイデッガー『存在と時間』の現在』（南窓社）、2007年12月、pp. 209-227.
2. 「証言と自覚—現代フランス哲学と京都学派の哲学」、『創文』505、2008年1月、pp. 49-52
3. 「透明化する媒介—長谷先生の思索と現代フランス哲学」、『宗教哲学研究』25号、2008年3月、pp. 85-94.
4. 「宗教哲学へ—証言という問題系から(1)」、『哲学研究』585号、2008年4月、pp. 61-85.
5. 「マルセル」、鷲田清一編『哲学の歴史12』、中央公論新社、2008年4月、pp. 171-191.

6. 「リクール」、鷲田清一編『哲学の歴史 12』、中央公論新社、2008年4月、pp.519-555.
7. «Hajime Tanabe, lecteur des Deux sources – un cas de réception du bergsonisme dans «l'École de Kyôto»-», *Bulletin of Death and Life Studies* Vol. 4 : *Au-delà de la philosophie de la vie. Les ateliers sur Les Deux sources de la morale et de la religion de Bergson* (Global COE Program DALs, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo) 2008, pp. 9-19.
8. 「田辺元の『二源泉』読解—京都学派の哲学におけるベルクソニスム「受容」の一例として—」、シンポジウム報告論集『生の哲学の彼方—ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』再読』（東京大学大学院人文社会系研究科、グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」）、2008年4月、pp.11-23.
9. 「宗教哲学へ—証言という問題系から(2)」、『哲学研究』586、2008年10月、pp.1-23.
10. 「宗教と世俗—「近代」とは何であったのか—」、ジャン・ボベロ、門脇健編『揺れ動く死と生—宗教と合理性のはざままで』、晃洋書房、2009年3月、pp.219-234.
11. 「諸判断の葛藤—記憶・証言・歴史」、『フランス哲学・思想研究』13号、2009年9月、pp.48-58.
12. 「ブランショを読んだ田辺」、『創文』527号、2010年2月、pp.29-32.
13. 「<ポスト哲学的>思索と<宗教的なもの>—現代フランス哲学と京都学派の哲学から」、『宗教研究』363号、2010年3月、pp.21-41.
14. «Témoignage agissant du néant absolu—la signification de Tanabe dans le contexte de la philosophie du témoignage—», Jacynthe Tremblay (éd.), *Philosophes japonais contemporains* (Montréal, Presses de l'Université de Montréal), 2010, pp. 47-66.
15. «L'auto-attestation du moi nabertien. Vers une herméneutique du témoignage», Stephan Robilliard et Frédéric Worms (éd.), *Jean Nabert, l'affirmation éthique*, Paris, Cerf, 2010, pp. 131-146.

## II. 自己評価

現代フランス哲学と京都学派の哲学の双方を発想源として「宗教哲学」の原理的再考察となるような思索を展開すること、そしてその成果を国内外の哲学・宗教学研究へと提示し、とりわけ国外の研究者たちとの双方向的な交流へとつなげること、そういったことを主眼として、ここ4年の研究活動を繰り返してきた。その狙いはおおむね達成されたと考えている。今後はこの成果を日本語・フランス語で著作の形にまとめるとともに、扱う問題や活動形態をさらに多様化していきたい。

## 芦名 定道 (キリスト教学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「日本的靈性とキリスト教」、『明治聖徳記念学会紀要』復刊第44号、2007年11月、pp.228-239
2. 「植村正久与基督教」、『基督教思想』(*Recent Review of Christian Thoughts*) 第七期、2007年12月、上海人民出版社、pp.219-236.
3. 「自然神学の新たなフロンティア—脳と心の問題領域」、『基督教学研究』第27号、2007

- 年 12 月、京都大学基督教学会、pp. 1-19.
4. 「ティリッヒの平和の神学」、『神学研究』第 55 号、2008 年 3 月、pp. 189-198.
  5. 「植村正久の日本論（1）」、『アジア・キリスト教・多元性』第 6 号、2008 年 3 月、現代キリスト教思想研究会、pp. 1-24.
  6. 「近代/ポスト近代とキリスト教—グローバル化と多元化」、『キリスト教と近代化の諸相』2008 年 3 月、現代キリスト教思想研究会、pp. 3-18.
  7. 「現代キリスト教思想と宗教批判—合理性の問題を中心に—」、『宗教研究』第 82 巻、357-2、2008 年 9 月、pp. 227-249.
  8. 「ホワイトヘッドとキリスト教思想」、『プロセス思想』第 13 号、2008 年 9 月、日本ホワイトヘッド・プロセス学会、pp. 25-36.
  9. 「近代キリスト教と政治思想—序論的考察」、『基督教学研究』第 28 号 2008 年 12 月、京都大学基督教学会、pp. 175-197.
  10. 「キリスト教学の理念とその諸問題」、『「キリスト教学」再考』2009 年 3 月、日本基督教学会北海道支部、pp. 52-71.
  11. 「植村正久の日本論（2）」、『アジア・キリスト教・多元性』第 7 号、2009 年 3 月、現代キリスト教思想研究会、pp. 1-20.
  12. “Contemporary Christian Thought in Ecological Perspective.” *Tenri Journal of Religion*. No. 37. 2009. Oyasato Institute for the Study of Religion. pp. 49-68.
  13. 「キリスト教政治思想の可能性」、『キリスト教思想と国家・政治論』2009 年 3 月、現代キリスト教思想研究会、pp. 3-26.
  14. 「韓国キリスト教の死者儀礼」、『東アジアの死者の行方と葬儀』（アジア遊学）、2009 年 7 月、勉誠出版、pp. 96-104.
  15. 「キリスト教と近代的知—本論文集の序に代えて」、『キリスト教と近代的知』、2010 年 3 月、現代キリスト教思想研究会、pp. 1-11.
  16. 「『アジアのキリスト教』研究に向けて—序論的考察」、『アジア・キリスト教・多元性』第 8 号、2010 年 3 月、現代キリスト教思想研究会、pp. 79-104.
  17. 「キリスト教学の可能性—伝統とポストモダンのとの間で」、『日本の神学』49、2010 年 9 月、日本基督教学会、pp. 252-256.
  18. 「京都学派とキリスト教—現状と展望」、『福音と世界』2010.10、新教出版社、pp. 30-35.

## II. 自己評価

2007 年度以降の研究は、それまでの研究を継続・発展させる形で進められた。研究テーマは、日本とアジアのキリスト教思想（宗教一般との関連やフィールド調査を含む）、近代以降のキリスト教思想（特に、形而上学や自然神学の問い直し）、近代・ポスト近代の歴史的文脈でのキリスト教、の三つにまとめられる。体系的な研究の実施というよりも、今後の研究の方向性を問い直すことを中心に研究を進めたため、得られた研究成果は質量共にかなりのものと思われるが、まとまった研究成果を著作として刊行するには至らなかった。今後は、現在、日本学術振興会の研究補助（基盤研究（C））を受けて進められている研究を推進すると共に、日本キリスト教研究と近代キリスト教思想について研究成果を著書として公にしたいと考えている。



## 中村 俊春 (美学美術史学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「自立への苦闘： 若きヴァン・ダイクとルーベンス」、『西洋美術研究』13、2007年、pp. 158-184.
2. 「家庭を描いた十七オランダ風俗画の中の主婦と女の使用人」、『フェルメール《牛乳を注ぐ女》とオランダ風俗画展』、国立新美術館、2007年、pp. 34-43.
3. “Housewives and Maidservants in Dutch Seventeenth Century Painting.” *Mildmaid by Vermeer and Dutch Genre Painting*, The National Art Center, Tokyo, 2007, pp. 14-21.
4. 「切断されたメドゥーサの頭部—ルーベンスによる美術愛好家に向けての恐怖とおぞましさの演出—」、『〈醜〉と〈排除〉の感性論—否定美の力学に関する基盤研究—』（平成17～19年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書、研究代表者：宇佐美文理）、2008年、pp. 93-108.
5. 「ヨーロッパを住まいとして—1600年頃のミュンヘンにおけるネーデルラントの芸術家たち展」、『西洋美術研究』14、2008年、pp. 80-87.
6. 「枢機卿フェルディナンド親王のアントウェルペン入市行進—祝祭装置に込められた政治的メッセージ—」、『前近代における「つかのまの展示」研究』（平成17～20年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、研究代表者：中村俊春）、2009年、pp. 149-174.
7. 「家族、母子、家庭のイメージ読解のための序論」、『東西の美術における家庭、女性、子供の表象』（京都大学グローバルGCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」、GCOE国際共同研究2）、2010年、pp. 7-26.
8. 「《ファン・ロイエン花鳥画》の作者再考」、『京都美学美術史学』9、2010年、pp. 205-225.

### II. 自己評価

従来から取り組んできたルーベンス工房についての研究をさらに進めるとともに、新たに、オランダ十七世紀の風俗画および肖像画に見られる夫婦や家族の表象に関する研究に着手した。ルーベンス工房に関する研究については、ヴァン・ダイクとフランス・スネイデルスを取り上げて、彼らがルーベンスと如何なる関係にあり、その結びつきから、如何なる仕方で作品が制作されたのかを、当時の絵画マーケットの状況も考慮に入れて解明することに取り組んだ。この研究をさらに発展させて、近年中に単行本としてまとめたい。また、オランダ風俗画の夫婦や家族の表象に関する研究は、GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の国際共同研究としてより、大きな枠組みへと発展しつつある。江戸時代の日本美術との比較も非常に興味深い視点であることが明らかになったので、今後その分野の知識の拡充にも努めて行きたい。

## 根立 研介 (美学美術史学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『室町時代の彫刻 中世彫刻から近世彫刻へ 日本の美術 494』(編著)、2007年、至文堂
2. 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第6巻(共編著)、2008年、中央公論美術出版
3. 『ミネルヴァ日本評伝選 運慶—天下復々彫刻ナシー—』、2009年、ミネルヴァ書房
4. 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第7巻(共編著)、2009年、中央公論美術出版
5. 『週間朝日百科 国宝の美 彫刻 13 肖像彫刻』(編著)、2010年、朝日新聞社
6. 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第8巻(共編著)、2010年、中央公論美術出版

#### 【論文】

1. 「彫刻史における和様の展開と継承をめぐって」、『哲學研究』583、2007年、pp. 1-24.
2. 「彫刻の和様の継承と七条仏師」、『美術フォーラム21』15、2007年、pp. 132-135.
3. 「鶴林寺太子堂の彫刻」、『鶴林寺太子堂とその美術』(法蔵館)、2007年、pp. 60-64.
4. 「院政期 興福寺にかかわる大仏師をめぐる補論」、『佛教藝術』296、2008年、pp. 57-72.
5. 「定朝をめぐる二、三の問題—僧綱位授与の問題を中心に—」、『鳳翔学叢』4、2008年、pp. 13-31.
6. 「康尚の登場と撰関期仏師の動向」、『仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第35冊 研究発表と座談会 仏師康尚の時代』、2008年、pp. 16-28.
7. 「日本の木彫像の造像技法—木割矧造りと寄木造りを中心に—」、『木の文化と科学』(海青社)、2008年、pp. 135-154.
8. 「異形の肖像」、平成17~19年度科学研究費補助金基盤研究研究(A)研究成果報告書『<醜>と<排除>の感性論—否定美の力学に関する基盤研究—』(研究代表者:宇佐美文理)、2008年、pp. 149-157.
9. 「安祥寺 十一面観音立像」、『國華』1355、2008年、pp. 25-27.
10. 「日本の肖像彫刻と遺骨崇拜」、『死生学研究』11、2009年、pp. 57(380)-82(364) (英訳 “Portrait Sculpture and Relic Veneration in Japan.” *Bulletin of Death and Life Studies* (The Interrelationship of Relics and Images in Christian and Buddhist Culture, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2009).
11. 「院政期の一造立仏をめぐって」、平成17~20年度科学研究費補助金基盤研究研究(B)『前近代における「つかの間の展示」研究』(研究代表者:中村俊春)、2009年、pp. 33-46
12. 「鶴林寺本堂の彫刻」、『鶴林寺とその全盛時代—室町折衷様式之美—』(法蔵館)、2009年、pp. 46-51.
13. 「国風文化論と美術」、『世界の中の『源氏物語』—その普遍性と現代性—』(臨川書店)、

2010年、pp. 172-187.

14. 「霊験仏と納入品を通した聖性の移植をめぐって」、『美術フォーラム 21』22、2010年、pp. 44-50.

## II. 自己評価

この4カ年間の業績の内容としては、運慶など日本の仏師にかかわるもの（「著書」1, 3、「論文」2, 4, 5）が多くなっている。また日本彫刻史上重要な様式である和様に関わるもの（「著書」10、「論文」1, 2, 5, 6）の数も比較的多い。なお、論文ではないが、日本彫刻史の基本資料に関するデータ公表を目指す『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』（「著書」4~6）の出版に編纂者の一人として携わっており、第一期8巻の刊行を終了することができた。前回の評価の際に提出した業績に比べると、一時体調を崩していたこともあり、量的には多少減少しているところがあるが、論文の掲載数は、専門の日本美術史の分野では、かなり数が多い方と思われる。なお、著書3については、産経新聞の書評に取り上げられ、評価を受けた。今後は、仏師研究や和様研究を継続して推し進めるとともに、肖像研究などの研究も進展させたい。

## 吉岡 洋（美学美術史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『ヨロボン Diatxt./Yamaguchi』（編集・翻訳および執筆）、2008年、山口情報芸術センター

#### 【論文】

1. 「VRの美学は可能か？」『日本バーチャルリアリティー学会学会誌』Vol. 15, No. 3、2010年9月、pp. 164-167.
2. 「メディア芸術とは何か?」、『哲学研究』589号、2010年4月、pp. 1-24.
3. “Cultural Parasitology: Art in it's Sociopolitical Complexity.” *Interface Culture: Artistic Aspects on Interaction*（リッツ芸術工科大学、2009、pp. 215-223.
4. 「〈おもろい〉—興趣の大阪的表現について—」、『美術フォーラム 21』第17号（醍醐書房）、2008年4月、pp. 113-116.
5. 「デジタルメディアの形而上学」、『京都美学美術史学』第7号（京都大学美学美術史学研究室編）、2008年3月、pp. 1-32.

## II. 自己評価

2007年度から現在まで、メディアアートと現代芸術を中心とした研究活動を、論文等の著作物および美術・編集の実践的活動として発表してきた。その成果を単著として発表することは残念ながらできなかったが、2008年に山口で行った市民グループとの編集活動は刊行され、内外から好評価を受けた。美術企画としては仙台において現代美術家高嶺格の大規模な個展の監修を行った。また今年9月には、1999年以来3回発表してきたメディア・インスタ

レーション作品「BEACON」を新たに制作することができた。研究活動は量的にはむしろやや過剰と思う。反省点としてはそれらをまとめる余裕を持てなかったことだが、対象領域の急激な変化の現状を考えると、少なくとも今後もこうした状況が続くと思われる。今後の展望としては、日本のメディアアートを歴史的文脈に位置づけるという課題がある。これは国外の研究者との協働なしには困難なことであり、現在その準備を進めつつある。

## 平川 佳世 (美学美術史学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. *The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Bern, Peter Lang, 2009

#### 【論文】

1. 「ルーベンス工房と模写のマーケティング」(中村俊春解題・平川佳世翻訳)、三元社『西洋美術研究』11、2004年9月、pp. 144-166.
2. 「地獄のブリューゲル・ヤン・ブリューゲル作《トロイア炎上》をめぐって一」、近畿大学大学院文芸学研究科『混沌』2、2005年2月、pp. 131-161.
3. 「銅板油彩画の誕生をめぐって」、『京都美学美術史学』8、2009年3月、pp. 1-31.
4. 「プラハ城パントとルドルフ二世の文化政策」、『前近代における「つかのまの展示」研究』平成17年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書(研究代表者中村俊春)、2009年3月、pp. 119-147.
5. 「クラナハ作《聖親族祭壇画》にみる聖なるもの、家族、政治」、京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」『国際共同研究』2「東西の美術における家庭、女性、子供の表象」、2010年3月、pp. 27-46.
6. 「つかのまと不朽の間—ブロンズイーノ《幸福の寓意》—」、『京都美学美術史学』9、2010年4月、pp. 1-34.

### II. 自己評価

2007年度から現在までの研究活動としては、まず、博士論文「16世紀および17世紀の北方ヨーロッパにおけるデューラー素描の絵画化に関する論考」の発展的研究を行い、2009年度に英文著書として成果発表を行った。その後は、南北ヨーロッパ美術交流史研究の一環として、「16世紀における銅板油彩画の誕生と展開」という新課題に重点を移し、目下、精力的に調査および研究成果の公表を行っている。これについても、近年中に包括の上、英文著作にて発表する予定である。

〔歴史文化学専攻〕

## 藤井 讓治（日本史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『徳川将軍家領知宛行制の研究』、2008年、思文閣出版
2. 『日本の歴史 近世・近現代編』（共編著）、2010年、ミネルヴァ書房
3. 『新体系日本史 政治社会思想史』（共編著）、2010年、山川出版社

#### 【論文】

1. 「「惣無事」はあれど「惣無事令」はなし」、『史林』93-3、2010年、pp. 1-29.

### II. 自己評価

数年取り組んできた徳川将軍家領知宛行制についての研究をまとめ公にし、この研究に一応の区切りがついた。論文「「惣無事」はあれど「惣無事令」はなし」は、今や通説となっている藤木久志氏の「惣無事令」「豊臣平和令」について、その根拠とされた史料を詳細に検討し、藤木説がなりたたないことを論証したものである。今後、これを前提に豊臣政権像の再構築に取り組んでいきたい。共編著の二著は、広く研究者・学生に向けて書かれたものである。

## 勝山 清次（日本史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『中世伊勢神宮成立史の研究』、2009年、塙書房

### II. 自己評価

ここ数年、中世伊勢神宮の成立過程を祭主支配を基軸にすえながら、家産組織・土地制度・祭神の変容など、様々な側面から検討してきた。その成果は『中世伊勢神宮成立史の研究』にまとめられている。研究の特質は中世伊勢神宮を寺社権門として捉えることと、その成立過程を惣官である祭主の支配を中心にして明らかにしたことにある。禰宜・権禰宜勢力の台頭のみに注目してきたこれまでの研究を批判したものであり、中世伊勢神宮の成立過程を総合的に解明したと評価される。ただ、中世伊勢信仰の展開を十分に議論のなかに組み込んでいない点が問題として残されている。

## 吉川 真司（日本史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『ハンドブック 生駒の歴史と文化』（谷山正道との共編）、2008年3月、生駒市教育委員会
2. 『古代官大寺と寺領荘園の実態的研究』（科研報告書）、2008年9月、京都大学
3. 『律令国家史論集』（栄原永遠男・西山良平との共編）、2010年2月、塙書房
4. 『天皇の歴史02 聖武天皇と仏都平城京』、2011年1月、講談社

#### 【論文】

1. 「周防・長門の封戸と古代荘園」、『山口県史 通史編 原始・古代』、2008年3月、pp. 841-857.
2. 「東大寺大仏の鑄造」、『山口県史 通史編 原始・古代』、2008年3月、pp. 867-873.
3. 「国際交易と古代日本」（韓国語）、海上王張保臯記念財団編『7-10世紀東アジア文物交流の諸像 日本編』（財団法人海上王張保臯記念事業会）、2008年12月、pp. 9-36.
4. 「大宰府国際交易論の再検討」（韓国語）、海上王張保臯記念財団編『7-10世紀東アジア文物交流の諸像 日本編』（財団法人海上王張保臯記念事業会）、2008年12月、pp. 37-83.
5. 「馬からみた長岡京時代」、国立歴史民俗博物館編『桓武と激動の長岡京時代』、山川出版社、2009年1月、pp. 97-109.
6. 「藤原鎌足と三島別業」、茨木市・茨木市教育委員会編『文化財シンポジウム記録集 藤原鎌足と阿武山古墳』、2009年3月、pp. 31-37.
7. 「天皇と赤幡」、稲岡耕二監修『万葉集研究』30、2009年9月、pp. 113-134.
8. 「生駒山麓の初期行基寺院」、生駒民俗会篇『ふるさと生駒 30周年記念誌』、2009年12月、pp. 18-35.
9. 「長岡宮時代の朝廷政治」、『年報都城』21、2010年1月、pp. 61-69.
10. 「古代寺院の食堂」、栄原永遠男ほか他編『律令国家史論集』、塙書房、2010年2月、pp. 453-471.
11. 「撰関政治と国風文化」、京都大学大学院文学研究科編『世界の中の『源氏物語』』、臨川書店、2010年2月、pp. 163-171.
12. 「土塔と行基集団」、堺市編『堺の誇り 土塔と行基』、2010年9月、pp. 27-63.
13. 「九世紀の調庸制」、古代学協会編『仁明朝史の研究』、思文閣出版、2011年2月、pp. 151-173.

### II. 自己評価

日本古代史の総合的把握を長期的目標としているが、古代諸段階論・古代諸地域論に関するいくつかの総説的論考や解説文を発表したほか、王宮・国際関係を基軸とする古代政治史、租税・交易を中心とする古代経済史、さらに古代寺院史に関する個別研究を積み重ねた。また、古代荘園史については科研報告書で中間的総括を行なうことができた。このほか『為房卿記』『東大寺続要録』『永昌記』の校訂作業を進め、前二者については2011年中に刊行できる見込みである。今後もこの方向で研究を進め、律令体制論・行基寺院論に関する研究書のほか、何冊かの一般書を発刊する予定である。

## 谷川 穰（日本史学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『明治前期の教育・教化・仏教』、2008年、思文閣出版

#### 【論文】

1. 「教室で座るということ—学校と身体」、京大人文研「身体の近代」班・菊地暁編『身体論のすすめ』、丸善、2005年4月、pp. 108-121.
2. 「周旋・建白・転宗—佐田介石の政治行動と「近代仏教」—」、明治維新史学会編『明治維新と文化』、吉川弘文館、2005年8月、pp. 55-78.
3. 「説教の位相—筑摩県における教導職—」、佐々木克編『明治維新期の政治文化』、思文閣出版、2005年9月、pp. 231-261.
4. 「明治一〇年代における僧侶の学校教員兼務—教育と仏教の近代史にむけての一視角—」、『仏教史学研究』49巻1号、2006年8月、pp. 39-58.
5. 「内田正雄『輿地誌略』」・「内村鑑三『地理学考』」・「牧口常三郎『人生地理学』」・「和辻哲郎『風土』」（文献解題）、山室信一編『「帝国」日本の学知第8巻 空間形成と世界認識』、岩波書店、2006年10月、附録 pp. 2-6.
6. 「明治中期における仏教者の俗人教育」、『人文学報』94号、2007年2月、pp. 37-76.
7. 「田中不二麿をめぐる人々—田中不二麿宛書簡を通して—」、平成15～18年度科学研究費補助金（基盤研究（B）・代表者湯川嘉津美）成果報告書『近代初頭日本における教育の地方分権化・自由化政策の形成』、2007年3月、pp. 2-10, 18-23, 46-54.
8. 「明治前期の仏教と学校教育」、『宗教研究』81巻4号、2008年3月、pp. 126-128.
9. 「「透明ランナー」は捉えられるか—勝手に走り出す戦後子ども史・オープン戦—」、『教育史フォーラム』3号、2008年3月、pp. 21-34.
10. 「北垣府政期の東本願寺—本山・政府要人・三井銀行の関係を中心に—」、丸山宏・伊従勉・高木博志編『近代京都研究』、思文閣出版、2008年8月、pp. 365-389.
11. 「宗教・思想—（2008年の歴史学界 回顧と展望・日本（近現代））」、『史学雑誌』118編5号、2009年5月、pp. 174-176.
12. 「拙著書評に対する若干の応答と反省」、『日本教育史研究』28号、2009年10月、pp. 102-106.
13. 「「教」の時代—近代日本形成期の仏教と民衆教化・僧侶養成・俗人教育—」、『季刊日本思想史』75号、2009年12月、pp. 36-53.
14. 「分離せず、衝突せず—明治期の教育と仏教の一側面—」、『宗教研究』83巻4号、2010年3月、pp. 132-133.
15. 「福嶋寛隆・藤原正信・中川洋子編『反省（会）雑誌』（書評）』、『仏教史学研究』52巻2号、2010年3月、pp. 96-105.

### II. 自己評価

大学院生時代以来、近代日本の宗教と教育、とりわけ明治前期の仏教と学校教育の関係史というテーマで10年ほど研究に取り組んできた。その成果の一端は単著において結実し、歴史学・宗教学・教育学にわたる国内外の学術雑誌に書評が9本掲載され、領域横断的な試みが各学

界で一定の評価を得たと考える。今後は明治前期から大正・昭和期まで対象時期を広げるとともに、すでに成果を公表しつつある近代日本の仏教をめぐる社会史、そしてキリスト教や神道・新宗教を含んだ宗教と教育の関係史の研究を、宗教や教育の現場に即して実証的に展開する予定であり、それに向けた史料収集も蓄積しつつある。

## 夫馬 進（東洋史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『연행사와 통신사 (燕行使と通信使)』、2008年、ソウル、新書苑

#### 【論文・翻訳】

1. “Ming-Qing China’s Policy towards Vietnam as a Mirror of Its Policy towards Korea: With a Focus on the Question of Investiture and ‘Punitive Expeditions’.” *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*, No. 64. 2007. pp. 2-33.
2. “Litigation Masters and the Litigation System of Ming and Qing China..” *International Journal of Asian Studies* 4/1. 2007. pp. 79-111.
3. 「1765年洪大容的中国京師行与 1764年朝鮮通信使」、『復旦学報（社会科学版）』2008年第4期、2008年、pp. 18-30.
4. 「關於日本現存《燕行録》の文献整理」、『台湾大学人文社会高等研究院通訊』第三卷第三期（総第8期）、2008年、pp. 15-20.
5. 「一六〇九年、日本の琉球併合以降における中国・朝鮮の対琉球外交—東アジア四国における冊封、通信そして杜絶—」、『朝鮮史研究会論文集』第四十六集、2008年、pp. 5-38.
6. 「1609년 일본의 류큐 합병 이후 중국, 조선의 류큐 외교-동아시아국의 책봉, 통신 그리고 두절-」、『梨花史學研究』37、2008年、pp. 1-41.
7. 「一七六五年洪大容の燕行と一七六四年朝鮮通信使—両者が体験した中国・日本の「情」を中心に—」、『東洋史研究』67-3、2008年、pp. 141-176.
8. 「中国社会福祉史上における近代の始まり—特に「教養兼施」の「新しさ」について—」、『東アジアにおける公益思想の変容—近世から近代へ—』、日本評論社、2009年、pp. 195-228.
9. 「訟師秘本『珥筆肯綮』所見的訟師実象」、『明清法律運作中的權力与文化』、台北、中央研究院・聯經出版公司、2009年、pp. 9-33.
10. 「1765年洪大容的中国京師行与 1764年朝鮮通信使」、復旦大学文史研究院『從周边看中国』、北京、中華書局、2009年）、pp. 26-40.
11. 「국교 두절 하, 朝鮮・琉球 양국 사절단의 北京 접촉」、『大東文化研究』第68輯、2009年、pp. 37-47.
12. 「明清時期寡婦的地位及逼嫁習俗」、『新近海外中国社会史論文選訳』、天津、天津古籍出版社、2010年、pp. 46-68.
13. 「訟師秘本の世界」、『北大法律評論』11-1、2010年、pp. 210-238.



## II. 自己評価

私は現在主に、東アジア外交史の研究、朝鮮燕行使・朝鮮通信使の研究および中国訴訟社会史の研究を同時に進めている。朝鮮燕行使と朝鮮通信使の研究については、2008年にソウルでこれまでの私の研究論文『燕行使と通信使』として出版された。これに対しては、従来ではまったくなかった研究として韓国の学界で高い評価を得ていると聞く。また中国語訳が『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』というタイトルで2010年年末に上海で出版される予定である。

中国訴訟社会史の研究については2006年度から4年間、科学研究費補助金研究(基盤研究(A))を組織して研究を進めてきた。この成果はまもなく編著『中国訴訟社会史の研究』として出版される予定である。あと、これまで三方向で進めてきた研究をそれぞれまとめる仕事が残っている。

## 杉山 正明 (東洋史学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『モンゴル帝国と長いその後』、2008年2月、講談社
2. 『興亡の世界史』全21巻(編著)、2008年～2010年6月、講談社
3. 『クビライの挑戦—モンゴルによる世界史の大転回』、2010年8月、講談社学術文庫
4. 『ユーラシア中央域の歴史構図：13～15世紀の東西』(編著)、2010年3月、総合地球環境学研究所
5. 『ユーラシアの東西—中東・アフガニスタン・ロシア・中国そして日本』、2010年12月、日本経済新聞出版社

#### 【論文】

1. 「世界史はこれから—日本発の歴史像をめざして」、『人類はどこへ行くのか』、講談社、2009年4月、pp. 33-70.
2. 「地図が語る地球世界史への道」、『Wedge』、2010年3月、pp. 66-67.

## II. 自己評価

2008年からの3年間は、文学研究科における教育・研究活動は当然として、国内外での活動としては総合地球環境学研究所におけるプロジェクトの推進と乾燥化をめぐる国際討論会をはじめ、本学文学研究科と国際学术交流協定をむすんでいる北京大学歴史学系での学術講演等、海外での講演・シンポジウム5件、国内講演5件をおこなった。また、執筆・出版としては単著3件、編著1件と21巻のシリーズ物の編集、ほか論文は2件であった。かえりみて、可もなし不可もなしといったところか。そもそも学術研究やその成果物としての著作などについて、みずから評価するなど本来ナンセンスであり、評価は他者がなすほかはない。さらには、まさに棺をおおってのち定まるたぐいのことだろう。わたくし自身については真の世界史を創るべく進むのみである。

## 吉本 道雅（東洋史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『中国古代史論叢 五集』（共著）、2008年3月、立命館東洋史学会
2. 平成18年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書『内蒙古東部における青銅器文化関係資料の調査に基づく先秦時代北方民族の研究』（編著）、2009年3月、京都大学文学研究科
3. 『中国古代史論叢 六集』（共著）、2009年3月、立命館東洋史学会
4. 『中国古代史論叢 七集』（共著）、2010年3月、立命館東洋史学会

#### 【論文】

1. 「焼當羌系譜考」、『東亜文史論叢』2007、2007年11月、pp. 1-8.
2. 「戦国期の易姓革命説」、『中国古代史論叢 五集』、2008年3月、pp. 1-31.
3. 「中国先秦時代の貂」、『京都大学文学部研究紀要』47、2008年3月、pp. 1-36.
4. 「東胡考」、『史林』91-2、2008年3月、pp. 95-115.
5. “Western Zhou History in the Collective Memory of the People of the Western Zhou: An Interpretation of the Inscription of the “Lai pan.” by MATSUI Yoshinori.（共訳）、『東洋史研究』66-4、2008年3月、pp. 1-49.
6. 「内蒙古東南部出土中原有銘青銅器札記」、『東亜文史論叢』2008-2、2008年12月、pp. 11-24.
7. 「先秦時代の内蒙古東南部における考古学的諸文化—近年の環境考古学的研究に寄せて」、『史林』92-1、2009年1月、pp. 195-213.
8. 「中国先秦時代の羌」、『中国古代史論叢 六集』、2009年3月、pp. 1-30.
9. 「濊貂考」、『京都大学文学部研究紀要』48、2009年3月、pp. 1-53.
10. 「先秦」（改訂版）、『中国の歴史』上、昭和堂、2009年4月、pp. 43-82.
11. 「契丹源流考」、『契丹研究의 現況과 研究方向』、檀国大学校北方文化研究所、2009年10月、pp. 17-28→再録；『北方文化研究』1、2010年1月、pp. 95-109.
12. 「後漢書三国志鮮卑伝疏証」、『東亜文史論叢』2009-2、2009年12月、pp. 63-95.
13. 「烏桓史研究序説」、『京都大学文学部研究紀要』49、2010年3月、pp. 55-122.
14. 「後漢書東夷列傳序疏証」、『中国古代史論叢 七集』、2010年3月、pp. 1-52.
15. 「魏書序記考証」、『史林』93-3、2010年5月、pp. 58-86.
16. 「契丹八部考」、『契丹의 歴史와 文化』、檀国大学校北方文化研究所、2010年10月、pp. 1-25.

### II. 自己評価

中国史の立場から、先秦時代の中国本土における王朝・諸侯国の国制、先秦期を扱った資料の研究を進めてきた。その過程で中国専制国家の一つの要件となる華夷関係の形成過程をも扱ったが、現時点では東北アジアそれ自体の研究に移行している。文献・考古学的資料の基礎的研究に加え、内蒙古東部については現地調査をも進めている。中国のほか、韓国・モンゴル国の研究者との交流を進め、日本では必ずしも全面的には紹介されていない韓国の東北アジア・北アジア研究の摂取につとめている。東北アジア諸国間におけるナショナリズムの角逐という

近年の動向および戦前日本の「満蒙史」「満鮮史」研究を批判的に再検討することによって、中国史・韓国史といったナショナルヒストリーを克服する「東洋史」の再構築を志向する。東北アジア諸国に関する包括的な歴史認識を提供するものとして、社会的にも多大な意義を有するものと確信する。

## 中砂 明德（東洋史学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「イエズス会士フランチェスコ・サンビアシの旅」、『アジア史学論集』第3号、2010年4月、pp. 30-69.

### II. 自己評価

平成21年度科学研究費補助金（基盤研究B）「ヨーロッパ人の文献史料にもとづく清朝前期の政治と社会に関する総合的研究」（代表者：松浦茂）の研究分担者としての活動が主である。このプロジェクトは、清朝前期史においてロシア語、ポルトガル語、オランダ語等の史料が有効に使われてこなかった現状を打破するものとして構想され、その中で中砂はイエズス会のポルトガル語史料、VOCのオランダ語史料の収集・解析を担当し、明末清初期について貴重な証言を残しているイタリア人会士の軌跡をポルトガルのアジュダ図書館所蔵の史料を用いて明らかにした論文を公刊した。これまで断片的にしか取り上げられてこなかったフランチェスコ・サンビアシの活動を一貫した形で提示したのは本論文がはじめてである。ただ、ローマ・イエズス会文書館所蔵の史料活用が十分ではなかったため今夏ローマを訪問し、資料収集を行った。その成果については別途また報告する予定である。

## 高嶋 航（東洋史学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「1920年代的徴婚広告」、李長莉・左玉河主編『近代中国社会与民間文化』第二輯、北京、社会科学文献出版社、2007年6月、pp. 301-318.
2. 「「満洲国」の誕生と極東スポーツ界の再編」、『京都大学文学部研究紀要』第47号、2008年3月、pp. 131-181.
3. 「近代中国求婚広告史（1902-1943）」、森時彦編『20世紀中国の社会システム』、京都大学人文科学研究所、2009年6月、pp. 51-94.
4. 「戦争・国家・スポーツ：岡部平太の「転向」を通して」、『史林』第93巻第1号、2010年1月、pp. 98-130.
5. 「戦時下の平和の祭典：幻の東京オリンピックと極東スポーツ界」、『京都大学文学部研究紀要』第49号、2010年3月、pp. 25-72.

6. 「1920年代の中国における女性の断髪：議論・ファッション・革命」、石川禎浩編『中国  
社会主義文化の研究』、京都大学人文科学研究所、2010年、pp. 27-60.

## II. 自己評価

ここ三年間は、従来からの課題である中国近代女性史と、新しい課題であるアジア・スポーツ史を並行して進めてきた。前者に関しては論文二本を公刊し、うち一本は中国の学会でも発表した。のこるもう一本も近々中国語に翻訳されることになっている。もう一つの課題、アジア・スポーツ史はまったく新しい研究分野であり今後、精力的に展開をはかる予定である。よくいえば学際的、わるくいえばどの分野にもじっくりこないテーマで、既成の学界からまだしかるべき評価を受けていない。『史学雑誌』の「回顧と展望」でも取り上げられず、科研の申請もうまくいっていない。ただ、二つの論文に反応した出版社があり、そのうちの一家のために、現在『帝国日本とスポーツ』と題する本を執筆中である。この本が出版されれば、この新しい分野に対して、注目が集まるのではないかと期待している。また、現在、近代中国を考えるうえで不可欠のテキスト、梁啓超の『新民説』を翻訳中で、2011年度中の刊行をめざしている。本書の翻訳は学界から大いに歓迎されるだろうと考えている。

## 井谷 鋼造 (西南アジア史学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「トルキスタン市のアフマド・ヤサヴィー廟について」、追手門学院大学文学部アジア文化学科『アジア観光学年報』5、2004年、pp. 59-68.
2. 「イスラーム世界の市場についての一考察」、2004年度追手門学院大学共同研究・研究成果報告書『アジアの市場（いちば）の現状と背景—ヒトとモノの出会いと交流—』、2005年、pp. 52-57.
3. 「トルコ共和国イスタンブール市内にある、ファーティフ・スルターン・ムハンマド時代のふたつの碑文」、追手門学院大学『アジア文化学科年報』8、2005年、pp. 15-25.
4. 「トルコ共和国ニイデ市内にある、西暦13-15世紀のアラビア文字碑文」、『追手門学院大学文学部紀要』41、2005年、pp. 1-24.
5. 「中央アジアにおけるアラビア文字墓碑銘研究の試み」、平成14～17年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)(研究代表者：堀川徹)『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究』研究成果報告書、2006年、pp. 16-27.
6. 「トルコ共和国アマスヤ市内にある西暦13-15世紀のアラビア文字碑文」、『追手門学院大学文学部紀要』42、2007年、pp. 1-25.
7. 「クズルデリ・テッケでの墓碑銘調査とディメトカ(Dimetka)のムハンマド1世ジャーミウの碑板解読」、2004～2006年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)(研究代表者：佐島隆)『「アレヴィー・ベクタシ」集団のエスニシティと社会的・文化的秩序の変化と持続—トルコ・ヨーロッパにおけるトルコ系集団を中心として—』研究成果報告書、2007年、pp. 38-48.
8. 「トルコ共和国イズニク市内にある西暦14-15世紀のアラビア文字碑板」、『追手門学院大

学国際教養学部紀要』1、2008年、pp. 47-68.

9. 「歴史的なモニュメントの碑刻銘文資料が語るもの—西暦 12-15 世紀アナトリアの場合—」、『史林』91-1、2008年、pp. 101-140.
10. 「オスマーン帝国のモニュメントに残された刻銘文資料の語るもの—西暦 15-17 世紀—」、『追手門学院大学国際教養学部紀要』2、2009年、pp. 1-27.
11. 「マレーシアで訪ねたイスラーム文化関連施設」、追手門学院大学国際教養学部アジア学科『アジア観光学年報』10、2009年、pp. 99-111.
12. 「トルコ共和国エディルネ市内にある西暦 15 世紀のアラビア語石板銘文について」、『追手門学院大学国際教養学部紀要』3、2010年、pp. 23-48.

## II. 自己評価

上記の業績は全て 2010 年 4 月に京都大学へ採用される以前のものであり、全てが碑刻銘文資料の研究に関するものである。今後は、これらの研究を基に歴史研究をテーマとした研究を発表し、併せて碑刻銘文資料の集成や網羅的な研究を行ないたいと考えている。

## 久保 一之（西南アジア史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「ナヴァーイー（ミール・アリーシール）の社会観 — *Maḥbūb al-qulūb* 第 1 章日本語訳（付ローマ字転写校訂テキスト） —」、『京都大学文学部研究紀要』第 47 号、2008 年 3 月、pp. 183-295.
2. 「Maria E. Subtelny 著 *Timurids in Transition: Turko-Persian Politics and Acculturation in Medieval Iran*」（書評）、『西南アジア研究』第 71 号、2009 年 9 月、pp. 69-89.

#### 【自己評価】

史料研究において成果が上がったと言える。特に 1 は、ティムール朝末期の有力者・文人による難解な教訓書を取り上げ、著者の社会観が色濃く反映された部分を校訂・翻訳したもので、相当な労力を費やしている。2 では斬新な内容を持つ研究書をつぶさに検討・評価し、巻末所載の寄進文書（写真版と英訳）の特徴と重要性を十分に把握した。

反省点として挙げられるのは、上記の史料研究の過程で着想を得た、文化史に関わる研究成果を迅速にまとめられなかったことである。今後も近世ペルシア語文献およびチャガタイ・トルコ語文献の研究を進めながら、当該期の国政・社会・文化の解明に取り組むが、まずは上述の課題を優先させる予定である。

## 服部 良久（西洋史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『アルプスの農民紛争—中・近世の地域公共性と国家』、2009年3月、京都大学学術出版会
2. 『人文学への接近法—西洋史を学ぶ—』（共編著）、2010年6月、京都大学学術出版会
3. 『紛争史の現在—日本とヨーロッパ』（共編著）、2010年10月、高志書院

#### 【論文】

1. 「中世ドイツにおける紛争解決と秩序」、『歴史と地理』No.609、2007年11月、pp.1-16.
2. 「初期シュタウフェン朝時代の紛争解決と政治秩序 — 国王と『ヴェルフェン家』の対立をめぐって—」、『京都大学文学部研究紀要』49号、2010年3月、pp.187-290.

### II. 自己評価

10年来続けている「ヨーロッパ中世のコミュニケーション・紛争・秩序」に関する研究は、2度にわたる関連テーマの科研費申請採択により、一定の成果を挙げることができた。ヨーロッパ中世後期・近世初期の農村社会においてこのテーマを扱った研究成果は2008年度末の著書（単著）として公刊し、また日欧比較史の観点から日本史研究者や海外の研究者との交流を行うことができた。同時に進めてきたドイツ語圏を中心とする中世政治史におけるコミュニケーション、紛争、秩序の研究も、数篇のモノグラフや口頭発表を行い、著書として刊行することを目指している。昨年度からは、科研費・基盤研究（A）により「中・近世ヨーロッパにおけるコミュニケーションと紛争・秩序」をテーマとする日欧の研究者の共同研究を組織し、ヨーロッパおよび日本において定期的な研究集会を開催しており、2011年度は国際シンポジウムを開催する予定である。この共同研究によってヨーロッパ中・近世史の新しい歴史像を構築することを目指す。

## 南川 高志（西洋史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『人文学への接近法—西洋史を学ぶ—』（共編著）、2010年6月、京都大学学術出版会

#### 【論文・研究ノート・解説】

1. 「ハンガリーのローマ帝国 —ブダペスト市内のローマ遺跡について—」、『西洋古代史研究』第8号、2008年12月、pp.23-41.
2. “The Power of Identity: A Japanese Historical Perspective on the Study of Ancient History.” Angelos Chaniotis, Annika Kuhn and Christina Kuhn (eds.), *Applied Classics: Comparisons, Constructs, Controversies*, Franz Steiner Verlag / Stuttgart, 2009, pp. 231-243.
3. 「ローマ帝国の『衰亡』とは何か」（編著）、『西洋史学』第234号、2009年9月、pp.61-73.
4. 「解説 二一世紀にローマ帝国を読む」、クリストファー・ケリー（藤井崇訳）『ローマ帝国』岩波書店、2010年2月、pp.183-195.

5. 「『背教者』ユリアヌス帝登位の背景 —紀元4世紀中葉のローマ帝国に関する一考察—」  
『西洋古代史研究』第10号、2010年12月、pp. 1-21.

#### 【書評】

1. 「P. Heather, *The Fall of the Roman Empire: A New History of Rome and the Barbarians*」 『西洋古典学研究』第57巻、2008年3月、pp. 142-145.
2. 「大清水裕著「3世紀後半のイタリア統治の変容と都市社会」 『法制史研究』58、2009年3月、pp. 415-417.

## II. 自己評価

2007年度以降現在に至る期間、私の主たる研究テーマは後期ローマ帝国時代の政治と社会であり、それ以前に実施したローマ帝国西方属州研究の成果を生かしつつ、西洋古代終焉期の再検討に取り組んできた。2008年11月から2010年9月の間は京都大学本部の役職（教育・学生担当理事補）を兼務していたため、多忙で研究時間を確保することが難しかったが、それでも2006年4月より実施していた科学研究費基盤研究(C)によるプロジェクトを2010年3月に計画通り終了でき、この間、とくに2008年5月に日本西洋史学会大会でローマ帝国の衰亡をめぐるシンポジウムを主宰し、その成果を刊行したことは、学界への貢献と自負している。また、東洋での西洋古代史研究の意義と課題を論じた英文論文が国際共同研究論集に収められてドイツで刊行され、古代史・古典学の国際学界にも貢献できた。2010年4月より末期ローマ帝国を対象とする基盤研究(C)の新プロジェクトを開始することができたので、今後4年間で古代終焉期に関する研究をさらに深め、成果を著書にまとめたいと考えている。

## 小山 哲（西洋史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『人文学への接近法—西洋史を学ぶ—』（共編著）、2010年6月、京都大学学術出版会

#### 【論文】

1. 「「貴族の共和国」像の変容—近世ポーランド・リトアニア共和国をめぐる最近の研究動向から」、『東欧史研究』創刊30周年記念号、2008年3月、pp. 20-38.
2. 「ヤーシの留学—ポーランド貴族が西欧で学んだこと」、前川和也編『空間と移動の社会史』、ミネルヴァ書房、2009年2月、pp. 269-307.
3. 「「世界史」の日本的専有—ランケを中心に」（韓国語）、ド・ミョンヘ、ユン・ヘドン編『歴史学の世紀—20世紀韓国と日本の歴史学』、ヒューマニスト出版社（ソウル）、2009年6月、pp. 53-129、pp. 531-535.
4. 「1680年代—ポーランド・リトアニア共和国の転機?」、『Odysseus』（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）、別冊1、2010年3月、pp. 149-153.
5. 「「軍事革命」の向う岸?—近世ポーランド・リトアニア共和国における軍隊・国家・宗教」、渋谷聡編『近世ヨーロッパの戦争からみる国家とアイデンティティの形成に関する総合的研究』（科学研究費補助金成果報告書 基盤研究(B) 2007年度～2009年度）、2010年3月、

pp. 44-50.

6. 「近世ポーランドにおける戦争の記憶と民族的・宗派的アイデンティティの構築—ヤスナ・グラ攻囲戦（1655年）の場合」、渋谷聡編『近世ヨーロッパの戦争からみる国家とアイデンティティの形成に関する総合的研究』（科学研究費補助金成果報告書 基盤研究（B）2007年度～2009年度）、2010年3月、pp. 125-143.
7. “On the Opposite Side of the Military Revolution? The Army, State and Society in the Polish-Lithuanian Commonwealth in the 16th - 18th Centuries.” Akira Shibutani (ed.), *The Synthetic Study about the Formation of States and Identity from the Viewpoint of Wars in Early Modern Europe* (A report of research project subsidized by Grants-in-Aid for Scientific Research of the Japan Society for the Promotion of Science, Scientific Research (B) 2007-2009), 2010年3月, pp. 37-44.
8. “Memory of War and the Construction of the Ethno-Confessional Identity in Early Modern Poland: the Case of the Siege of Jasna Gora, 1655.” Akira Shibutani (ed.), *The Synthetic Study about the Formation of States and Identity from the Viewpoint of Wars in Early Modern Europe* (A report of research project subsidized by Grants-in-Aid for Scientific Research of the Japan Society for the Promotion of Science, Scientific Research (B) 2007-2009), 2010年3月, pp. 126-144.

## II. 自己評価

論文の多くは、近世ポーランド・リトアニア共和国の政治と文化にかんする個別研究である（論文 2, 4, 5, 6, 7, 8）。切り口はさまざまであるが、いずれも近世ポーランドにおける貴族共和政の特質を多角的に解明することを目標としている。また、最近10年間のポーランドにおける近世政治文化史の研究動向の整理を試みた（論文1）。学術的な国際交流にかんしては、日本におけるランケ史学の受容について学問史的に考察した論考（論文3）が韓国で刊行されたほか、2009年11月にアウクスブルク大学ヨーロッパ文化史研究所で開催されたシンポジウム「近世ヨーロッパにおける平和の諸相」で研究発表を行ない、2010年8・9月には「国際移動セミナー ヨーロッパ東部境界地域の共有遺産研究 第2回」（ポーランドおよびリトアニア）に参加した。

複数の共同研究に参加しながら研究を進めてきたこともあって研究テーマが拡散し、成果が断片的になっていること、また、研究成果の公表に時間がかかり過ぎたことがこの間の反省点である。個別研究の結果をふまえて、より総合的なポーランド近世史の叙述を行なうことが今後の課題である。

## 金澤 周作（西洋史学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『チャリティとイギリス近代』、2008年、京都大学学術出版会
2. 『人文学への接近法—西洋史を学ぶ—』（共編著）、2010年、京都大学学術出版会

#### 【論文】

1. 「2003年の歴史学界—回顧と展望 イギリス—近代」、『史学雑誌』第113篇第5号、2004年、pp. 347-54.



2. 「19世紀後半における英国の転換とフィランソロピー—投票チャリティを中心に」、『史林』第87巻第2号、2004年、pp. 37-70.
3. 「近代イギリス（18世紀半～19世紀後半）における慈善活動の諸類型と規模」、『進化経済学論集』第9集、2005年、pp. 601-10.
4. 「弱者救済の結社—チャリティ団体」川北稔編『結社のイギリス史—クラブから帝国まで』、山川出版社、2005年、pp. 177-91、2005年.
5. 「善意をガイドする—近代イギリスとチャリティ」、『歴史と地理—世界史の研究』594号、山川出版社、2006年、pp. 58-61.
6. 「チャリティと女性—『レディの天職』再考」、河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』、青木書店、2006年、pp. 206-20.
7. 「学びを支える社会とカー—近代イギリスの教育とチャリティ」、南川高志編『知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房、2007年、pp. 63-87.
8. 「近代イギリスにおける貧者の手紙—公的救済・チャリティ・共同体」、『関学西洋史論集』第31号、2008年、pp. 3-9.
9. 「旧き腐敗の諷刺と暴露—19世紀初頭における英国国制の想像／創造」、近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』、山川出版社、2008年、pp. 444-479.
10. “Wohltätigkeit und westlicher Einfluss im Japan der Meiji-Zeit, 1868-1912.” R. Liedtke / K. Weber (Hg.), *Religion und Philanthropie in den europäischen Zivilgesellschaften: Entwicklungen im 19. und 20. Jahrhundert* (Paderborn, 2009), pp. 174-200.
11. 「19世紀」近藤和彦編『イギリス史研究入門』、山川出版社、2010年、pp. 128-153.

## II. 自己評価

年来の研究課題であった近代イギリスにおけるチャリティの全貌解明については、2008年に著書にまとめる形でとりあえず達成することができた。現代的な問題とも結びついているので、今後はより新しい時代に重心を移していくこと、そしてイギリス以外にも目を向けることを自らの課題としている（たとえば2009年論文）。ほかに、イギリス国制史の研究と海難の史的研究にも取り組んでいる。前者は2008年に論文として公刊できた。後者は現在、講義をしつつ深めていっており、来年にはイギリス海事史に関する編著を出版する予定である。また、こうした個別のテーマにとどまらず、イギリス近代史やヨーロッパ史を幅広くとらえる努力も続けたい（その当面の成果は2010年の『イギリス史研究入門』および『人文学への接近法—西洋史を学ぶ』）。

## 上原 真人（考古学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『考古学—その方法と現状—』（共著）、2009年3月、(財)放送大学教育振興会
2. 『文化的景観とは何か—その輪郭と多様性をめぐって—』（文化的景観研究会(第1回)報告書)、奈良文化財研究所研究報告第1冊、2009年12月

## 【論文】

1. 「序」、『京都大学所蔵古瓦図録Ⅱ—天沼俊一コレクション・日本編—』（京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」）、2007 年 3 月、p. 3.
2. 「解説・佐原真〈幡枝窯の瓦〉」、『史林』第 90 巻第 3 号、2007 年 5 月、pp. 93-100.
3. 「中寺廃寺跡の史的意義」、『中寺廃寺跡』（まんのう町内遺跡発掘調査報告書第 3 集）、まんのう町教育委員会 2007 年 7 月、pp. 131-166.
4. 「日本のかたちができる時（総論・飛鳥奈良時代）」、『よみがえる日本の古代—旧石器～奈良時代の日本がわかる復元画古代史—』（金関恕監修・早川和子画）、小学館、2007 年 7 月、pp. 122-124.
5. 「古代山陽道と駅家の研究」、『明日をつなぐ道—高橋美久二先生追悼文集—』、京都考古刊行会、2007 年 11 月、pp. 5-8.
6. 「古代仏教と山の信仰」、『三徳山成立の歴史背景—三徳山と古代仏教文化—』、三徳山を守る会、2007 年 11 月、pp. 2-10.
7. 「〈お稲荷さん〉よりも昔の稲作」、『朱』51 号（伏見稲荷大社社務所）、2008 年 2 月、pp. 51-66.
8. 「国分寺と山林寺院」、『シンポジウム 国分寺の創建を読む I—思想・制度編—』、国士舘大学、2008 年 2 月、pp. 1-42.
9. 「京大考古研での出会いから」、『蝶から古代史へ—鎌田元一追想集—』、鎌田元一先生追悼事業会、2008 年 2 月、pp. 74-77.
10. 「中寺廃寺の空間構造」、『忘れられた霊場をさぐる 3』、平成 18 年度栗東市出土文化財センター講座報告集、2008 年 3 月、pp. 33-43.
11. 「(2008 年度史学研究会大会講演要旨) 歴史情報源としての瓦」、『史林』第 92 巻第 1 号、史学研究会、2009 年 1 月、pp. 268-269.
12. 「序」、『京都大学所蔵古瓦図録Ⅲ—天沼俊一コレクション・中国・朝鮮編—』、京都大学考古学研究室、2009 年 3 月、p. 3.
13. 「レプリカの威力—唐古遺跡出土の斧柄の複製品をめぐる—」、『木・ひと・文化—出土木器研究会論集—』、2009 年 5 月、pp. 111-119.
14. 「階級格差を示す木工技術—墨壺—」、『木の文化Ⅱ—古墳時代の木器—』、下関考古博物館平成 21 年度企画展図録、2009 年 10 月、pp. 21-25.
15. 「撰関・院政期の京都における讃岐系軒瓦の動向」、『平安京とその時代』、思文閣出版、2009 年 12 月、pp. 313-347.
16. 「撰関・院政期の京都における丹波系軒瓦の動向」、『佛教藝術』308 号、2010 年 1 月、pp. 79-115.

## II. 自己評価

あいかわらず、序文・推薦文・追想や解説・コメント、講演原稿、依頼原稿が多いが、かねてからの研究テーマである平安時代の瓦生産の実態に迫る論考をいくつか書き下ろすことができたのはうれしい。また、余技で始まった出土木器や山林寺院に関しても新たな視角が提示できたと思う。興味を持って気長に検討していけば、新たな道が開けるようだ。近年、外的強制

で着手した文化的景観や律令祭祀もしばらく続ければ、独自の視点が生まれると期待できそうだ。

## 泉 拓良（考古学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の地中海 2008 年度』（共著）、2010.3、京都大学大学院文学研究科考古学研究室

#### 【論文】

1. 「II 縄文時代」（共著）、『考古学の基礎知識』、角川選書 409、2007.5、pp. 77-154.
2. 「レバノンにおけるアンフォラ編年—鉄器時代からヘレニズム時代—」、『日本西アジア考古学会十周年記念連続シンポジウム 西アジア考古学の編年—日本の考古学調査団からのアプローチ—』、2007、pp. 58-63.
3. 「旧徳山村所在の縄文遺跡の GIS 研究」（共著）、『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』2007.6、pp. 28-29.
4. 「海外調査における碑文資料の収集方法」（共著）、『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』、2007.6、pp. 86-187.
5. 「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式」、『総覧 縄文土器』、『総覧 縄文土器』刊行委員会 2008.3、pp. 502-509.
6. 「狩猟採集社会の発展—遊動から定住へ—」、『新修 豊中市史通史 1』、豊中市史編さん委員会、2009.2、pp. 1-31.
7. 「第 1 章考古学とは何か」、『考古学—その方法と現状—』、放送大学教育振興会、2009.3、pp. 9-24.
8. 「第 2 章発掘調査の歴史と実際」、『考古学—その方法と現状—』、放送大学教育振興会、2009.3、pp. 25-45.
9. 「第 11 章考古学と分布」、『考古学—その方法と現状—』、放送大学教育振興会、2009.3、pp. 207-229.
10. 「第 15 章考古学の多様性」（共著）、『考古学—その方法と現状—』、放送大学教育振興会、2009.3、pp. 287-304.
11. 「フェニキアのネクロポリス—レバノン・ラマリ遺跡の発掘調査—」（共著）、『平成 21 年度考古学が語る古代オリエント』第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集、2010.3、pp. 124-129.
12. 「カザフスタン・トゥルゲン川扇状地でのクルガンの確認踏査—2008 年度—」（共著）、『平成 21 年度考古学が語る古代オリエント』、第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集、2010.3、pp. 130-135.
13. 「縄文文化と日本文化」（共著）、『縄文時代の考古学 1』、同成社、2010.5、pp. 50-77.

## II. 自己評価

2007年度から2010年10月までの業績は大きく3分野に分かれる。「縄文時代研究」と「海外での発掘調査」と「考古学研究法」であり、バランスの取れた研究を進めてきたと評価できる。(1)縄文時代に関する研究では、日本文化研究と縄文文化研究の関わりという、あまりこれまで取り組まれてこなかった分野に挑戦した業績は、高く評価される。(2)海外での発掘調査では、カザフスタンにおける一水系全域でのクルガン(古墳)の詳細分布調査は、画期的なものと評価された。レバノンでの継続調査では、ヘレニズム・ローマ時代の埋葬に関する資料を着々と集積し、その成果をチュニジアで発表した。現地で高い評価を受けた。(3)考古学研究法。上原真人先生と共同で編集した放送大学のテキストは、とかく時代概説になりがちな考古学概論を、濱田耕作先生の考古学研究法を中心とした『通論考古学』の流れに戻したと高く評価された。反省としては、海外での発掘が集中した2008年に、執筆活動がほとんどできなかったことがある。2012年までには海外の発掘成果をまとめて研究報告書を作成したい。

## 吉井 秀夫 (考古学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『古代朝鮮 墳墓にみる国家形成』、2010年2月、京都大学学術出版会
2. 『朝鮮三国時代の墳墓における棺・槨・室構造の特質とその変遷』（平成18年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書)、2010年3月、京都大学文学研究科

#### 【論文】

1. 「日帝強占期石窟庵の調査および解体修理と写真撮影について」(韓国語)、成均館大学校博物館編『慶州新羅遺跡の昨日と今日—石窟庵・仏国寺・南山—』(成均館大学校博物館所蔵ガラス乾板展Ⅱ)、成均館大学校博物館、2007年9月、pp.198-209.
2. 「武珍古城出土文字瓦の再検討」、和田晴吾先生還暦記念論集刊行会編『吾々の考古学』、和田晴吾先生還暦記念論集刊行会、2008年5月、pp.583-599.
3. 「墓制からみた百済と倭—横穴式石室を中心に—」、辻秀人編『百済と倭国』、高志書院、2008年10月、pp.117-136.
4. 「澤俊一とその業績について」、『高麗美術館研究紀要』第6号、高麗美術館研究所、2008年11月、pp.77-89.
5. 「平瓦製作技術の変遷を通してみた9・10世紀韓日交流史研究序説」(韓国語)、財団法人海上王張保阜記念事業会編『7～10世紀東アジア文物交流の諸像 日本編』、財団法人海上王張保阜記念事業会、2008年12月、pp.85-114.
6. 「武珍古城出土文字瓦の再検討—新羅下代湖南地方文字瓦の総合研究のために—」(韓国語)、財団法人海上王張保阜記念事業会編『7～10世紀東アジア文物交流の諸像 日本編』、財団法人海上王張保阜記念事業会、2008年12月、pp.115-154.
7. 「京都大学総合博物館所蔵山田鈔次郎寄贈高句麗瓦の検討」(韓国語、共著)、鄭仁盛編『日本所在高句麗遺物Ⅱ(日帝強占期高句麗遺跡調査の再検討と関西地域所在高句麗遺物1)』、東北亜歴史財団、2009年6月、pp.78-229.

8. 「植民地時代慶州における古蹟調査事業」、『月刊考古学ジャーナル』No.596、2010年2月、pp. 14-17.
9. 「百濟墓制研究の新潮流」、『季刊考古学』第113号、2010年11月、pp. 66-69.

## II. 自己評価

2007年から2010年にかけては、①朝鮮三国時代の墳墓研究、②朝鮮半島出土の瓦研究、③朝鮮植民地時代における考古学的調査史、の3つのテーマについて研究を進め、その成果を発表してきた。テーマ①については、科学研究費補助金を得て朝鮮半島各地の墓制の比較研究を進め、その成果を著書1・2としてまとめた。テーマ②については、以前より進めていた文字瓦研究を論文5・6として韓国語で発表した。また論文7は、日本所在高句麗遺物の公開を求める韓国側からの要請に応えたもので、韓国で高い評価を受けた。テーマ③については、植民地朝鮮での考古学的調査における写真の役割に注目した研究が、平成22年度から科学研究費補助金に採択された。この4年間は、ほぼ予定通りに研究を進めることができています。テーマ①についてはこれまでの研究をまとめることができたので、今後はテーマ②・③について、より体系的な研究を進めるよう努力したい。

〔行動文化学専攻〕

## 櫻井 芳雄（心理学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『ブレイン—マシン・インタフェース最前線—脳と機械を結ぶ革新技術—』（共著）、工業調査会（東京）、2007年
2. 『脳の情報表現を見る』、京都大学学術出版会、2008年

#### 【論文】

1. 「ブレイン—マシン・インタフェースの現状と可能性」、『システム/制御/情報』51、2007年、pp. 464-472.
2. “Analysis of multineuron activity using the kernel method.”（共著）*Journal of Robotics and Mechatronics* 19. 2007. pp. 364-368.
3. “Coding of spatial information by soma and dendrite of pyramidal cells in the hippocampal CA1 of behaving rats.”（共著）*European Journal of Neuroscience* 26. 2007. pp. 2033-2045.
4. 「脳の情報表現のダイナミクス」、『ダイナミクスからみた生命的システムの進化と意義』、高等研報告書0802、2008年、pp. 17-23.
5. 「脳の情報表現を見る」、『同志社心理』55、2008年、pp. 151-156.
6. “Functional role of the secondary visual cortex in multisensory facilitation in rats.”（共著）*Neuroscience* 153. 2008. pp. 1402-1417.
7. 「侵襲式BMI（ブレイン—マシン・インタフェース）の現状と課題」、『日本機械学会誌』111、pp. 916-919.

8. “Dynamic synchrony of local cell assembly.” (共著) *Reviews in the Neurosciences* 19. 2008. pp. 425-440.
9. 「脳と機械をむすぶ —ブレイン—マシン・インタフェースの目指すところ」、『科学』79、2009年、pp. 535-537.
10. “A code for spatial alternation during fixation in rat hippocampal CA1 neurons.” (共著) *Journal of Neurophysiology* 102. 2009. pp. 556-567.
11. 「ブレイン—マシン・インタフェースでわかる高齢脳の力」(共著)、脳の世紀推進会議(編)『脳を知る・創る・守る・育む』、クバプロ(東京)、2009年、pp. 115-138.
12. 「ブレイン・マシン・インタフェースと神経回路網の可塑的な再編成」、『脳21』12、2009年、pp. 42-47.
13. “Sub-millisecond firing synchrony of closely neighboring pyramidal neurons in hippocampal CA1 of rats during delayed non-matching to sample task.” (共著) *Frontiers in Neural Circuit*, 3,9. 2009. pp. 1-18.
14. “Information in small neuronal ensemble activity in the hippocampal CA1 during delayed non-matching to sample performance in rats.” (共著) *BMC Neuroscience* 10, 115. 2009. pp. 1-11.
15. “Dynamic changes of firing frequency and synchrony of the rat hippocampal neurons caused by BMI.” (共著) *Proceedings of 3rd International Symposium on Mobiligence*. 2009. pp. 206-210.
16. 「ブレイン—マシン・インタフェースについて教えてください」、*Modern Physician* 30 (創刊30周年記念特大号“高次脳機能障害 Q&A”)、2009年、pp. 214-216.
17. “Prediction of arm trajectory from the neural activity of the primary motor cortex with modular connectionist architecture.” (共著) *Neural Networks* 22, 2009. pp. 1214-1223.
18. 「脳の情報表現を担うセル・アセンブリ：局所的セル・アセンブリの検出」、『生物物理』50、2010年、pp. 084-087.
19. 「ブレイン—マシン・インタフェースからみた脳神経系の可塑性」、『神経心理学』26、2010年、pp. 34-40.
20. 「究極のブレイン—マシン・インタフェースと脳の可塑的変化」、*Brain and Nerve* 62、2010年、pp. 1059-1065.
21. 「ニューラルネットワーク最新情報(3)：脳科学からの概説—神経回路の実態と特性」、『知能と情報』22、2010年、pp. 576-581.

## II. 自己評価

全体にほぼ満足できる業績だと思う。著書については2本著すことができたが、英文も出したかった。しかし、著書はオリジナルな研究成果を発表する場とは限らないので、あまり重要視しないつもりである。最も重視している論文については、日本語論文(国内誌)は十分であったかもしれないが、英文(国際誌)についてはあと数本は出したかった。しかし Impact Factor の高いジャーナルをねらう以上、多数にならなくても仕方ないかもしれない。

## 藤田 和生 (心理学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『感情科学』 (編著)、2007、京都大学学術出版会
2. *Origins of the social mind: Evolutionary and developmental views.* (共編著) 2008. Tokyo, Springer Verlag.

#### 【査読誌論文】

1. “Gaze alternation during “pointing” by squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*)?” (共著) *Animal Cognition* 10 (2). 2007. pp. 267-271.
2. 「イヌ (*Canis familiaris*) 新生児における母親の匂い弁別」、『動物心理学研究』57 (2). 2007年、pp. 89-94.
3. 「感情の進化」、藤田和生 (編著) 『感情科学』、京都大学学術出版会、2007年、pp. 211-234.
4. “Inference based on transitive relation in tree shrews (*Tupaia belangeri*) and rats (*Rattus norvegicus*) on a spatial discrimination task.” (共著) *The Psychological Record* 58. 2008. pp. 215-227.
5. “Pigeons (*Columba livia*) plan future moves on computerized maze tasks.” (共著) *Animal Cognition* 11. 2008. pp. 505-516.
6. “Pigeons perceive the Ebbinghaus–Titchener circles as an assimilation illusion.” (共著) *Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes* 34 (3). 2008. pp. 375-387.
7. “Learning from other’s mistakes in capuchin monkeys (*Cebus apella*).” (共著) *Animal Cognition* 11 (4). 2008. pp. 599-609.
8. “Quality before quantity: Rapid learning of reverse-reward contingency by capuchin monkeys (*Cebus apella*).” (共著) *Journal of Comparative Psychology* 122 (4). 2008. pp. 445-448.
9. “Social intelligence in capuchin monkeys (*Cebus apella*).” S. Itakura & K. Fujita (eds.) *Origins of the social mind: Evolutionary and developmental views.* Springer Verlag. 2008. pp. 3-20.
10. “Further analysis of perception of reversed Müller-Lyer figures for pigeons (*Columba livia*).” (共著) *Perceptual and Motor Skills* 108. 2009. pp. 239-250.
11. “Capuchin monkeys (*Cebus apella*) respond to video images of themselves.” (共著) *Animal Cognition* 12. 2009. pp. 55-62.
12. “Plasticity of ability to form cross-modal representations in infant Japanese macaques.” (共著) *Developmental Science* 12 (3). 2009. pp. 446-452.
13. “Planning in human children (*Homo sapiens*) assessed by maze problems on the touch screen.” (共著) *Journal of Comparative Psychology* 123 (1). 2009. pp. 69-78.
14. “A comparative psychophysical approach to visual perception in primates.” (共著) *Primates* 50. 2009. pp. 121-130.
15. 「フサオマキザルの知性と感情」、『霊長類研究』24、2009年、pp. 241-263.
16. “Metamemory in tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*).” *Animal Cognition* 12 (4). 2009. pp. 575-585.
17. “Colour vs. quantity as cues in reverse-reward-competent squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*).” (共著) *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 62 (4). 2009. pp. 673-680.

18. “Further analysis of perception of the standard Müller-Lyer figures in pigeons (*Columba livia*) and humans (*Homo sapiens*): Effects of length of brackets.” (共著) *Journal of Comparative Psychology* 123 (3). 2009. pp. 287–94.
19. 「フサオマキザルの社会的知性」、『動物心理学研究』59 (1)、2009年、pp. 117-130.
20. “Nine- to 11-month-old infants’ reasoning about causality in anomalous human movements.” (共著) *Japanese Psychological Research* 51 (4). 2009. pp. 246-257.
21. 「メタ記憶の進化」、清水寛之 (編) 『メタ記憶—記憶のモニタリングとコントロール』、北大路書房、2009年、pp. 173-199.
22. 「動物の幸福と人の幸福」、子安増生 (編) 『心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学—』、ナカニシヤ出版、2009年、pp. 146-166.
23. “Perceptual logics in a comparative perspective: the case of amodal completion.” Watanabe, S., Blaisdell, A. P., Huber, L., & Young, A. (eds.), *Rational animals, irrational humans*. Keio University Press. 2009. pp. 201-214.
24. 「欺き・協力・優しさ・ねたみ—フサオマキザルの社会的知性—」、『関西実験動物研究会会報』31、2009年、pp. 39-48.
25. 「内的表象操作の比較認知科学」、『思考の脳内メカニズム』報告書 (研究代表者・波多野 誼余夫)、国際高等研究所、2009年、pp. 43-60.
26. “Do bantams amodally complete partly occluded figures?” (共著) *The Japanese Journal of Psychonomic Science* 28 (1). 2009. pp. 169-170.
27. “Tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*) show understanding of human attentional states when requesting food held by a human.” (共著) *Animal Cognition* 13 (1). 2010. pp. 87-92.
28. “Capuchin monkeys (*Cebus apella*) are sensitive to others’ reward: An experimental analysis of food-choice for conspecifics.” (共著) *Animal Cognition* 13 (2). 2010. pp. 249-261.
29. “Delay of gratification in capuchin monkeys (*Cebus apella*) and squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*).” (共著) *Journal of Comparative Psychology* 124 (2). 2010. pp. 205-210.
30. “Flexibility in the use of requesting gestures in squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*).” (共著) *American Journal of Primatology* 72. 2010. pp. 707-714.
31. “Do bantams (*Gallus gallus domesticus*) experience amodal completion? An analysis of visual search performance.” (共著) *Journal of Comparative Psychology* 124 (3). 2010. pp. 331-335.
32. 「動物はこころが読めるか」、『環境と健康』23 (4)、2010年、pp. 439-448.
33. “Route selection by pigeons (*Columba livia*) in “traveling salesperson” navigation tasks presented on an LCD screen.” (共著) *Journal of Comparative Psychology* 124 (4). 2010. pp. 433-446.
34. 「比較メタ認知研究の動向」、『心理学評論』53 (3)、2010年、pp. 270-294.
35. “How do keas (*Nestor notabilis*) solve artificial fruit problems with multiple locks?” (共著) *Animal Cognition* 14 (1). 2011. pp. 45-58.
36. “Do birds (pigeons and bantams) know how confident they are of their perceptual decisions?” (共著) *Animal Cognition* 14 (1). 2011. pp. 83-93.

## II. 自己評価

鳥類、齧歯類、食肉類、霊長類という多様な動物群のさまざまな認知機能と感情機能を分析し、



査読つき国際誌に著実に成果を公表してきた。外部資金の獲得についても、2008年度より基盤研究(S)が採択され、この間、さらに研究を進展させ、これまでも増して数多くの論文を公刊してきた。大学院生の指導にも力を注ぎ、現時点で4名の博士課程院生は全員学振研究員である。また2007年度以降の課程博士取得者は3名、審査中が3名にのぼる。今後もこれまで以上に研究・教育の両面に力を注ぎ、本邦の比較認知科学をリードする活動を続けていきたい。

## 板倉 昭二 (心理学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『心を発見する心の発達』、2007年、京都大学学術出版会
2. *Origins of the social mind: Evolutionary and developmental views* (共編著)、2008年、Springer

#### 【論文】

1. 「乳児の泣き声への母親の解釈」(共著)、『母性衛生』48(2)、2007年、pp. 337-339.
2. 「脳科学から考える自他理解の発達」(共著)、『発達』112、2007年、pp. 45-54.
3. 「自己の認知、他者の理解」(共著)、『発達』112、2007年、pp. 2-9.
4. “Do Japanese children say ‘yes’ to their mothers? A naturalistic study of response bias in parent-toddler conversations.” (共著) *First Language* 27. 2007. pp. 421-429.
5. “Developmental changes of referential looks in 7-and 9-month-olds: a transition from dyadic to proto-referential looks.” (共著) *Psychologia* 50. 2007. pp. 319-329.
6. “Disinhibition transmits from television to young children.” (共著) *Psychologia* 50. 2007. pp. 308-318.
7. 「自己認知と自己評価の発達とその神経基盤」(共著)、『ベビーサイエンス』7、2008年、pp. 22-39.
8. 「社会的シグナル検出者としての赤ちゃん：その発達の变化」、『日本周産期・新生児医学会雑誌』43(4)、2007年、pp. 847-849.
9. 「メタ認知の系統発生と個体発生」、『心理学評論』50(3)、2007年、pp. 204-215.
10. 「心を理解する心：メンタライジングの発達」、『物性研究』88-4、2007年、pp. 552-563.
11. 「乳幼児における感情の発達」、藤田和生(編著)『感情科学』、京都大学出版会、2007年、pp. 113-141.
12. “Young children's difficulty with inhibitory control in a social context.” (共著) *Japanese Psychological Research* 50. 2008. pp. 87-92.
13. “Children in Asian cultures Say Yes to Yes-No question: Common and Cultural differences between Vietnamese and Japanese Children.” (共著) *International Journal of Behavioral Development* 32. 2008. pp. 131-136.
14. “The Role of the Right Prefrontal Cortex in Self-Evaluation of the Face: A Functional Magnetic Resonance Imaging Study.” *Journal of Cognitive Neuroscience* 20. 2008. pp. 342-355.
15. 「社会的随伴性に対する乳児の反応における月齢変化と性差の検討」(共著)、『心理学研究』79(2)、2008年、pp. 150-158.

16. “One-month-old infants' sensitivity to social contingency from mothers and strangers: a pilot study.” (共著) *Psychological Reports* 102. 2008. pp. 293-298.
17. “Young children's yes bias; How does it relate to verbal ability, inhibitory control and theory of mind?” (共著) *First Language* 28. 2008. pp. 431-442.
18. “Alteration of adults' subjective feeling of familiarity toward infants' sounds.” (共著) *Perceptual and Motor Skills* 107. 2008. pp. 225-230.
19. “Development of mentalizing and communication: From viewpoint of developmental cybernetics and developmental cognitive neuroscience.” *IEICE TRANS. COMMUN* E91-B. 2008. pp. 2109-2117.
20. “How to build an intentional android: Infants' imitation of a robot's goal-directed actions.” (共著) *Infancy* 13. 2008, pp. 519-532.
21. 「他者の心を理解する脳の仕組み」、『教育と医学』9月号、2008年、pp. 4-11.
22. 「メタ認知には人にも固有の現象か—メタ認知の系統発生と個体発生」、『現代のエスプリ』497、2008年、pp. 29-37.
23. “The role of neuroimaging in developmental social psychology.” (共著) *Brain Imaging and Behavior* 2. 2008. pp. 335-342.
24. “Gaze display when thinking depends on culture and context.” (共著) *Journal of Cross-cultural Psychology* 39. 2008. pp. 716-729.
25. 「生物学的側面と文化的側面の統合—トマセロらのアプローチ」、田島信元(編) 『朝倉心理学講座 11 文化心理学』、朝倉書店、2008年、pp. 131-147.
26. 「私という意識の発生」、仲真紀子(編) 『自己心理学 4 認知心理学へのアプローチ』、金子書房、2008年、pp. 65-79.
27. “Planning in human children (Homo sapiens) assessed by maze problems on the touch screen.” (共著) *Journal of Comparative Psychology* 123. 2009. pp. 69-78.
28. “An integrated view of empathy: Psychology, philosophy, and neuroscience.” (共著) *Integrative Psychological & Behavioral Science* 10. 2009. pp. 1007-1012.
29. “Neural correlates of the judgment of lying: a functional magnetic resonance imaging study.” (共著) *Neuroscience Research* 63. 2009. pp. 24-34.
30. “Development of cultural strategies of attention in North American and Japanese children.” (共著) *Journal of Experimental Child Psychology* 102. 2009. pp. 351-359.
31. 「乳児の目標帰属研究とその神経基盤」(共著)、『心理学評論』52(1)、2009年、pp. 63-74
32. 「特集・アンドロイドやエージェントに感じる人の存在『ロボットによる認知発達研究—アンドロイドはヒトなのかモノなのか—』」(共著)、『日本バーチャルリアリティ学会誌』14(1)、2009年、pp. 12-17.
33. 「子どもの社会性の発達」、別冊『発達』30、2009年、pp. 70-81.
34. 「赤ちゃんは何でも知っている—比較認知発達科学から見た赤ちゃんの脳と心—」、『iliholi』1、2009年、pp. 49-58.
35. “Development of infants' request expressions from 11 to 15 months.” (共著) *Psychological Reports* 105. 2009. pp. 865-878.
36. “Individual differences in changes in infants' interest towards social signals in relation to

- developmental index.” *Infant Behavior and Development* 32. 2009. pp. 381-391.
37. 「内省能力と二次的信念の理解との発達の関連：再帰的な思考の役割から」（共著）、『発達心理学研究』20、2009年、pp. 419-427.
  38. “Implications of Social Competence among Thirty-Month-Old Toddlers: A Theory of Mind Perspective.”（共著） *Journal of Epidemiology* 20. 2009. pp. 447-451.
  39. 「ロボットに心は宿るか—他者に心を見出す過程」、開一夫・長谷川寿一（編）『ソーシャル・ブレインズ』、東京大学出版会、2009年、pp. 245-264.
  40. 「進化と行動」、大藪泰(編著)『現代心理学入門』、川島書店、2009年、pp. 35-54.
  41. “Children perseverate to a human's actions but not to robot actions.”（共著） *Developmental Science* 13. 2010, pp. 62-68.
  42. “Atypical verbal communication pattern according to others’attention in children with Williams syndrome.”（共著） *Research in Developmental Disabilities* 31. 2010. pp. 452-457.
  43. “When do children exhibit a yes bias?”（共著） *Child Development* 81. 2010. pp. 568-580.
  44. “Japanese children's difficulty with false belief understanding: Is it real or apparent?”（共著） *Psychologia* 53. 2010. pp. 36-43.
  45. “Do bilingual children exhibit a yes bias to yes-no questions?: Relationship between children’s yes bias and verbal ability.”（共著） *International Journal of Bilingualism* 16. 2010. pp. 1-9.
  46. “The link between perception and action in early infancy: From the viewpoint of the direct matching hypothesis.”（共著） *Japanese Psychological Research* 52. 2010. pp. 121-131.
  47. 「眼球運動からみたヒトおよびロボットの身体運動認知の発達」（共著）、『ロボット学会誌』28（4）、2010年、pp. 95-101.
  48. “Cues that trigger social transmission of disinhibition in young children.”（共著） *Journal of Experimental Child Psychology* 107. 2010. pp. 181-187.
  49. 「子どものためのロボティクス教育・療育支援における新しい方向性の提案」（共著）、『日本ロボット学会誌』28（4）、2010年、pp. 87-95.
  50. “Bilingualism accentuates children’s conversational understanding.”（共著） *PLoS ONE* 5 (2). 2010. pp. e9004.
  51. “Young children's folk knowledge of robots.”（共著） *Asian Culture and History* 2. 2010. pp. 111-116.
  52. “Culture shapes efficiency of facial age judgments.”（共著） *PLoS ONE* 5 (7). 2010. pp. e11679.
  53. “Fluent language with impaired pragmatics in children with Williams syndrome.”（共著） *Journal of Neurolinguistics* 23. 2010. pp. 540-552.
  54. 「社会性の発達」、『赤ちゃん学カフェ』3、2010年、pp. 28-32.
  55. “Language and cognitive shifting: evidence from young monolingual and bilingual children.”（共著） *Psychological Reports* 107. 2010. pp 68-78.

#### 【自己評価】

乳幼児の認知発達、社会性の発達に関連するさまざまなプロジェクトに関与しているが、着実に成果を発表しており、ほぼ目標値に近い達成ができたと思う。各種招待講演もたくさんこなし、成果を伝えることができた。特に、PLoS ONE に2本の論文を掲載できたことには満足している。

反省点としては、予めから懸案であった、Developmental Cybernetics および比較認知発達科学の書籍の執筆が遅れていることがあげられる。今後の展望としては、これらの書籍の完成と、Developmental Cybernetics という研究領域の浸透に尽力する。

## 蘆田 宏 (心理学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. “The relative contributions of colour and luminance signals towards the visuomotor localisation of targets in human peripheral vision.” (共著) *Experimental Brain Research* 183. 2007. pp. 425-434.
2. “Influence of visual motion on object localisation in perception and action.” N. Osaka, I. Rentschler, & I. Biederman (eds.), *Object recognition, attention, and action*. Springer: Tokyo. 2007. pp. 207-218.
3. “Selective visual responses to expansion and rotation in the human MT complex revealed by fMRI adaptation.” (共著) *European Journal of Neuroscience* 27 (10). 2008. pp. 2747-2757.
4. “Interocular transfer of a rotational motion aftereffect as a function of eccentricity.” (共著) *Perception* 37 (8). 2008. pp. 1152-1159.
5. “Functional brain imaging of the Rotating Snakes illusion by fMRI.” (共著) *Journal of Vision* 8 (10):16. 2008. pp. 1-10.
6. 「動き知覚と動画の認識」、映像情報メディア学会編『視覚心理入門—基礎から応用まで—』、オーム社、2008年、pp. 138-151.
7. 「fMRI 順応法による動き情報処理の脳内機構の研究」、『基礎心理学研究』27(1)、2008年、pp. 58-62.
8. “Speed encoding in human visual cortex revealed by fMRI adaptation.” (共著) *Journal of Vision* 9 (13):3. 2009. pp. 1-14.
9. 「fMRI実験の基礎知識」、荻阪直行編『脳イメージング入門 ~心理学からのアプローチ~』、培風館、2010年、pp. 23-43.

### II. 自己評価

国内外で続けてきた共同研究の数々が論文として次々に成果となった時期であった。また、成果をもとに教科書の章担当にも力を入れてきた。成果発表は一段落した感があるが、その後、自身の科学研究費補助金(基盤研究 B)、共同研究による新たなプロジェクトの立ち上げ(基盤研究 A: 立命館大学北岡明佳教授、S: 京都大学荻阪直行教授)の時期にもあたり、研究対象の幅が広がりつつある。また、大学院生の教育にもこれまで以上に力を入れつつあり、それらが徐々に研究成果として結実していくであろう。

## 田窪 行則（言語学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『日本語の構造 推論と談話管理』、2010年、くろしお出版

#### 【論文】

1. 「言語と思考：ことばがあらわすもの」、紀平英作（編）『グローバル化時代の人文学 対話と寛容の知を求めて 下 京都大学文学部創立百周年記念論集 共生への問い』、岩波書店、2007年、pp. 66-92.
2. 「日本語指示詞の意味論と統語論：研究史的概説」、『言語の研究：ユーラシア諸言語からの視座』、大東文化大学、2008年、pp. 311-338.
3. 「日本語のテンスとアスペクト—参照点を表すトコロダを中心に」、『日本文化研究』（東アジア日本学会）第25輯、韓国：ソウル、2008年、pp. 5-20.
4. 「日本語の条件文と反事実解釈」、『日本文化研究』（東アジア日本学会）第27輯、韓国：ソウル、2008年、pp. 21-46.
5. 「韓国語と日本語のモダリティ表現の対照」（金善美と共著）、油谷幸利先生還暦記念論文集刊行編集委員会編『朝鮮半島のことばと社会—油谷幸利先生還暦記念論文集』、明石書店、2009年、pp. 311-338.
6. “Conditional modality: Two types of modal auxiliaries in Japanese.” Pizziconi, B. and M. Kizu (eds.) *Japanese Modality: Exploring its Scope and Interpretation*, London: Palgrave Macmillan. 2009. pp. 150-182.

### II. 自己評価

国際学会での基調講演2件、国際会議でのワークショップの主催2件、査読付き国際学会での発表5件、国内での招待講演1件の他に、外国のワークショップ等での招待講演を16件行った。これにより、研究の成果を広く知らせることができた。また、外部資金として、基盤研究A（代表）、日仏共同研究 SAKURA Project（代表）、基盤研究B（分担）を受け、研究を進展させることができた。

## 吉田 和彦（言語学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【共編著】

1. *East and West: Papers in Indo-European Studies* (ed. with Brent Vine). Hempen Verlag: Bremen. 2009.

#### 【論文】

1. 「歴史言語学の原点にある形態論—比較の対象の認定」、『言語』36巻8号、2007年、pp. 60-67.
2. 「二次的につくられたヒッタイト語中・受動態動詞」、日本オリエント学会『オリエント』51巻1号、2008年、pp. 46-68.

3. “Another archaic linguistic feature in Hittite.” *Studi Micenei ed Egeo-Anatolici* 50. CNR – Istituto de Studi sulle Civiltà dell’Egeo e del Vicino Oriente: Roma. 2008. pp. 851-859.
4. “On the origin of thematic vowels in Indo-European.” *East and West: Papers in Indo-European Studies*. ed. by Kazuhiko Yoshida and Brent Vine. Hempen Verlag: Bremen. 2009. pp. 265-280.
5. “Observations on the prehistory of Hittite *ye/a*-verbs.” *Ex Anatolia Lux: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of H. Craig Melchert on the Occasion of His Sixty-Fifth Birthday*. ed. by Ronald Kim, Norbert Oettinger, Elisabeth Rieken and Michael Weiss. Beech Stave Press: Ann Arbor/New York. 2010. pp. 385-393.
6. “1st singular iterated mediopassive endings in Anatolian.” *Proceedings of the Twenty-first Annual UCLA Indo-European Conference*. ed. by Stephanie W. Jamison, H. Craig Melchert and Brent Vine. Hempen Verlag: Bremen. 2010. pp. 231-243.

## II. 自己評価

共編著 1 は、2007 年 9 月 11-12 日に京都大学で開催した国際印欧語会議での発表諸論文を編集したもので、ドイツの Hempen 社から 2009 年に出版した。この論文集に含まれている論文 4 において、印欧語比較研究における難問のひとつである動詞語幹形成母音の起源について長年温めてきた構想を提出した。それは従来の見方に対して根本的な見直しを求める内容であり、すでに反響を呼んでいる。論文 2、3、5、6 はヒッタイト語およびアナトリア諸語における動詞形態論の諸問題について、また論文 1 は歴史言語学の方法論について論じたものである。ヒッタイト語や他の古代アナトリア諸語は印欧祖語に遡ると考えられる古い特徴を数多く保持している点で、比較研究の進展に向けて限りない魅力を備えた言語である。今後も引き続いて、これらの言語を中心に据えた研究を進めていきたい。

## 吉田 豊 (言語学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「トルファン学研究所所蔵のソグド語仏典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の来源について 百済康義先生のソグド語仏典研究を偲んで」、『仏教学研究』第 62・63 合併号、2007、pp. 46-87.
2. 「ソグド人とトルコ人の接触に関するソグド語資料 2 件」、『西南アジア研究』67、2007、pp. 48-56.
3. “On the taxation system of pre-Islamic Khotan.” *Acta Asiatica* 94, 2007, pp. 95-126.
4. “Notes on the Khotanese secular documents of the 8th-9th centuries.” M. Macuch, M. Maggi, and W. Sundermann (eds.), *Iranian languages and texts from Iran and Turan. Ronald E. Emmerick memorial volume*. Wiesbaden. 2007. pp. 463-472.
5. “Sogdian fragments discovered from the graveyard of Badamu.” 『西域歴史語言研究集刊』第一輯、2007、pp. 45-53.
6. “Discovery of Mani image in Japan.” *Manichaeian studies news letter* 22. 2007. pp. 21-24.

7. “The Brahmajāla-sūtra in Sogdian.” P. Zieme (ed.) *Aspects of research into Central Asian Buddhism (Silk Road Studies XVI)*. Brepols. 2008. pp. 461-474.
8. “Die buddhistischen sogdischen Texte in der Berliner Turfansammlung und die Herkunft des buddhistischen sogdischen Wortes für Bodhisattva.” *Acta Orientalia Hungarica* 61/3. 2008. pp. 325-358.
9. 「大谷探検隊収集『西巖寺蔵橘資料』について」（共著）、『東洋史苑』70・71 合併号、2008、pp. 59-79.
10. 「有関和田出土 8-9 世紀于闐語世俗文書の札記（二）」（榮新江、広中智之訳）、『西域文史』第三輯 2008、pp. 79-108.
11. “Karabalgasun Inscription and the Khotanese documents.” D. Durkin-Mesterernst, Ch. Reck, and D. Weber (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit*. Wiesbaden. 2009. pp. 349-360.
12. “Turco-Sogdian features.” W. Sundermann, A. Hintze and F. de Blois (eds.), *Exegisti monumenta. Festschrift in honour of N. Sims-Williams*. Wiesbaden. 2009. pp. 571-585.
13. “Minor moods in Sogdian.” K. Yoshida and B. Vine (eds.), *East and West: Papers in Indo-European Studies*. Bremen . 2009. pp. 281-293.
14. 「寧波のマニ教画 いわゆる「六道図」の解釈をめぐって」、『大和文華』119、2009、pp. 3-15.
15. “Buddhist literature in Sogdian.” R. E. Emmerick and M. Macuch (eds.), *The literature of Pre-Islamic Iran. Companion volume I to A history of Persian literature*. New York. 2009. pp. 288-329.
16. “Viśā’ Šūra’s corpse discovered?” *Bulletin of the Asia Institute* 19. 2004 [2009]. pp. 237-242.
17. 「有関和田出土 8-9 世紀于闐語世俗文書の札記（一）」（広中智之訳 榮新江校）、『敦煌吐魯番研究』11、2008 [2009]、pp. 147-182.
18. “Sogdian.” G. Windfuhr (ed.), *The Iranian languages*. London and New York. 2009. pp. 279-335.
19. 「新出マニ教絵画の形而上」、『大和文華』121、2010、pp. 3-34.
20. 「新出のソグド語資料について—新米書記の父への手紙から：西巖寺橘資料の紹介を兼ねて—」、『京都大学文学部紀要』49、2010、pp. 1-24.
21. “A newly recognized Manichaean painting: Manichaean Daēnā” from Japan.” M.-A. Amir Moezzi, J.-D. Dubois, C. Jullien, and F. Jullien (eds.), *Pensée grecque et sagesse d’Orient. Hommage à Michel Tardieu*. Turnhout. 2009. pp. 697-714.
22. “On the Sogdian version of the Muryōjūkyō 無量寿経 or Larger Sukhāvāṭīvyūha.” T. Irisawa (ed.), “The way of Buddha” 2003: The 100<sup>th</sup> anniversary of the Otani Mission and the 50<sup>th</sup> of the Research Society for Central Asian Culture. Osaka. 2010. pp. 85-94.
23. 「出土資料が語る宗教文化—イラン語圏の仏教を中心に」、『新アジア仏教史 05 中央アジア文明・文化の交差点』、東京、2010、pp. 165-215.

【書評】

1. Christiane Reck, *Mitteliranische Handschriften. Teil 1. Berliner Turfanfragmente manichäischer Inhalts in soghdischer Schrift (Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland Band XVIII, 1)*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag GmbH. 2006. *Indo-Iranian Journal* 51. 2008. pp. 51-61.
2. 庄垣内正弘著『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』、松香堂、2008、『仏教学セミ

ナー』 No. 90、2009、pp. 45-62.

【翻訳】

1. J. Ebert 「近年マニ教画と認定された大和文華館所蔵の絹絵についての覚え書き」、『大和文華』 119、2009、pp. 35-47.

II. 自己評価

当該の4年間には、論文や書評など点数にして26点を公表したことになる。自分としては異常に多いペースであるが、これは過去に書いた論文がたまたまこの期間に集中して公刊されたことと、翻訳などを含めた結果であって、それをのぞけば通常通りの成果だと考える。前回は海外の学会での発表が少ない点を反省点にしたが、その点は改善し、招待も含めて毎年1回は発表するようにしている。ある偶然から絵画資料と普段読んでいる文献資料の関連に気がつき論文として公刊したところ、新聞に取り上げられることになった。偶然とはいえ普段の研究について一般社会に向けて発信することができたのは幸いだった。一方で専門とする言語に関する研究がおろそかになる側面もあり手放しでは喜べない。発表しているのは単行の論文や書評ばかりで、研究成果の集大成となるような著書の公刊もまた今後の課題である。

伊藤 公雄 (社会学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. *International encyclopedia of men and masculinities* (共編著) 2007. Routledge
2. 『ジェンダーの社会学』、2008年、放送大学教育振興会
3. 『増補新版 「男女共同参画」が問いかけるもの—現代日本のジェンダー・ポリティクス』、2008年、インパクト出版会
4. 『マンガのなかの<他者>』(編著書)、2008年、臨川書店
5. 『社会学ベーシックス』全10巻、別巻1(共編著)、2008年、世界思想社
6. 『新編 日本のフェミニズム』全12巻(共編著)、2008年、岩波書店
7. 『日本・ドイツ・イタリア 超少子高齢社会からの脱却』(共編著)、2009年、明石書店
8. 日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』(共編著)、2010年、丸善

【論文】

1. 「ジェンダーから点検する社会」、駒込武、竹本修三編『「偏見・差別・人権」を問い直す』、京都大学学術出版会、2007年、pp. 97-123.
2. 「メンズリブ運動とその展開」、『現代のエスプリ別冊 セルフ・アイデンティティ—拡散する男性像』(榎本博明編集)、至文堂、2007年、pp. 207-215.
3. 「受け入れ側のプル要因」(共著)、『アジア太平洋地域の人身取引問題と日本の国際貢献—女性のエンパワーメントの視点から』、国立女性教育会館、pp. 217-236.
4. 「<男>の病—男性性と健康」、北九州市男女共同参画センター編『ジェンダー白書 女性と健康』、明石書店、2008年、pp. 140-151.
5. 「京都大学における男女共同参画のあゆみ」、京都大学女性研究者支援センター編『男女共



同参画への挑戦』、明石書店、2008年、pp. 18-28.

6. 「We, Japanese, gotta have Wa?—日本のスポーツ文化と「集団主義」、日本スポーツ社会学会『スポーツ社会学研究』vol. 17-2、2009年、pp. 3-14.
7. 「佐藤忠男『大衆文化の原像』」、伊藤公雄・井上俊編『社会学ベーシックス 第7巻 ポピュラー文化』、世界思想社、2009年、pp. 189-198.
8. 「サイボーグ・フェミニズム」、伊藤公雄・井上俊編『社会学ベーシックス 第5巻 近代家族とジェンダー』、世界思想社、2009年、pp. 219-228.
9. 「男性学・男性性研究の過去・現在・未来」、天野正子・伊藤公雄他共編『新編日本のフェミニズム 第12巻』、岩波書店、2009年、pp. 1-28.
10. 「67年の叫び／77年の夢 クロニクル・イタリア新左翼運動 1967~77」、『別冊 情況68年のスピノザ』、情況出版社、2009年、pp. 306-319.
11. “Possibility of Visual Sociology.” *Proceedings of the 13<sup>th</sup> Kyoto University International Symposium New Horizon of Academic Visual-Media Practice. Kyoto University.* 2010. pp. 95-98.
12. “Emerging Culture Wars- Backrush against ‘Gender Free’.” *Journal of Intimate and Public Spheres Pilot Issue.* Kyoto University Press. 2010. pp. 131-137.
13. “The Formation and Growth of the Men’s Movement.” in F. Fujita-Fanselow (ed.) *Transforming Japan.* The Feminist Press at the City University of New York. 2011. pp. 108-115.

## II. 自己評価

『社会学ベーシックス』（世界思想社、全10巻別巻1）、『新編日本のフェミニズム』（岩波書店、全12巻）の共編や、日本社会学会社会学事典編集委員会の編集委員長として『社会学事典』（丸善）を編集、さらに *International encyclopedia of men and masculinities (Routledge)* の編集に加わるなど、社会学分野およびジェンダー研究分野で大きな貢献をした。また、内閣府男女共同参画会議専門調査会のメンバーとして男女共同参画第三次計画の起草委員をつとめ、政府のジェンダー政策策定にも重要な役割を担った。

## 松田 素二 (社会学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書・編著書】

1. 『日常人類学宣言』、世界思想社、2009年

#### 【論文】

1. 「複数化する間身体—現代ケニアのムンギギ・セクトを事例として」、菅原和孝編『身体資源の人類学』（弘文堂）、2007年、pp. 231-259.
2. 「21世紀世界におけるアフリカの位置—アフリカに学ぶ、社会を癒す知恵」、松原正毅編『2010年代 世界の不安、日本の課題』、総合研究開発機構、2007年、pp. 477-494.
3. 「グローバル化時代における共同体の再想像に向けて」、『哲学研究』585、2008年、pp. 1-35.
4. 「周辺からの声」、内堀基光、スチュアート・ヘンリ編『文化人類学』、放送大学教育振興会、2008年、pp. 172-188.

5. 「アフリカから何が見えるのか」、『興亡の世界史』第20巻、講談社、2009年、pp. 229-292.
6. 「平和のフェティシズム考：文化的フェティシズム批判を超えて」、田中雅一編『フェティシズム論の系譜と展望』、京都大学学術出版会、2009年、pp. 241-269.
7. 「暴力の舞台としてのストリート—2007-8年ケニア・ポスト選挙暴動を事例として—」、関根康正編『ストリートの人類学』、国立民族学博物館、2009年、pp. 385-406.
8. 「反人種主義という困難—『人種と歴史』を読み直す』、『KAWADE 道の手帖 レヴィ=ストロース 入門のために 神話の彼方へ』、河出書房、2010年、pp. 135-139.
9. 「構造的弱者と共同性—京都市在住朝鮮人のライフヒストリー調査から考える—」、『グローバル化現象のなかの共同体/共同性の生成：グローバル化を飼い慣らす』（グローバル研究叢書1）、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、2010年、pp. 3-21.

## II. 自己評価

この三年間の研究領域は、三つの領域に大別できる。それは、第一には植民地化のエスノヒストリーや紛争と和解の問題解明に力点を置いたアフリカ地域研究であり、第二には、社会文化理論の領域における主体とセルフに関する研究である。さらに第三はフィールドワークの方法論をめぐる研究である。この期間研究の特徴は、徹底した日常性への依拠であり、これまで取るに足らぬ世界とされてきた普通の生活者の生活世界のなかに、圧倒的に強力な権力へのレジスタンスや、社会保障、世界観形成、経済再生などにまつわる可能性が秘められていることを明らかにし、日常性のダイナミズム研究という領域を異文化研究のなかに確立した。また長期のフィールドワークに裏付けられた研究から、独自のフィールドワーク論が生み出された。他者を表象する権力批判の嵐のなかで、方法的反省を迫られた1980年代以降、人類学はフィールドワークの困難の時代を迎えてきたが、この研究では「歴然として存在する構造的差異を認め、両者の関係性の切断のうえに、「生活のふれあいを通じて現実を学び取る」という理解の可能性」を追求する共感のフィールドワークと呼ばれる方法で、閉塞状況に、ある種の突破口を開こうと試み一定の成果をあげた。

## 落合 恵美子（社会学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書・編著書】

1. 『分岐する現代中国家族』（共編著）、2008年、明石書店
2. *Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*（共編著）Folkestone: Global Oriental.
3. 『歴史人口学と比較家族史』（共編）、2009年、早稲田大学出版会
4. *The Stem Family in Eurasian Perspective: Revisiting House Societies, 17th-20th Centurie*（共編著）2009. Bern: Peter Lang.

#### 【論文】

1. 「グローバル化する家族—台湾の外国人家事労働者と外国人妻」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学』、京都大学出版会、2007年、pp. 93-126.

2. 国際移動の女性化—国際結婚を中心に」（共著）、石川義孝編『人口減少と地域』、京都大学出版会、2007年、pp. 291-319.
3. 「現代中国都市家族の社会的ネットワーク—無錫市の事例から」、首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族』、明石書店、2008年、pp. 64-110.
4. 「近代家族は終焉したか—調査結果が見せたものと隠したもの」、NHK放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』、新曜社、pp. 39-58.
5. 「アジアにおけるケアネットワークと福祉ミックス—家族社会学と福祉社会学との結合」、『家族研究年報』33号、2008年、pp. 3-20.
6. 「京都大学男女共同参画推進に関する意識・実態調査から」、京都大学女性研究者支援センター編『京都大学 男女共同参画への挑戦』、明石書店、2008年 pp. 304-360.
7. “Researching Gender and Childcare in Contemporary Asia.” Emiko Ochiai and Barbara Molony (eds.) *Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*. London: Global Oriental. 2008. pp. 1-30.
8. “The Birth of the Housewife in Contemporary Asia: Globalization and the Modern Family.” Emiko Ochiai and Barbara Molony (eds.) *Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*. London: Global Oriental. 2008. pp. 157-180.
9. “Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies.” Emiko Ochiai and Barbara Molony (eds.) *Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*. London: Global Oriental. 2008. pp. 31-70.
10. “Introduction.” Antoinette Fauve-Chamoux and Emiko Ochiai (eds.). *House and the Stem Family in EurAsian Perspective*. Bern: Peter Lang. 2009. pp. 1-50.
11. “Two types of Stem Household System in Japan: the *Ie* in Global Perspective.” Antoinette Fauve-Chamoux and Emiko Ochiai (eds.) *The Stem Family in EurAsian Perspective*. Bern: Peter Lang. 2009. pp. 287-326.
12. 「序論—歴史人口学と比較家族史—」、落合恵美子・小島宏・八木透編『歴史人口学と比較家族史』、早稲田大学出版会、2009年、pp. 1-130.
13. “Care Diamonds and Welfare Regimes in East and South-East Asian Societies: Bridging Family and Welfare Sociology.” *International Journal of Japanese Sociology* 18. 2009. pp. 60-78.
14. “Feminization of immigration in Japan: marital and job opportunities.”（共著）Yang Wen-Shan and Melody Lu (eds.). *Asian Cross-border Marriage Migration*. Amsterdam: Amsterdam University. 2010. pp. 49-86.
15. “Reconstruction of Intimate and Public Spheres in Asian Modernity: Familialism and Beyond.” *Journal of Intimate and Public Spheres* No.0 (Pilot Issue). 2010. pp. 2 -22.
16. 「日本におけるケア・ダイヤモンドの再編成—介護保険は「家族主義」を変えたか」（共著）、『海外社会保障研究』170号、2010年、4-19.

## II. 自己評価

長いこと続けてきた2つの共同研究プロジェクトである「現代アジア家族比較研究」と「歴史人口学的家族史研究」の成果が、それぞれ *Asia's New Mothers* と *The Stem Family in Eurasian Perspective* という、いずれも英語の編著書として海外の出版社から出版できたことが、この3年

間の最大の成果であった。前者はハーバード大学のメアリー・ブリントン教授の書評で“*This book was a pleasant surprise to me. ...What I found...was a deeply theoretical yet empirically grounded examination*”(International Journal of Japanese Sociology、2009) と評価していただいた。後者は2010年にシカゴで開催された社会科学史学会において書評セッションを設けていただいた。「歴史人口学的家族史研究」の成果としては、日本語の編著書『歴史人口学と比較家族史』も出版することができた。学問内容としては、*Asia's New Mother* にまとめたような家族社会学的なアジア諸社会のケアをめぐる社会的ネットワークの研究を、福祉社会学的なマクロな視点と結合するという視点の転換があったことが大きい（『家族研究年報』論文および IJJS 論文）。国連社会開発研究所のプロジェクトにて *care diamond* という枠組みを用いたことがきっかけとなり、ケアレジーム論としての統合が可能になったのである。

## 田中 紀行 (社会学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「『ヴェーバー・パラダイム』をめぐる諸問題」、『哲学研究』583、2007年、pp. 25-43.
2. 「行為の理解—ヴェーバー『社会学の基礎概念』」、井上俊・伊藤公雄編『自己・他者・関係』（社会学ベーシックス1）、世界思想社、2008年、pp. 3-12.
3. 「序論」、『GCOE 国際共同研究4 公共圏と「多元的近代」の社会学理論』（研究代表者：田中紀行）、京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」、2010年、pp. 1-16.
4. 「池田太臣著『ホップズから「支配の社会学」へ—ホップズ、ウェーバー、パーソンズにおける秩序の理論—』（書評）、『ソシオロジ』第54巻3号、2010年、pp. 139-43.

#### 【自己評価】

この数年間、マックス・ヴェーバーの体系的社会学を独自の社会学的パースペクティブとして継承・現代化する可能性を探ることを主要な研究課題としてきた。他方2008年度の後半からはグローバルCOEプログラムの経費により共同研究「公共圏と『多元的近代』の社会学理論」を組織している。しかし、いずれについてもまだ満足できるような成果をあげるには至っていない。グローバルCOE全体の研究テーマと本来の自分の研究関心とをうまく接合することは必ずしも容易でないが、GCOEの期間終了までには成果をまとめたいと考えている。これまで細々とした周辺の仕事にかまけて本来の研究課題に十分な時間を割けなかったきらいがあったので、今後はそうした点でも改善が必要と考えている。

## 太郎丸 博 (社会学専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『人文・社会科学のカテゴリカル・データ解析入門』、2005年、ナカニシヤ出版
2. 『フリーターとニートの社会学』（編著書）、2006年、世界思想社
3. 『若年非正規雇用の社会学』、2009年、大阪大学出版会

#### 【論文】

1. 「社会階層とインターネット利用—デジタル・デバイド論批判—」、『ソシオロジ』48(3)、2004年、pp. 53-66.
2. 「なぜ進学率が上がっても平等化しないのか」、日本数理社会学会監修・土場学・小林盾・佐藤嘉倫・数土直紀・三隅一人・渡辺勉編『社会を〈モデル〉で見る—数理社会学への招待—』、勁草書房、2004年、pp. 166-169.
3. 「土地所有権生成のメカニズム：合理的選択理論とマルクス主義の対話を目指して」、三隅一人編『社会学の古典理論：数理で蘇る巨匠たち』、勁草書房、2004年、pp. 17-37.
4. 「権利の交換：コールマンの合理的選択理論による近代初期民主制発達の検討」、三隅一人・高坂健次編『数理社会学シリーズ5 シンボリック・デバイス：意味世界へのフォーマル・アプローチ』、勁草書房、2005年、pp. 123-139.
5. 「合理的選択理論：行為と合理性」、盛山和夫・土場学・野宮大志郎・織田輝哉編『〈社会〉への知・現代社会学の理論と方法（上）：理論知の現在』、勁草書房、2005年、pp. 121-138.
6. 「Laudanの研究伝統論による社会学理論発展法の考察」、『社会学評論』57(1)、2006年、pp. 41-57.
7. 「大学進学率の階級間格差に関する合理的選択理論の検討—相対的リスク回避仮説の1995年SSM調査データによる分析—」、『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』33、2007年、pp. 201-212.
8. 「若年非正規雇用・無業とジェンダー—性別分業意識が女性をフリーターにするのか?—」、『ソシオロジ』52(1)、2007年、pp. 37-51.
9. 「若者の求職期間と意識の関係—「やりたいこと」は内定率に影響するか—」（共著）、『理論と方法』22(2)、2007年、pp. 155-168.
10. 「社会階層論と若年非正規雇用」、直井優・藤田英典編『講座社会学13階層』、東京大学出版会、2008年、pp. 201-220.
11. 「仕事の複雑性スコアの構成：?職務内容を反映した職業指標の提案」（共著）、『理論と方法』24(1)、2009年、pp. 77-93.
12. 「数理社会学・リベラル・公共社会学：?プロ社会学者は社会のために何が言えるのか?」、『フォーラム現代社会学』9、2010年、pp. 52-59.

### II. 自己評価

社会学者としては、生産性は高い方ではないだろうか。しかし、英語での出版がないので、今後は英語での出版に力を入れていきたい。また、教育と研究の融合を重要な課題としてきたが、学生との共著論文の出版にいたったケースはまだそれほど多くなく、今後、学生を育てる

ことが論文の出版につながるような教育・研究のスタイルを模索していきたい。

## 小林 致広 (地理学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『「老アントニオのお話」を読む』、2004年、神戸市外国語大学 研究叢書 37
2. マルコス副司令『ラカンドン密林のドン・ドゥリート』（訳書）、2004年、現代企画室
3. マルコス副司令『老アントニオのお話』、2005年、現代企画室
4. 『中南米における民族的アイデンティティの揺らぎ』（編著書）、2005年、神戸市外国語大学『外国学研究』60
5. 『メソアメリカ先住民の多義的アイデンティティ』（編著書）、2007年、神戸市外国語大学『外国学研究』68
6. 『メソアメリカにおける先住民イメージの創出』（編著書）、2009年、神戸市外国語大学『外国学研究』72
7. 『メキシコ・ラカンドン密林地帯における先住民族の自治・自立の試み—持続的開発と多様なサパティスモー』、2010年、神戸市外国語大学『研究叢書』46

#### 【論文】

1. 「サパティスタ運動の十年が提起したもの」、『グローバル化に抵抗するラテンアメリカの先住民族』（藤岡・中野編）、現代企画室、2005年、pp. 9-19.
2. 「サパティスタの先住民自治実践—10年間の実践と自治行政地区再編（その1）」、『神戸外大論叢』55-5、2004年、pp. 61-79.
3. 「サパティスタの先住民自治実践—10年間の実践と自治行政地区再編（その2）」、『神戸外大論叢』56-6、2005年、pp. 27-46.
4. 「プクフからコルタカベサスへ—チアパスにおける他者イメージと暴力」、『神戸市外国語大学外国学研究』60、2005年、pp. 133-172.
5. 「先住民による自治行政地区の創設運動(その2)」、『神戸外大論叢』57-1~5 合併号、2006年、pp. 404-424.
6. 「先住民による自治行政地区の創設運動(その3)」、『神戸外大論叢』57-6、2006年、pp. 27-46.
7. 「像崇拜摘発の狂騒と先住民社会—1530年代末、メキシコ中央部の先住民異端審問の分析」、『神戸市外国語大学外国学研究』68、2007年、pp. 1-37.
8. 「「抵抗から権力へ」にむけての新たな転回—グアテマラにおける第3回アビヤ・ヤラ先住民大陸サミットの意義」、明治学院大学平和研究所『PRIME』27、2007年、pp. 69-80.
9. 「トホラバル居住域における自治と土地防衛闘争（その1）」、『神戸外大論叢』58-2、2007年、pp. 43-60.
10. 「トホラバル居住域における自治と土地防衛闘争（その2）」、『神戸外大論叢』58-4、2007年、pp. 1-20.
11. 「トホラバル居住域における自治と土地防衛闘争（その3）」、『神戸外大論叢』59-3、2008年、pp. 19-38.

12. 「国連宣言採択とアメリカ大陸の先住民運動の転回」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』7、2008年、pp. 1-19.
13. 「ラカンドン密林をめぐる言説の罫—自然保護と開発」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』8、2008年、pp. 39-58.
14. 「「先住民文化遺産」の観光商品化—クンブレ・タヒンの事例から」、『神戸市外国語大学外国学研究』72、2009年、pp. 117-149.

## II. 自己評価

2004年以降の研究は大きく分けて三つの分野からなる。一つは、1990年代半ばからのメキシコ先住民民族運動、とりわけサパティスモを題材とする一連の研究である。ラカンドン密林地域の自然保護、環境利用、土地防衛、先住民自治地区については、神戸市外国語大学研究叢書46(2010年)に中間成果をまとめた。二つめは、前勤務校の神戸市外国語大学の共同研究班「中南米におけるエスニシティ研究班」における先住民民族のアイデンティティとイメージ編成の研究である。他者イメージと暴力、伝統文化としての文化遺産利用などに取り組んできたが、2010年開始の科研における先住民民族運動の比較研究もこの分野に含めることができる。三つめの分野は、絵文書資料の分析を通じたエスノヒストリー研究で、スペイン人到来前のメシーカの領域編成について包括的な研究成果を準備すべく取り組んでいる。

## 石川 義孝 (地理学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書・編著】

1. 『人口減少と地域—地理学的アプローチ』(編著)、2007年、京都大学学術出版会
- #### 【論文・書評】
1. 「現代日本における性比不均衡と国際結婚」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて—下 共生への問い』、京都大学学術出版会、2007年、pp. 127-145.
  2. “Destination choice of the 1995-2000 immigrants to Japan: salient features and multivariate explanation.” (共著) *Environment and Planning A* 40(4)、2008、pp. 806-830.
  3. “Progress in Japanese population geography: retrospect and prospect.” *Geographical Review of Japan* 81(5)、2008、pp. 247-261.
  4. 「小林浩二編『激動するスロヴァキアと日本—家族・暮らし・人口—』」(書評)、『地理学評論』81(7)、2008年、pp. 612-614.
  5. “Changing geographies of human mobility on urban and national scales.” *Geographical Review of Japan Series B* 81(1)、2009、pp. 1-3.
  6. “The 1995-2000 interprefectural migration of foreign residents of Japan: salient features and multivariate explanation.” (共著) *Population, Space and Place* 15(5)、2009、pp. 401-428.
  7. 「松谷明彦編『人口流動の地方再生学』」(書評)、『人口学研究』45、2009年、pp. 74-77.

## II. 自己評価

ここ数年の研究テーマである人口地理学やエスニック地理学に関する業績は、「*Geographical Review of Japan Series B*」、「*Environment and Planning A*」、「*Population, Space and Place*」といった内外を代表する著名な雑誌に査読付き論文として掲載されており、研究の成果の発表は順調と考えている。また、2007年に編著として刊行した『人口減少と地域—地理学的アプローチ—』は、わが国における人口減少問題を本格的に扱った地理学的な成果と自負している。さらに、2013年8月に京都国際会館で開催が予定されている京都国際地理学会議の組織委員会委員長をおおせつかっており、重責を感じている。

## 杉浦 和子 (地理学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【著書・編著】

1. 京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史』／『地理学 京都の百年』（補遺）、2008年、ナカニシヤ出版

#### 【論文】

1. 「人口漸減都市における移動行動の男女差—福井市の住民異動届データを用いて—」、石川義孝編著『人口減少と地域—人口地理学からのアプローチ—』、京都大学学術出版会、2007年、pp. 149-169.
2. 「高齢社会と防災—都道府県の防災担当部局へのアンケート調査結果—」、『日本海地域の自然と環境』第14号、2007年、pp. 59-68.
3. 「神社に対する寄付圏域の広がりとその特徴」、『米子市（2007年 実習旅行報告書）』京都大学文学部地理学教室頁、2007年、pp. 55-58.
4. 「エレン・チャーチル・センブルの生きた時代と彼女の地理学研究—恩師ラツェル宛書簡と同窓生通信を手がかりに—」、『京都大学文学部研究紀要』47号頁、2008年、pp. 297-400
5. 「三島駅を中心とする住宅市場の空間パターン」、京都大学地理学教室編『三島市（2008年 実習旅行報告）』、2008年、pp. 63-69.
6. 「水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著『モダン都市の系譜—地図から読み解く社会と空間—』（ナカニシヤ出版）」（書評）、『史林』92巻、2008年、pp. 456-458.
7. 「福井市における地域間人口移動と都市内人口移動に関する距離分析」、『日本海地域の自然と環境』16巻、2009年、pp. 43-59.
8. 「豆腐の流通圏から見えてくるもの—下関の豆腐はどこから?」、『下関市（2009年 実習旅行報告書）』、2009年、pp. 119-125.
9. 「経済的視点からの復興」、『1948 福井地震』、内閣府頁、2010、pp. 78-91.
10. 「『山西鎮辺垣布陣図』（仮称）に関する地理学、文献学、絵画論的調査—予備的考察』（共著）、『京都大学文学部研究紀要』49号、2010、pp. 1-53.

### II. 自己評価

空間分析、地理学史、古地図研究という3つのテーマを中心に調査・分析・研究を行った。



空間分析の研究では、都市および都市圏構造や関係圏の分析だけでなく、空間と人間行動の相互関係の解明に新生面を開拓した点で注目を集めた。地理学史ではアメリカの先駆的女性地理学者を取り上げ、新たに発掘した手書き資料を用いた詳細な文献調査から、19世紀末から20世紀初頭にかけての地理学および地理学を取り巻く状況を明らかにした点で地理学史の開拓という意義を有する。古地図分析は、新発見の山西地域の長城周辺の布陣図（軍事地図）に関する調査であるが、空間分析と中国語学、中国絵画論という類例のないコラボレーションのおもしろさで高い評価を得ている。他に、防災や地域調査の成果も着実に刊行した。海外への発信の面で、国際誌への論文投稿が十分でなかった点が反省される。今後は、引き続き、空間分析（単独研究）と古地図研究（共同研究）をさらに発展させる予定であり、著書や図録（展示を含む）にまとめて刊行することを目標としたい。

## 米家 泰作（地理学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. *Proceedings of the 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto 2009*（共編著）  
2010. Kyoto University Press.

#### 【論文】

1. 「植民地朝鮮における焼畑の調査の表象」、『季刊東北学』11、2007年、pp. 72-86.
2. 「紀伊山地の焼畑—その歴史地理的素描—」、『東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究 I—東アジアの民俗文化にかかわる調査・研究とデータベース化—』、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2007年、pp. 215-228.
3. “The early modern rural landscape.” A. Kinda (ed.) *A Landscape History of Japan*. Kyoto University Press. 2010. pp.137-161.
4. “Modernization of the countryside.” A. Kinda (ed.) *A Landscape History of Japan*. Kyoto University Press. 2010. pp.163-185.
5. “Landscapes in literature and painting.” A. Kinda (ed.) *A Landscape History of Japan*. Kyoto University Press. 2010. pp. 223-242.
6. “Colonial tourisms in Korean heritage spaces, 1910-1945.” A. Kinda et al. (eds) *Proceedings of the 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto 2009*. Kyoto University Press. 2010. pp. 286-287.

### II. 自己評価

2007年から2010年の研究活動は、自己評価としては十分満足できるものではなかった。2007年には、東北芸術工科大学東北文化研究センターの共同研究に関わり、日本と朝鮮の焼畑史に関する論考を公表することができたが、その後2年にわたり研究成果を提示できなかった。その理由としては、2009年に本研究科を会場として開催した国際歴史地理学会の事務局を担当し、開催後もそのプロシーディングズ刊行のための作業に追われたことが大きい。ただし、この国際学会を契機として、日本の農村景観史の概説を英文で示す機会を得たこと（*A Landscape*

*History of Japan* に分担執筆)、近年とり組んでいる植民地朝鮮の史蹟景観の研究についても発表の機会を得たことは、海外の歴史地理学との交流を深め、その展開のなかで自身の研究を位置づける良い経験となった。来年度以降も、日本と植民地朝鮮を事例として、近代の歴史地理と帝国主義の関係性について、研究を深めていきたいと考えている。

〔現代文化学専攻〕

## 伊藤 和行 (科学哲学科学史専修教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「オイラーと 17 世紀力学—落下法則から運動方程式へ—」、『科学史研究』第 46 巻、2007、pp. 178-180.
2. 「ガリレオ」、『哲学の歴史 4 : 15-16 世紀』(伊藤博明編)、中央公論新社、2007、pp. 603-628.
3. 「ポンポナッツィ」、『哲学の歴史 4 : 15-16 世紀』(伊藤博明編)、中央公論新社、2007、pp. 257-274.
4. 「フォン・ノイマンとマカロックーピッツ・モデル」、『科学哲学科学史研究』第 2 号、2008、pp. 117-132.
5. 「科学史入門：ガリレオの落下法則」、『科学史研究』第 47 巻、2008、pp. 32-35.
6. 「ガリレオの望遠鏡と天体観測」、『イタリア図書』41 号、2009、pp. 2-8.
7. 「ヨハン・ベルヌーイ『水力学』における運動方程式」、『科学哲学科学史研究』第 4 号、2010、pp. 115-126.

### II. 自己評価

現在の研究の中心は近代初期西欧における力学の発展に関する歴史的研究であり、とくに 18 世紀前半における流体力学の誕生を検討してきたが、流体力学に対象を限定した研究ではこの時期における力学全体の解析化および体系化の問題を検討するには不十分であることが明らかになったので、今後はさらに剛体や惑星の運動等へ研究対象を広めていかねばならないと考えている。またガリレオの力学に関する研究においては、落下法則を中心とした彼の力学を 18 世紀の力学の発展と関係において捉えることを進めている。さらにガリレオの望遠鏡による天体観測に関する研究を通じて、彼の科学者としての全体像を明らかにすることを目指している。

## 伊勢田 哲治 (科学哲学科学史専修准教授)

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『動物からの倫理学入門』、2008年11月、名大出版会
2. 奈良由美子、伊勢田哲治編 『生活知と科学知』(共編著)、2009年3月、放送大学教育振興

会

【論文】

1. 「工学的知識の独自性はどこにあるのか—ヴィンセンティの検討を通して—」、『科学基礎論研究』vol.35/no.2、2008年3月、pp. 19-30.
2. 「21世紀の生物学の哲学—文化的進化への関心の高まり—」、『イギリス哲学研究』31号、2008年3月、pp. 95-102.
3. “Unsettled-Domain Utilitarianism: A Revision of Hare's Two-Level Theory for Application.” 『哲学』59号、2008年4月、pp. 25-38.
4. 「技術者倫理における「自律」と「自立」」、『技術倫理と社会』第3号、2008年4月、pp. 4-7.
5. “How Should We Foster the Professional Integrity of Engineers in Japan? A Pride-Based Approach.” *Science and Engineering Ethics* vol. 14、June 2008、pp. 165-176. (online version published in November 2007)
6. 「歴史科学における因果性と法則性」、飯田隆ほか編『岩波講座哲学11 歴史/物語の哲学』、岩波書店、2009年1月、pp. 95-119.
7. 「明治期日本の動物愛護運動を生んだ「外圧」—英字新聞の言説分析から—」、『歴史文献研究をベースとした日本的動物倫理学の構築研究』平成19年度-20年度科学研究費補助金（基盤研究C）報告書（研究代表者伊勢田哲治）、2009年3月、pp. 4-12.
8. 「明治期日本の動物愛護論争」、『歴史文献研究をベースとした日本的動物倫理学の構築研究』平成19年度-20年度科学研究費補助金（基盤研究C）報告書（研究代表者伊勢田哲治）、2009年3月、pp. 27-40.
9. 「動物解放は新しい道徳直観になるか」、『歴史文献研究をベースとした日本的動物倫理学の構築研究』平成19年度-20年度科学研究費補助金（基盤研究C）報告書（研究代表者伊勢田哲治）、2009年3月、pp. 55-65.
10. 「分析哲学者としての鶴見俊輔」、『思想』1021号、2009年5月号、pp. 67-84.
11. 「科学コミュニケーションとしてのクリティカルシンキング教育」、『素粒子論研究』117巻4号、2009年10月、pp. D86-D93.

【その他】

1. 伊勢田哲治vs. 戸田山和久「[往復メールによる科学哲学] 実在論論争—科学に何ができるのか—(5) 天文学者は実在論者になれるか」(メール対談)、『別冊「本」RATIO(ラチオ)』第5号、2008年6月、pp. 354-377.
2. 伊勢田哲治vs. 戸田山和久「[往復メールによる科学哲学] 実在論論争—科学に何ができるのか—最終回・科学にとって「存在」とは何か」(メール対談)、『別冊「本」RATIO(ラチオ)』第6号、2009年1月、pp. 292-335.
3. 「講演「技術者のための動物倫理・倫理学入門」」、『技術倫理と社会』第4号、2009年4月、pp. 112-121.
4. 「ハーディング『科学と社会的不平等 フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判』現在の科学とその哲学は「未発達」であるのか」(書評)、『図書新聞』2009年8月8日号、p. 5.
5. 「小林傳司『トランス・サイエンスの時代 科学技術と社会をつなぐ』」(書評)、『科学哲学』42-2、2009年12月、pp. 88-91.

6. 「ロイ・バスカー『科学と実在論』 奇妙な遍歴をたどってきた「ちょっと気になる」本」(書評)、『図書新聞』2010年3月20日号、p. 5.

## II. 自己評価

この三年間の主な仕事としては、動物倫理に焦点をしばった倫理学理論の研究、放送大学の教材作成とそれをベースにした生活知と科学知の関わりについての考察、クリティカルシンキングの教育に関する研究などを行ってきた。最後のものについてはまだ出版物という形での成果にはなっていないが、現在出版を計画中である。その他、科学哲学と倫理学の両方にまたがるさまざまな問題について考察を行ってきており、生産性の高い三年間であったと自己評価できる。この間の研究はどちらかといえば倫理学にかたよっていたので、今後は現在の所属先である科学哲学・科学史の諸問題の研究に重点を移していきたい。

## 林 晋 (情報・史科学専修教授)

### I. 研究業績

#### 【論文】

1. 「ヒルベルトの数学手帳」、『数学セミナー』、2007年5月号、pp. 42-49.
2. “SMART-GS Project: a tool searching, marking up and linking historical documents.”、科研費特定領域研究『日本の技術革新—経験蓄積と知識基盤化—』第3回国際シンポジウム報告、2007年12月、pp. 51-66.
3. 「真のヒルベルト像をもとめて—ヒルベルト研究の現状」、津田塾大学『数学・計算機科学研究所報』29、2008、pp. 28-47.
4. 「文献研究と情報技術：史学・古典学の現場から」、『人工知能学会誌』25(1)、2010年1月、pp. 24-31.
5. “Games with 1-backtracking.” (共著) *Annals of Pure Applied Logic* 161(10)、2010、pp. 1254-1269.
6. 「渕一博—その人とコンピュータサイエンス」、田中穂積他著『近代科学社』、2010年3月、pp. 3-33.
7. 「「数理哲学」としての種の論理—田辺哲学テキスト生成研究の試み(一)—」、京都大学文学部日本哲学史研究室紀要『日本哲学史研究』第7号、2010年9月、pp. 40-75.

### II. 自己評価

様々な研究をしているので、主なもののみを述べる：京都学派田辺元の思想を遺稿に基づく文献学的手法を用いて行った。その結果、従来、数理哲学との関連が薄いと理解されていた、彼の主思想、社会哲学「種の論理」が、その発展の初期に数理哲学に強い影響を受けていたことを蔵書書きこみにより実証し、さらには、種の論理の発生過程を特殊講義用のメモの分析により明らかにできることを発見した。前者は、すでに公表し、後者は研究を継続中である。また、この研究を通して、新カント派の独思想史における重要性に気付き、それにより、以前から継続している数学・情報近代史の社会学的再編の研究に大きな進展があった。また、田辺研究には自ら開発した歴史研究用 IT ツールを利用しているが、このツールの改造研究も進めた。このツールは、

永井和教授の倉富日記研究にも利用されるなどして、注目を集め、新聞・書籍等でも報道された。今度も、以上の研究を継続する予定である。

## 杉本 淑彦（二十世紀学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『新詳 世界史B』（高等学校地理歴史科教科書、共著）、2008年1月、帝国書院
2. ジェフリー・エリス『ナポレオン帝国』（共訳）、2008年12月、岩波書店

#### 【論文】

1. 「モニュメント研究の新地平」、『史林』91巻1号、2008年1月、pp. 256-263.
2. 「ナポレオン体制期におけるエジプト遠征の記憶」、2006-2008年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書『英雄の条件～近現代ヨーロッパにおける軍事英雄観の展開』（研究代表者 杉本淑彦）、2009年3月、pp. 101-125.
3. 「『あさきゆめみし』にみる現代日本」、京都大学大学院文学研究科編『世界の中の「源氏物語」—その普遍性と現代性』、臨川書房、2010年2月、pp. 61-75.
4. 「2009年の歴史学界 回顧と展望 ヨーロッパ・現代・一般」、『史学雑誌』第119編第5号、2010年5月、pp. 352~355.

### II. 自己評価

フランス国民のアラブ=イスラーム観の変遷を、歴史書や旅行記などの文献資料だけでなく、モニュメントや映画、絵画などにも着目しながら検証した。これは、「戦争の記憶」という、より大きなテーマともつながっている。並行して、マンガを素材に現代文化研究にも新たに着手した。こうした研究を、3件の科学研究費を得るなどして進めてきた。

エドワード・サイードに代表される従来の「オリエンタリズム批評」とは異なるオリエンタリズム論を展開している点が、歴史学研究に貢献するところ大だと考えている。また、これまで日本の学界では手薄だったナポレオン体制期の研究についても、英語の専門的概説書を翻訳することで、その拡大と深化に貢献した。さらに、研究によって得られた知見を社会に還元するために、高等学校教科書の執筆にも取り組んだ。高等学校教科書の執筆に続いて、来年2月刊行予定で、大学教養課程向けの西洋史教科書を執筆しており、これも重要な社会還元である。

## 永井 和（現代史学専修教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 倉富勇三郎日記研究会編『倉富勇三郎日記』第1巻（編著）、2010.11、国書刊行会

## 【論文】

1. 「特集「近世化」を考える」によせて、『歴史学研究』836号、2008.1、pp. 35-39.
2. 「日比谷焼打事件と倉富勇三郎」、『立命館文学』605号、2008.3、pp. 147-175.
3. 「田中義一内閣時の朝鮮総督府官制改定問題と倉富勇三郎」、松田利彦・やまだあつし編、『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』、思文閣出版、2009.3、pp. 497-561.

## II. 自己評価

著書1は、日本近代史の重要史料であるが、難読をもってしられる倉富日記の1919、20年分を翻刻し、人物注釈をほどこしたものの。1934年分までの16年分を9巻にわけて出版する計画で、本巻はその第1巻。11人からなる倉富勇三郎日記の代表として翻刻、校閲、注釈のチェック、校正、解説の執筆を担当した。10年がかりの大事業である。

論文1は、前年発表した21世紀COEプログラムの研究成果「東アジアの「近世」問題」夫馬進編『東アジア中国外交交流史の研究』京都大学学術出版会が歴史学研究会の編集部の目にとまり原稿を依頼されたものである。拙稿の内容を紹介するとともに、歴史学研究の特集号掲載の論文にたいしてコメントを加えた。論文2は、自己の研究テーマである倉富勇三郎日記研究の一成果。東京控訴院検事長時代の倉富勇三郎日記を史料に、日比谷焼打事件をめぐる検察側の内情をはじめて解明した。日比谷焼打事件についての研究に新たな知見を加えると同時に、検事長の執務日誌という類例のない日記が存在することを明らかにした。論文3は、倉富勇三郎日記研究の一成果。1929年の朝鮮総督府官制改定問題をめぐる枢密院と内閣の交渉を倉富勇三郎日記を史料に解明すると同時に、重要な先行研究である岡本真希子の業績を批判した。さらに、官制上なぜ朝鮮総督は内閣総理大臣の指揮監督下になのかという、戦前日本の国制・植民地官制上の問題に新たな解答を与えた。

## 小野澤 透（現代史学専修准教授）

### I. 研究業績

#### 【著書】

1. 『アメリカ史のフロンティアⅡ：現代アメリカの政治文化と世界—20世紀初頭から現代まで』（共編著）、2010年、昭和堂

#### 【論文】

1. 「パフラヴィ朝イランと合衆国」、紀平英作編『アメリカ民主主義の過去と現在：歴史からの問い』、ミネルヴァ書房、2008年、pp. 227-267.
2. “The Search for an American Way of Nuclear Peace: The Eisenhower Administration Confronts Mutual Atomic Plenty.” *The Japanese Journal of American Studies*. No. 20. 2009. pp. 27-46.

#### 【書評】

1. 「渡辺昭一編『帝国の終焉とアメリカーアジア国際秩序の再編—』」、『社会経済史学』vol. 74、No. 2、2008年7月、pp. 99-101.
2. 「書評：佐々木卓也著『アイゼンハワー政権の封じ込め政策：ソ連の脅威、ミサイル・ギャップ論争と東西交流』」、『国際政治』154号、2008年12月、pp. 169-173.
3. 「書評：高橋博子著『封印されたヒロシマ・ナガサキ：米核実験と民間防衛計画』」、『ア

メロカ史評論』第27号、2009年11月、pp.46-53.

4. 「書評：倉科一希『アイゼンハワー政権と西ドイツ：同盟政策としての東西軍備管理交渉』（ミネルヴァ書房、2008年）」、『アメリカ研究』第44号、2010年3月、pp.141-146.

## II. 自己評価

過去3年間には、本来の研究領域である米・中東関係に関する論考1本の他に、核抑止態勢の成立に関する2本の論考を發表した。後者は、いわゆる単純抑止と拡大抑止の成立過程に関する新たな視点をそれぞれ提示したものであるが、冷戦前半期の世界秩序の分析という大きなテーマを考察する上で避けて通れぬ問題に取り組んだものであり、とりわけ核時代の米・欧関係を考察したことは、米・中東関係との比較史的分析を進める意味で、有益であった。今後は、核抑止態勢という時代の大きな背景を踏まえた上で、米・欧関係をも視野に入れつつ、米・中東関係に関する考察をさらに進めていくことが出来ると考えている。

## あとがき

2008年10月に刊行された『京都大学大学院文学研究科・文学部自己点検・評価報告書』には、2004-2006年度の教員の研究活動状況が掲載されている。本報告書はその後の教員の研究活動状況を示すものである。ただし2008年以降に着任した教員については、それ以前の業績が2005年までさかのぼって含まれている。したがって、前回と今回の報告書によって、第一期中期目標期間（2004-2009年度）に行われた現教員すべての研究活動状況が公開されることになる。

京都大学本部では、教員の研究内容が十分に外部に発信されていないことが問題にされていると聞く。京都大学ホームページには、本学の研究者の専門分野、研究業績など教育研究活動に関する情報を広く社会に公開することを目的とした研究者総覧データベースがあるが、文学研究科を含めて入力状況は悪く、十分に活用されていないようである。

もとより、内外の研究者や学会に向けて研究成果を発信することは、文学研究科の教員にとって日常の営みである。しかしながら、一般社会への発信ということになると、どうも億劫になってしまうのではないだろうか。他方、全学的には、恒例行事となった本学受験希望者を対象にしたオープンキャンパスだけではなく、大学で行っている授業を中学生向けに行うジュニアキャンパスや生涯学習の場であるシニアキャンパスといった機会が提供されている。このような状況を鑑みると、研究内容を社会にわかりやすく伝えるようとする取り組みが、大学全体として将来いっそう進められていくように思われる。

京都大学文学部は32の多彩な専修からなっている。2009年3月に実施された卒業生アンケートによると、志望専修を入学以前に決めていたという回答は30%にすぎない。文学部には入学してからはじめて出会う新しい学問分野が多くあり、そのような分野を選択する学生もいるのだから、これは驚く数字ではない。また、専修分属の時期を3年生の4月にしているのも、高校時代には未知だった世界を広く経験してから進路選択してほしいという配慮があるように思える。

その一方で、志望専修の決定にいたるまでに、それぞれの専修の特徴や魅力が在学生に伝わる機会が十分にあるといえるだろうか。1年生に提供されている文学部専門科目はごくわずかである。また志望専修を提出する時期は2年生の10月であるから、その判断材料となる専門科目を自由に受講できるのは2年生の前期に実質的に限られてしまうことになる。したがって、実際の授業だけを通して、各専修が培ってきた伝統を伝えることには無理があるように思える。

このような問題に文学部が気づいていなかったわけではない。以前から配布されている『文学部専修案内』（現在ではホームページで公開されている）や2年次秋の専修分属ガイダンスに加えて、2008年からは毎年夏に1年生のためのオープン研究室と夕方の懇親会が公式行事として設けられ、1年生が教員や先輩学生と交流する場となっている。このような取り組みにもかかわらず、現状で十分とはまだいえないであろう。思想、歴史、文学などの根底にある問題を学ぶために文学部に入学した学生や、将来学ぶことを志している高校生に、文学研究科・文学部の研究の魅力や教員の関心の所在を伝える工夫が今後もっとなされていいてほしいように思える。

2011年2月

京都大学大学評価委員会点検・評価実行委員会委員

吉田和彦